
Drastic Ghost

灰原旋律

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D r a s t i c G h o s t

【Nコード】

N 5 0 9 7 P

【作者名】

灰原旋律

【あらすじ】

『俺らの高校出るらしいぞ』

夏休み、藤森祐介は友達数人と夜中に自分の通う高校に足を踏み入れた。それをきっかけに彼の日常がガラリと変化する。目の前に広がる光景は果たして現実なのか！！そしてこの物語は果たして『コメディー』なのか！！それは藤森祐介のみぞ知る…。

第0話 プロローグですう（前書き）

この物語はしばらくの間コメディー要素が全くありません。

第0話 プロローグですう

どうしてこうなったのか。

どうしてこうなってしまったのか。

後悔したってもう遅い。

最早、後悔することこそが罪なのだ。

現実から目を逸らすなんてそれこそ極刑に値する。

自分の安易な思考が。

自分の安易な行動が。

全ての元凶なのだから。

そして全てが現実なのだから。

目に映る光景が僕の脳にインストールされていく。

拒絶しようとも。

無情にインストールをし続ける。

狂気が。

恐怖が。

絶望が。

混沌が。

徐々に僕の脳内に保存されていく。

そして全てが完了した時。

僕の日常も。

それは静かに。

アンインストールの完了を告げるのであった…。

第1話 何かいるですう（前書き）

まだまだコメディ要素はありませんね。

第1話 何かいるですう

あまり自己紹介と言うものは得意じゃないが、一応礼儀だから仕方ないよね。

僕は藤森 祐介。
ふじもり ゆうすけ

この間高校に入学したばかりの高校一年生。

…うん、このくらいで良いだろう。

僕あまり自分のことベラベラ喋るのって苦手なんだよね。

それに誇れるものが一つもないし。

だから自己紹介終わりっ！！

と言うより、実際のところ自己紹介なんてしてる状況じゃないんだよ。

その説明をするために、ちょっと話を戻しますね。

高校生になって初めての夏休み。

僕は実家を離れ、学生寮に住んでいた。

実家から高校まで結構距離があり、また、交通機関も充実していないため（僕住んでるところ田舎だから）実家から通うのが難しいのである。

だから門限に縛られることなく、遊べるのだ！！

ごめんなさい。

まあ、実際に僕は高校で仲良くなった友達数人と夜中遅くまで遊んでいたけどね。

そんな中、カラオケやボーリングなどで遊び尽くした僕たちが“次はどこ行くか？”と言う議題で話し合っていた時に、友達の一人がこんなことを提案してきた。

「心霊スポット行かねえ？」

“心霊スポット”。

言ってしまえば夏の風物詩と言っても過言ではない。

夏の暑苦しい中、背筋の凍るような緊張感とスリルを味わうことの出来る心霊スポット。

遊びを主とする高校生にとってそれは打ってつけだった。

その提案に友達のほとんどが賛成。

もちろん反対する人もいたが、その場の雰囲気の流れに流され、結局は行く羽目になる。

ちなみに僕はどっちでも良かった。確かに幽霊は怖いけど、僕は霊感とかそう言った類いのものは全く持ち合わせていない。

だからどうせ行ったらって幽霊を見ることだってないし、大丈夫だろうと思っていた。

僕たちの住んでる所には心霊スポットは五、六個程あり、それぞれの知名度もそこそこあった。

しかし、それぞれの心霊スポットの場所が今僕たちがいる場所からすぐ離れていて、最低でも車がないと行くことが出来ない。

もちろん僕たちは高校生だから車の免許なんて持っていない。

主に移動手段は自転車なのだ。

チャリ万歳。

さて、どうしたものかと僕たちは頭を悩ませていると、心霊スポットを提案した友達がこんなことを言った。

「俺らの高校出るらしいぞ」

そう静かに言ったのである。

その友達曰く、僕たちの高校が建っていた場所は、昔墓地だったらしい。それに僕たちの高校に通っていた先輩の中にも何人か“見た”と言う噂もあるんだとか。

まあ、僕たちの高校なら自転車で行ける距離だし、実際に見た人がいるからこそ、そう言う噂が立つわけである。

信憑性は薄い可能性はゼロではない。

正直近いと言うのが大きな理由になったのかもしれない。
僕たちは僕たちの高校に行くことにした。

とまあ、こんな感じで高校に行ってきたんだけど、結果的には空振りだった。

時間ももう丑三つ時なんてとつくの昔に過ぎていたし、その後すぐ解散になった。

え？

後半の説明省き過ぎ？

だってもう良くない？

幽霊出なかったんだし、特にそんな面白いこともなかったし。

…飽きたし。

あ、いやいや！！

アレだよ！？説明ばかりだったらつまらないでしょ！？

早く本題入ってほしいでしょ！？

こっちだつて入りたいんだよ！？

…以上説明終わり。

いやあ、しかし。

人間と言うものは本当に驚いた時や恐怖に陥った時、またその両方を兼ね備えた時には声が出ないと言うけれど、それはごもつともである。

僕は今、寮の二階の部屋、つまり僕の部屋のドアを開けたまま固まっていた。

本当に動けない。

言うなれば石像になってしまったかの如く、動けなかった。

“ある一点”だけを見つめて。

そして心底疑問に思う。

誰？

何？

何で僕見えてるの？

それで何で僕の部屋にいるの？

どこから来たの？

高校？

え？

高校にいたの？

じゃあ憑いてきちゃったの？

N A N D E ？

“それ”は服なのか良くわからないボロボロの布のようなものを身に纏い、胸より少し下まで伸びたボサボサの髪がガツクリと前に項垂れた頭を覆い尽くし、そのまま微動だにせず立ち尽くしている。

たったそれだけなのにも関わらず、負のオーラが僕の部屋を支配している。

怖い…。

存在感が半端じゃない。

僕は完全に圧倒されていた。

目の前の“それ”に。

ただ立っているだけの“それ”に。

目を逸らしたくても逸らせてくれない。

体を動かしたくても動かさせてくれない。

僕も部屋の一部のように“それ”の放つ負のオーラに支配されていた。

その時！！

項垂れていた頭が突然前を向き、僕を見た。

僕と…目が合う…。

髪で顔の大部分は覆われていたが、その隙間から垣間見られる目はジッと僕を睨み付けていた。

もう僕は限界だった…。

恐怖で押し潰されそうになっていたが、それももう限界だった。」「うわあああああああああ！！！！！！」

真夜中に僕の大絶叫が木霊する。

そしてそれが引き金になったのか、全く動かなかった体がすんなり僕の命令に従い、その場から逃げるように飛び出した。

その時、一階に繋がる階段で足を踏み外してしまい、僕は文字通り転がるように一階まで落ちていった。

そこで僕の意識は途切れたのであった。

第2話 幽霊ですう（前書き）

まだまだコメディー要素はありませんね

第2話 幽霊ですう

……ん。

…ふあ…あ…

…はあ…

…あれ…？

自分の部屋…？

い…っ…！！

体中が痛い…

あ、僕昨日幽霊見て…それで驚いて…階段から落ちたんだ…。

でも何で僕ベッドで寝てたんだ？

僕はそう思いながらズキズキ痛む体をゆっくり起こし、辺りを見回した。

そして再び衝撃が走った。

僕から見てベッドの右側に、昨日僕の部屋に現れた幽霊がうつ伏せになっていた。

微かに寝息が聞こえるところ、恐らく寝ているのだろう。
…？。

…幽霊って寝るの？

僕はそんな些細な疑問を抱いてしまった。

もっと大きな疑問が目の前にあると言っているのに。

そして一度味わった恐怖が、再度僕を襲った。

「な、なん…で…、いる…の…？」

また昨日のように恐怖で体が動かなくなってしまったが、何とかする声を振り絞り、僕は言葉を発することが出来た。

こんな些細なことでも僕にとっては大きなアドバンテージだった。声を出すことが出来るなら助けを呼ぶことが出来る！！

幸い、部屋の窓が開いているし…。

僕はそう思い、大声を出そうとした瞬間、モゾッとそれが動いた。

「……！」

僕の中で一気に緊張感が最高潮になる。

些細な行動だろうが、大胆な行動だろうが“それ”が行動を起こす度に僕の行動に制限が掛かってしまう。

さっきまであった僕のアドバンテージがものの見事に失われてしまった。

口の中の水分が失われ、喉がカラカラになる。

そしてそれに反比例して、汗が頬を伝って流れ落ちる。

そんな状況の中、僕はただ“それ”を見つめることしか出来なかった。

しかし次の瞬間、緊迫した雰囲気にな釣り合いな声が僕の耳に入り込んできた。

「ふわあああ……ん？あれ……？あたし寝ちゃってましたあ？」

“それ”はムクツと体を起こし、ポリポリとボサボサ頭を掻きながら眠気眼でこちらを眺めていた。

「あ、おはようございます。体の方は大丈夫ですか？あんなところで寝てたら風邪引いちゃうと思ってあたしがここまで連れてきたんですよー。感謝してください。えっへん」

「うわあああああ！！喋った！！僕に喋った！！怖い！！怖い！！コワイ！！こわい！！KO・WA・I！！」

僕はあっさりと取り乱してしまった。

“緊張”と言う氷属性の魔法を掛けられ凍り付けにされた後に、“喋る”と言う攻撃を受けて体が粉々に砕け散るように。

そして粉々に打ち砕かれた僕の精神を繋ぎ止めるものはなく、僕は狼狽える。

一刻も早く逃げ出したい……。

その思いが僕の精神を復活させる唯一の術だった。

僕は掛け布団を乱暴にふっ飛ばし、部屋から出ていこうとした。

「ま、待ってください！！逃げないでくださいよ！！」

その時、僕のズボンの裾を“それ”が掴み、僕はバランスを崩し

てだらしく転んでしまった。

「イテテッ…」

僕は顔を強打してしまった。

「ご、ごめんなさい！！だ、大丈夫ですか…？」

僕は強打した顔を擦りながらその場でうずくまっていると、
“それ” が立ち上がって僕の方に歩み寄ってきた。

僕はそこで初めて“それ”の顔をしっかりと見た。

ボサボサの長い黒髪に隠れていたその顔は、想像していたものとはまるで違い、少し幼さが残るとても可愛らしい顔立ちをした女の子だった。

一番驚いたのが“目”である。

昨日僕を睨み付ける目は明らかに狂気と憎悪に満ち溢れていた。
目玉が飛び出るほどバツと見開かれたその目は、真っ赤に充血していて不気味　　と言うより恐怖そのものだった。

実際に僕、殺されると思ったし…。

でも今僕の目に映るのは、若干つり目のパッチリとした大きくて綺麗な瞳だった。

「驚かせてごめんなさい…」

その女の子は泣きそうな表情を浮かべながら申し訳なさそうに深々と頭を下げた。

「…え？あ、うん…」

昨日とはまるで違う女の子の態度に戸惑いながらも僕はそう返した。

何この謙遜っぷりは。

一人で騒いでた僕が馬鹿みたいじゃないか。

僕はそう思うことで無意識に少しずつ精神を構築する。

「あ、あたしは桜井^{さくらい} 奈緒^{なほ}って言います。見ての通り…、幽霊です」
その女の子の幽霊　　桜井さんはそう小さく挨拶をする。

良く見たら、申し訳なさそうな様子、と言うより少し照れているような感じだった。

「あ、あの、やっぱり…僕に憑いてきたの…？」

僕は恐る恐る桜井さんにそう問い掛けた。

昨日からの最大の疑問。

“何故僕の部屋にいるのか”。

僕はそれを知りたかった。

むしろ僕には知る権利がある！！

フンスッ！！

「はい…。あなたが昨日来た学校から憑いてきました…」

チラチラとこちらの様子を伺いながら桜井さんはそう言った。

「…何で？」

続いて動機。

「え！？あ…、それは…」

桜井さんは僕の問い掛けに突然口ごもる。

何だ？

どうして口ごもる？

何か後ろめたいことでもあるのか？

…まさか！？

「もしかして…、僕を呪いに來たの…？」

僕は意を決して桜井さんにそう問い掛けた。

ぜ、絶対そうだ！！

だって夜の学校は出ると言う噂があつた。

言わば心霊スポット！！

そんな幽霊たちが集う聖地に僕たちは土足で足を踏み入れてしま

ったんだ。

当然幽霊たちは怒るだろう。

当然幽霊たちは呪うだろう。

これは当然の結果なんだ…。

こいつは僕を呪いに來たんだ！！

「あたし、そんなことしませんよ。あなたを呪うわけじゃないじゃないですか」

ブルブルと震えながらうつづくまる僕に対して、桜井さんは優しく頭を撫でる。

ひんやりとした感触が頭を包み込む。

「あたしはただ、あそこにずっといることに飽きただけです」
は？

飽きた？

だから僕に憑いてきた？

WHY？

「あなた方をあの時間、つまり丑三つ時に見つけたのは本当に運が良かったです」

あ、この事説明してなかったね。

僕たちがあの学校を出た頃が大体二時過ぎだったんだ。
補足終了。

桜井さんは更に続ける。

「正直あたしも詳しくはわかりませんが、夜中の午前一時から三時までの間のことを丑の刻と言い、その中でも午前二時から二時半の間を丑三つ時と言います。これを方角で表すと東北になるんです。その方角には鬼門と言うものがあり、そこは鬼や魔物、幽霊などが現れたり、また黄泉の国や霊界の門が開くと言われています。つまり丑三つ時はあたしたち幽霊にとって活動の幅が広がる…みたいな感じに捉えてもらって結構です」

「は、はあ…」

僕は桜井さんの突然の謎の説明に混乱しながらも耳を傾けていた。
「あの学校の玄関はちょうど鬼門の位置にあるんですが、どうもあたしたち幽霊はあの玄関に触ることが出来ないのです。これはあたしにも理由がわからないんですけど」

「つまり君たち幽霊は人間の手によってあの玄関が開けられない限り、あの学校から出れないと？」

良くわからないけど。

「はい。あの学校に残ってる幽霊たちにとって、鬼門の方角にある学校の玄関は、言わばこっちの世界とあっちの世界を繋ぐ玄関みたいなものですからね」

桜井さんは頭をポリポリと掻きながらそう言った。

頭痒いのかな？

まあ、幽霊だし、お風呂なんか入れるわけないもんな。

いやいや、今はそんなことどうでも良い！！

まだ肝心の答えを聞いていない！！

「じゃあ運良くその時間帯に僕たちが玄関を開けて、君はその隙に出たわけだよね？」

「はい、そうです」

「じゃあ何で成仏してないの？」

もし桜井さんの言うことを信じるなら、学校を出た時点で黄泉の国だか霊界だか知らないけれど、とりあえずそこへ行ける筈なのだ。つまり成仏出来るのだ。

なのにも関わらず、桜井さんは今、僕の目の前にいる。

成仏せずに。

僕の目の前にいる。

正直可愛い…。

頭ボサボサだけど。

「そ、それは…」

桜井さんは再び口ごもる。

「やっぱり僕を呪うため？」

「違います！！」

「じゃあ何で？」

僕はなかなか話そうとしない桜井さんをジッと見つめて返答を待った。

「その…、あんまり見られると恥ずかしいですう」

そう言いながら桜井さんは俯いてしまった。

それによつて髪で顔が見えなくなる。

「…友達になりたくて」

桜井さんは聞こえるか聞こえないかと言つくらい小さな声でボソツと呟く。

まあ、僕にははっきり聞こえたけど。

と言うか。

え？

いやいや、ちょっと待つて。

僕たち何も接点ない。

会つたのだから昨日が初めて。

会話なんてついさつきしたばかりだよ。

友達になりたい？

何言つてんだこの幽霊は？

と言うか。

本当今更だけど、僕って靈感あるんだね。

てへっ。

「は？」

とりあえず僕は文字通り一言声を発した。

「あたしと友達になつてください！！」

桜井さんはバツとこつちを向いてはつきりとそう言った。

「ええええええええええええ！！？」

何か僕叫んでばかりだなあ。

第2話 幽霊ですう（後書き）

あれ？

夜中に学校の玄関開いてるって…。

僕の高校セキリティー面どうなの？

第3話 友達ですう（前書き）

もうちょうとでコメディー要素が入りそうですね。

第3話 友達ですう

長いねえ。

本当にこれ『コメディー』のカテゴリで良いのかなあ？

『ホラー』でも良いんじゃない？

ほら、僕最初の方絶叫してるし。

早くコメディ的な内容にならないかなあ？

「友達になってください！！」

そう僕にはつきりと言ったボサボサ頭のロングヘアの幽霊こと
桜井奈緒。

未だに僕の目をジツと見つめて微動だにしない。

「ええ！？な、何で！？」

僕は当然と言えば当然の反応をする。

きつと幽霊に友達を志願されることなんて後にも先にもないだろ
う。

しかも女の子の幽霊だし。

ボサボサ頭だけど正直可愛いし。

ぶっちゃけ嬉しいのか嫌なのか良くわからない。

「あたし、今までずっとあの学校にいました。ずっとずっとずっ
つといました。他の幽霊たちともずっといました。ずっとずっとず
ううといました。何の変化もなく、同じ幽霊たちと同じ場所で過
してきました。あたしはもうそれに飽きたんです。今こうしてあの
学校から抜け出せて、成仏する道もありましたけど、あたしはもっ
というんなものを見てみたい。もっとというんなことしてみたい。あ
たしは死んじゃって幽霊になっちゃいましたけど、現世でまだやり
残したことがたくさんあるんです。だからあたし、まだ成仏はした
くないんです。お願いです！！あたしと友達になってください！！

そうしたらあたしの世界は一気に広がる気がするんです…。だから
お願いします!!」

「……………」

何と言つか、桜井さんからすごい必死さが伝わってくる。

それほど今までの生活に飽きていた　と言っより、もう限界だ
ったのだろっ。

何もすることがないと言っことは、実はとても辛いものだ。

ましてや、あの学校にずっと監禁されていたとなるとそれはきつ
と拷問と言っても良いくらいに。

こんな僕に土下座なんてしてまで懇願している桜井さんの姿がそ
れを物語っていた。

「ちょ、ちよっど頭上げてよ」

さすがに土下座までして頼まれると僕も困る。

「自分勝手な頼み事だと重々承知しています。でも頼れるのは…、
あなたしかいないんです…。どうかお願いします…」

桜井さんは僕の言葉に全く聞く耳を持たず、尚も僕に頼み込む。

「えゝつと、桜井：さん？」

僕はそう言いながら丸まった桜井さんの背中をポンポンと叩く。
て言っか幽霊に触れる!!

え!?

幽霊っで触れるの!?

「はい…」

桜井さんは僕の言葉に反応し、ゆっくりと顔を上げた。

悲しい表情を浮かべ、僕から目を逸らす。

目の回りが赤くなっっていた。

泣いていたのかな?

別にそんな泣くことでもないと思っんだけど…。

「良いよ。僕で良かったら友達になろっ」

僕はそんな悲しい表情を浮かべている桜井さんに向かつて出来る
限り精一杯の笑顔でそう告げた。

「え…？ほ、本当ですか！？」

桜井さんは僕の言葉に驚いた様子だった。

その証拠に目を大きく見開いたまま固まってしまっていた。

「うん、良いよ。それに幽霊から友達になろうなんてこんな貴重な体験、滅多に出来ないからね。そんな体験が出来た僕は多分、人生の階段を二段飛ばしで駆け上った感じがするよ」

そりゃあポンポンと跳ね馬の如く。

えへへー。

「ありがとうございますー！！！！」

僕が心の中でそれはそれは愛くるしく笑っていると、突然桜井さんが僕に抱き付いてきた。

「うわっ！！ちよっ、ちよっと！！」

突然の抱擁に戸惑いつつも、僕はしっかりと桜井さんの柔らかさを体感した！！

冷たかった…。

でも柔らかかった！！

特に胸が。

…僕だって男なんだから仕方ないでしょ。

僕は女の子に免疫がないんだ！！

「あー！ご、ごめんなさい！！あたしったらつい…」

桜井さんは我に返り、慌てながら僕から離れた。

恥ずかしさのせいかな、若干頬に赤みが帯びていた。

「あたし嬉しくなると理性が吹っ飛んじやうですよ」

振り子のように上半身を左右に振りながら桜井さんはニコニコしていた。

「あ、ああ、そうなんだ」

僕はまだ少し戸惑いながらそう答える。

…待てよ？

てことはだ、桜井さんを喜ばせれば抱き付いてくれると言っただよな？

うん、良いことを聞いた。

僕は心の中でガッツポーズをした。

「それじゃあ改めまして。本日からこの部屋にお世話になります桜井奈緒です。幽霊ですがよろしくお願いします!!」

桜井さんはビシッと警官の如く、綺麗な敬礼を決めながらそう言った。

「はい、こちらこそよろし…は？」

え？

ちよつと待つて？

今何て言ったこの幽霊。

「桜井さん、今“この部屋に”って言った？」

「はい!!友達になったので成仏出来るまでこの部屋にお世話になることにしました!!」

あら、なんて立派な敬礼なんでしょう。

「ええええええええええ!!?」

やっぱり僕、叫びすぎだよね。

第4話 お世話になりますう（前書き）

次からコメディークに書ければと思います。

第4話 お世話になりますう

突然現れて、突然友達宣言して、突然同居を希望したボサボサ頭のロングヘアー幽霊こと桜井奈緒。

床にちよこんと座りながら笑顔で振り子のように上半身を左右に振っている。

それはもう楽しそうに。

それはもう嬉しそうに。

「やったですう。友達出来ちゃったですう」

ランラン と歌まで歌っちゃったりして。

しかしそんな桜井さんの姿を尻目に僕は今一度冷静になって考えた。

確かに僕は友達になろうと言った。

しかしそれが何故“同居”に繋がるんだ？

幽霊と言っても女の子だよ？

仮にも僕は男なんだよ？

一つの部屋に男女が一緒に住むっているまじいんじゃないの？
うわっ。

何か生々しい…。

と言うより桜井さんはそれで良いの？

危機感とかないの？

自分は幽霊だから大丈夫だと高を括くっているのか？

それに付け加えて、僕が草食系男子だと思われてるのか？

確かに僕は虫も殺さないような人だと言われたことがあるけど。

僕だって男なんだぞ！！

やる時はやるんだ！！

“そもそも僕は幽霊に対して何かイヤらしいことをしようとしてい

るのか？”

結論。

桜井さんに決めてもらおう。

「さ、桜井さんは良いの？」

「何がですか？」

桜井さんは振り子運動を止め、きょとした表情をした。

「いや、ここにお世話になるってことは僕と一緒に生活するってことだよ？」

「はい、そうですね」

そうですね って…。

「男と一緒に生活するってことだってわかってる？」

…生々しいなあ、この言葉。

何か本当に昨日から人生の階段を最早ブリッジ状態で駆け上がってるなあ。

「あたし、女である以前に“幽霊”ですから大丈夫です」

「……………」

さっき僕が考えてたこと、フラグになってたんだなあ。

「それに、え〜っと…」

桜井さんはちよつと困惑した表情を浮かべながらこちらをチラチラ伺う。

ん？

突然僕のことチラチラ見てどうしたんだ？

「どうしたの？」

僕はとりあえず聞いてみた。

「すいません、よろしければ名前教えてもらえませんか？」

あ、大事なこと忘れてた。

僕ってばうつかりさん。

「あ、僕は藤森祐介」

僕がそう教えると桜井さんの表情がパツと明るくなり、ニコツと笑う。

「祐介さんはそんな人じゃないって思ってますから」
また語尾に音符マーク。

どれだけ喜んでるんだよ…。

ん？

もしかして僕のこと好きなんじゃね？

「はい！！祐介さんのこと好きです！！」

僕はその言葉に驚き、咄嗟に桜井さんの方を見た。

桜井さんは優しく、何とも言えない可愛い笑顔を僕に向けていた。

思わず僕はドキツとしてしまった。

か…。

可愛いー！！

…じゃなくて。

何で僕の思ってることがわかった！？

この人（幽霊）エスパー！？

「だって幽霊のあたしと友達になってくれた上に、ここにお世話になることを了解してくれた祐介さんを嫌いなわけじゃないじゃないですかあ」

あ、もう僕と一緒に生活するって決まったんだ。

僕、いつ了解したわけ？

と言うより。

やっぱり“好き”ってそういう意味だったのね。

そうだよ。

昨日会ったばかりで恋愛感情が芽生えるなんていくら何でもないよなあ。

良かったー。

もし恋愛に発展したらこれ『恋愛』カテゴリに移動しなくちゃいけないかったもんなー。

『この物語は、人と幽霊の禁断の恋を綴る切なくも哀しいラブストーリーである』

…あらずじの時点でつまないでしょこれ。

まあ、作者さんの文才の無さも関係してるけど。とりあえず。

友達として好きと。

そう言うことになります。

何か…、ちよつと残念。

「じゃあもう僕に選択権はないと言うことで」

僕はそう言いながら桜井さんに手を差し出す。

「これから桜井さんが成仏するまでの間、よろしくお願いします」
桜井さんは僕の差し出した手を見つめて、そしてニコツと笑い。

「こちらこそよろしくお願いしますう」

僕の手を軽く握ってそう言った。

こうして、僕の日常がガラリと変化した。

僕にとってこれが吉と出るのか凶と出るのかわからない。ただ。

何となく。

退屈はしなさそうだ。

第5話 買い物ですう

「とりあえず桜井さん、着替えない？」

床にちよこんと座っているボロボロの布のようなものを一枚身に纏ったボサボサ頭のロングヘアー幽霊こと桜井奈緒さん。

今思うと、桜井さんが着てる（纏ってる？）のって布一枚なんだよなあ。

ホームレスでもこんな格好してる人なんていないだろう。

と言うか、その布の下は…。

いや、失礼だ。

自制心を保て僕！！

僕は決して桜井さんに対してイヤらしい気持ちになったりしないぞ！！

フンスツ！！

「やっぱりこんな格好じゃ、祐介さんに失礼ですよね…」

桜井さんはボサボサ頭を掻きながら照れ笑いをする。

ちようど体全体を覆い尽くす一枚の布。

その布の切れ目から桜井さんの綺麗な足が覗かせている。

肌白いなあ。

…はっ！！

ダメだぞ！！

自制心を保て僕！！

「失礼ではないけど…、いろいろ困るでしょ？一枚の布じゃあむしろ僕が。」

「そうですねえ、確かに困ります」

「でしょ？」

「はい」

じゃあちよつと待っててと、僕はクローゼットに向かった。

…ま、まともなやつがないではないか。
全部ヨレヨレだ。

と言うより。

僕は可愛いくまさんの上に“PERFECT BEAR”の文字
がプリントされたヨレヨレのＴシャツを持ちながら絶望した。

服のセンス…。

「桜井さん、服買いに行こう!!」

と言うわけで。

僕と桜井さんは駅前のデパートにやって来ました。

「うわぁ、すごいですね!!人がいっぱい…。何か興奮します!!」

桜井さんは人がたくさんいる所では興奮するの？

そんな興奮している桜井さん。

彼女は今、僕の着ているＴシャツの“デザイン”としてこの場に
いた。

ん？

どう言うことって？

簡単に言ったら根性ガエルのピョン吉みたいなものです。

別に普通のままでも僕にしか見えないんだけど（靈感ある人なら
見えちゃうかも）、何かそっちの方が面白いから。

うん。

周りの目なんて気にしない。

そうこうしている内に、女物の服が売っている階に到着した。

うわぁ…。

予想はしてたけど、僕すっげえ場違いだなぁ。

何かギャル多いし。

怖いなあ。

「この服とか超可愛くない!？」

「ヤバイねこれ!!この可愛さマジヤバイ!!」

…あんたの化粧の濃さヤバくない?超ウケるんですけどおー。

僕はこのようにして、日々頭の中で気に入くわない人を罵ってるんです。

はい。

陰気な奴なんです。

「祐介さん!!祐介さん!!」

「ん?桜井さんどうしたの?」

「あのワンピース可愛くないですか!？」

ん?

どれ?

そう思いながら僕は桜井さんの視線の先に目を向けた。

そこにはドレスのようなピンクの花柄のワンピースがあった。

確かああ言うのは“マキシワンピース”と言うやつだ。

「んゝ、ごめん。僕あんまりファッションに興味ないからちょっとわかんないなあ」

でも桜井さん似合いそう。

「本当ですか!?きやはっ」

『きやはっ』いただきました。

と言うかまた心読まれた。

…。

これからあんまりエツとおおっと危ない危ない。

とりあえず止めとこう。

「じゃあこれに決めますね」

意外にあっさりと決まったなあ。

女の人って買い物すごく長いって聞いたけど。

「あとは良い?」

僕は桜井さんにそう聞く。

さすがにワンピース一着つてのも可哀想だし。

僕のお人好しって…、罪だよなあ。

「それじゃあえ〜っと…」

僕のＴシャツの中で桜井さんはキョロキョロと店内を見回す。
周りの目なんて気にしない。

「じゃああのＴシャツで」

僕は再び桜井さんの目線の先目に向ける。

そこには何ともシンプルな淡いブルーのＴシャツがあつた。

てかこれ…でかくない？

「ゆるく着たいんですよ」

「なるほど」

意外に大きい胸を隠すため…なのかな？

「え！？大きい胸！？そ、そんな褒めたって何も出ませんよ！？あ、
Ｔシャツから出れますけど」

それボケたの？

ん〜、イマイチ…！

「あははー」

僕完全に愛想笑い。

「じゃあこの二着で良い？」

「ん〜」

桜井さんは暫く店内をを眺めて。

「はい、よろしいです」

笑顔で言つた。

僕は桜井さんが選んだ服をレジに持つて行つた。
ちよつと恥ずかしい。

男が一人で女物の服を買つと言うこの状況がちよつと恥ずかしい。
店員もきつところ思つてるだろう。

『強靱な精神力！』と。

そんなことを勝手に想像してると店員が僕に金額を告げた。

「二万九千円になります」

…。

高くね？

第6話 ご飯食べますう

「祐介さんどうですか！？似合いますか！？」

先ほど買ってきたワンピースとダボつとしたＴシャツを着て喜んでるボサボサ頭のロングヘアー幽霊こと桜井奈緒さん。

寮に帰ってきてからクルクル回ったり、走り回ったりとすごいしやいでる。

「似合ってるよ」

僕は若干疲れた様子でそう答えた。

「きゃあー！！『似合ってる』いただきました！！『似合ってる』いただきましたあー！！」

桜井さんはそう叫びながら七畳くらいしかない僕の部屋の中でそれはそれは激しく暴れました。

「さてと」

桜井さんはそう一言言って先ほど着たばかりのワンピースとＴシャツを脱ぎ始めた。

「！？ちよ、ちよつと桜井さん！？何してんの！？」

Ｔシャツを脱ぎ、ワンピースを脱ごうとする瞬間に僕はストップを掛けた。

僕の目の前だよ！？

何を考えてるの！？

桜井さんが大勢の人を見て興奮するなら、僕は桜井さんを見て興奮するよ！？

「これはお出掛け用のお洋服なので、部屋着に着替えようかと思ひまして」

「だったら僕のいないところで着替えてよ」

僕はそう言いながら、桜井さんを脱衣所まで連れていった。

「ふう…、やっぱりこれが一番落ち着きますー」

桜井さんは布を身に纏い、床にちょこんと座る。

それが一番落ち着くんだ。

僕は一番興奮するよ。

「あ、桜井さん、お腹空かない」

僕はそう言いながら壁に掛かっている時計を見る。

気が付けば、もう六時半を回っていた。

…と言うか。

自分で聞いて何だけど、幽霊ってご飯食べるの？

「あ、食べますー」

食べるんだ。

じゃあ今までどうやって生きてきたんだ？

あ、幽霊にしたら“生きて”なんて矛盾してるか。

「何食べる？」

「牛乳を温めた時に出来るあの膜みたいなやつが食べたいです」

うん。

それはきつとご飯以前に食べ物分類に入っていないよ桜井さん。

何で桜井さんのお腹はそんなものを欲しているんだい？

「ごめん、今牛乳ないんだ。だから出来れば違うやつが良いなあ…」

よし！！

これは上手い逃げ方だ。

と言うか僕牛乳飲むとすぐお腹痛くなるからな。

飲まないんだ、牛乳。

「うーん、じゃあメロンパンの硬いところが食べたいです」

…何でさっきから変なのばかりリクエストするの？

初期のキャラ早くも崩壊？

いや、確かにメロンパンの硬いところは美味しいけれども。

主食がそれ？

いや、百歩譲って“メロンパン”が食べたいって言うんなら認めよう。

でも硬いところ限定と言うのなら、僕は認めないぞ。

残されたメロンパンの部分の気持ちを考えたら…。

僕は認めることは出来ないよ…。

「うん…、とりあえず僕何か作るから、桜井さんお風呂入ってきたら？」

僕はこれ以上変なものの要求されないよう、とりあえず桜井さんをお風呂へと促す。

幽霊がお風呂に入れるかどうか分からないけど。

ご飯も食べれるみたいだし、入れるだろう。

「はい」

ずいぶんと素直だなあ。

だからってここで脱ごうとするぬうわああああ！！

「ダメダメ桜井さん！！脱衣所で脱いでよ！！つかあんたわざとやってるでしょ！？」

今日は理性が忙しいなあ。

「えへへー。ごめんなさい」

その言葉とは裏腹に、桜井さん満面の笑みを浮かべている。

反省の色が全くない。

僕桜井さんに遊ばれてるの？

例えるならあのセレブな人たちがこう、ワインの香りを楽しむ時のワイングラスのように。

足組んでさ、ワイングラスのクルクル回すじゃんか。

僕絶対そのワイングラスだべ。

「じゃあお風呂入ってきますね。あと…」

桜井さんは脱衣所のドアを開けて足を止めた。

「オムライス…食べたいですっ」

そう一言投げ掛けて脱衣所に入って行った。
やっとなともものが来た。

良かったー。

そう思いながら僕はベッドに倒れ込んだ。

でも僕、オムライス作れないんだよね。

第7話 眠かったんです

どうにかこうにかオムライスを作ることが出来た。
人間やる気と根性とインターネットがあれば大概のことは出来
ます。

んで、今は食事が終わってまったりとしていますよと。

「お腹いっぱいですー。祐介さんお料理上手ですねー」
床にゴローっと寝そべって自分のお腹をポンポン叩く綺麗なロン
グヘアー幽霊こと桜井奈緒さん。

そう。

今はボサボサ頭じゃあないんですよ。

お風呂入ったからね。

それはそれはもう、世界が嫉妬してるほどの綺麗な髪ですよ。

あのシャンプーのCMあるじゃんか。

全員が全員、無駄に艶やかな髪してるやつ。

まさにあんな感じ。

絶対クシを通して引つ掛からないよ。

ボサボサ頭は単に手入れしてなかったただけなんだね。
て言うか。

お風呂上がりの桜井さん。

可愛いのに加えて色っぽさも兼ね備えられてる。

湯上がり美人とは良く言ったものだなあ。

“桜井さん蕩れ”。

「そう言えば、桜井さんって初めて見た時と全然印象違うね」
僕は床で『オムライス美味しかったよぉー!!』って言いながら

駄々っ子のように手足をジタバタさせてる桜井さんに言った。

何その喜び方。

「そうですか？全然変わってないと思いますけど」

桜井さんは顔を僕の方に向けて言った。

「あ、でも今はボサボサ頭じゃないですからね。今頃世界は嫉妬で気が狂ってると思いますよ」

それさっき僕言ったよ。

気が狂うとまでは言っていないけど。

「でも、僕初めて桜井さん見た時は怖くておしっこ漏れそうだったんだよ」

大胆なるカミングアウト。

『この物語は、男子高校生が自分の部屋で尿意と奮闘する日々を赤裸々に綴った物語である』

いろいろ違うだろ？

これじゃあ僕が毎日尿意と闘ってるみたいじゃないか。

僕の膀胱の容量は700mlです。

「うっそー、あたしそんな祐介さんを怖がらせた覚えなんですよ？」

「うっそー、だって黙って立ってたらいきなりバツてこっち向いて

睨んでたじゃん」

ありゃトラウマだよ…。

「ああ、あれですか」

この後、桜井さんの口から思いもよらず衝撃的事実が明らかになる！！

…CMいかないよ？

僕にスポンサーなんて付いてないよ？

「あれは“寝てた”んですよ」

寝てた？

立ち寝？

寝ながら立ってたの？

ノンフィクション？

あ、『ん』がついちやった。

しりとり終了だ。

「あたし立ったまま寝れるんですよー。数少ないあたしの特技です」
…そんな親指立てた右手を高らかに上げられても。

そんな誇れる特技じゃないですよ桜井さん。

「あの時、立って寝てたら突然部屋の電気が点いて、でもあたし寝ぼけてたから反応が少し遅れたんです」

なるほど。

てか“なるほど”って僕納得してるけど、つつこむべきじゃないの？

とりあえず総合的に“何でやねん”と。

…まあ、良いや。

「で、『まぶしっ』って思いながら前見たら何とー！祐介さんがいるじゃないですかあー」

「…そんなテンションだったの？」

「はい」

…あ、そう。

「でもあたし寝不足で、すごい眠かったんですよ」

あー！！

だから目充血してたのかー！！

…僕、良くもまあそんなくだらないことにビビってたなあ。

オチャメな僕

「だから祐介さんが慌てて飛び出した頃にはあたし二度寝してました」

おい！！

二度寝すんなー！！

せめて僕を追い掛けてこいよ!!

「マイペースですからあ」

謎に天井に向かってピースをする桜井さん。

そんな桜井さんに苦笑しながら僕はベッドに仰向けで寝転んだ。

何か…

拍子抜けだな。

確かに話を聞いたら何も怖くないもんな。

立って寝てたとか。

そんなの瞬時に予測出来る奴っていないもんな。

『やべえ、あいつ立ったまま寝てるよ、マジパねえ。つか腹減んね

？』

みたいな。

そんな僕の思考をよそに、桜井さんは『暑いですー』とか言いながら寝転んだ状態でバフバフやってる。

ん？

バフバフ？

「桜井さん何やぬうわあああ!!何やってんの!!?何羽ばたこうとしてるの!!?布は翼じゃないよ!!飛べないよ!!」

…あえて言わせてもらおう。

ありがとう。

第8話 暇ですう

皆さん、おはよう。

やっぱり挨拶は礼儀だからね。

やっておかないと。

さて、桜井さん起こすか。

「おーい、桜井さーん。朝ですよー。桜井sうわあああ!」

そ、そんな!!

突然目を見開かないでよ!!

ただでさえ僕起きた時立って寝てる桜井さん見て『うわっ、誰かいる!!』って思っちゃったんだから。

更にトラウマの穴を広げないでよ。

「おはようございますう」

そんな立ち寝の達人幽霊こと桜井奈緒さん。

「あ、そう言えばですよ」

二人で朝食を食べてる最中、桜井さんが僕に話し掛けてきた。

ベーコンと目玉焼きとサラダ、そしてトースト。

トーストの上にベーコンと目玉焼きとサラダを乗つけて食べるのもよし。

トーストにあえてバターを塗ってベーコン（以下略）を別で食べるのもよし。

実に多様性の溢れた朝食である。

「祐介さんて彼女いるんですかあー？」

…。

本当この人（幽霊）、わざと言っててるのか、本気で言ってるのかわからないけど、平気で人の心を抉るよね。

あえて自分で言わせてその現実を再認識させるそのやり方。
実に巧妙です。

「い、いいいです……」

ああ、いいいよ……！

ああ、いいいさ……！

むしろいてたまるか……！

出来たことすらないよ……！

「へえ、そうなんですかぁー」

桜井さんは自分で聞いておきながら、特に興味もなさそうに言う。
桜井さんてちよつとSっ気があるのかな……？

「あ、大丈夫です。あたしは真性のドMですから」

ああ、そう……。

「でも、彼女いないことには驚きです」

ベーコンをしゅるりと口に滑らせながら桜井さんは言った。

だったらもうちよつとそれっぽいアクションして欲しかったな。
真顔の棒読みで言われて“驚いてる”って誰が思う？

完全に『あんたじゃいなくて当然だよね』あつはつは『的な感じ
だったべ。

まず驚いてたなら態度で示してください。

「何でそう思うの？」

とりあえず理由を聞いておこう。

期待はしてないけど。

「だって背が高いですし、顔も割と整ってますし、優しいですしね」
何を基準に“背が高い”って言ってるのかな？

僕は身長165cmだ……！

寝ぼけてんのかこいつ。

つと、言葉遣いに乱れが生じてしまった。

気を付けよう。

「寝ぼけてませんよう。まあ、身長に関しては冗談ですけどね」
ごめんなさいと、一言笑顔で謝り、目玉焼きを食べる桜井さん。

「でも、あたしは良いと思いますよ？祐介さんのこと」

え…？

本当に？

ちよつと待つて、僕素直に嬉しいんだけど。

フラグか！？

恋愛フラグ立ってんのか！？

「あ、ありがとう…」

僕は恥じらいながらお礼を言った。

「えへへー、どういたしましてっ」

桜井さんはいつもの可愛らしい笑顔でそう言った。

「暇だねー」

「そうですねー」

僕は床に、桜井さんはベッドにそれぞれ横たわり二人でまったりしていた。

窓の外からはセミが忙しそうに鳴いている。

「みーんみんなみんなみー。みーんみんなみんなみー」

あれれー？

この部屋、セミがいるよー？（コン風に）

「桜井さんどうしたの？」

まあ、それは桜井さんと言うセミなんですけどね。

「いや、こんな暑苦しい中、ひたすら鳴いているセミはどんな気持ちなんだろうと思ひまして」

セミの気持ちになつてみたど。

「で、鳴いてみてどうだった？」

「『みーん』って思ひました」

結局わかんなかったんかい！！
うーん。

でも実際どうなんだろう。
ちよつと考えてみようか。

『どうよ俺のこの音色！！ヤバいだろ！？』

『いやあ、あっちいーな』

『俺、この夏が終わったら、人間に生まれ変われるかな……』

『不況だなあ……』

『あの子の羽、良い色してんな、ありやあ世界も嫉妬するぜ』

『だるい、死のう』

『暑い、逝こつ』

『みーん』

まあ、十人十色と言う言葉があるなら“十匹十色”もあるだろう。
セミだって個々で考え方が違うんだ。

ただ姿形が違っただけで人間と何ら変わりはない。

つまり結論。

僕もわかんなかった。

「桜井さん」

「何ですかあ？」

「どこか行きたい所ある？」

「北極」

……。

「桜井さん」

「何ですかあ？」

「どこか行きたい所ある？」

「南極」

……。

「桜井さん」

「何ですかあ？」

「どこか行きたい所ある？」

「みーん」

……。

何だろう。

今日の桜井さんは何か様子がおかしい。
いつもの優しい桜井さんじゃないぞ。

何『みーん』て。

……。

あ、こう言うキャラ設定か。

僕がつっこみ役に回れってことか。

作者の差し金だな。

桜井さん可哀想。

「桜井さん」

「何ですかあ？」

「一緒に頑張ろうね」

「はい」

とりあえず今日はどうしようかな。

第9話 レンタルしますう

「…ここ、何屋さんですか？」

「え？レンタルショップだけど」

僕と桜井さんは今、ゲオの前にいた。

とりあえずDVDでも見ようと思って。
暇だから。

「れんたるしよつぷ？何ですかそれ？」

そう言いながら怪訝な表情でゲオを眺める艶やかな髪の毛を風に遊ばせている幽霊こと桜井奈緒さん。

レンタルショップ知らないの？

…嘘だあ。

「え？DVDとかCDとかを借りれるとこだけど」

「でいーぶいでいー？しーでいー？何かの元素記号ですか？」

どうしてそうなる。

どこに元素を借りる店があるんだ。

そもそも借りてどうする。

『すいません、水不足に悩まされてるので水素（H）と酸素（O）
レンタルしたいんですけど…』

水買って来いってんだよ。

「…映画とか音楽が入ってるディスクのことだけど」

僕は簡単に説明する。

「でいすく？でいすくって何ですか？」

……。

めんどくせ…。

「とりあえず入ってみようよ」

そう言って僕と桜井さんはゲオの中に入った。

「嘘！こんなドーナツの穴が極端に小さいようなものに映画とか入ってるんですか！？」

桜井さんはDVDをまじまじと見ながらそう興奮気味に言った。
DVDをドーナツに例える人（幽霊）なんて初めて見た。

どっちかって言うなら“円盤に小さな穴が空いたやつ”の方がそれっぽくない？

あ、そうでもないですか…。
てか本当に知らないんだ。

桜井さんっていつの人（幽霊）？

「とりあえず借りてみればわかるよ。あ、桜井さんはどんなの見たい？」

僕は穴が開くほどDVDを凝視している桜井さんに聞いてみた。

まあ、既に穴は開いてるけどね。

えへへっ。

「うん、そうですね。これだけあると迷っちゃいますよー」

そう言いながら桜井さんは店内を見渡す。

「じゃあとりあえず見て回ろうか」

「はいですう」

それから僕と桜井さんは二時間ほど掛けて一通り店内を見て歩いた。

掛かり過ぎだね。

そんなに大きい店舗じゃないのに。

まあ、察しの良い皆さんならわかると思うけど。

桜井さんですね。

すごいですよ桜井さんは。

一つひとつのDVDに対する食い付きが半端じゃない。

特に“ホラー”のところ。

僕が『何でこれDVDなのに題名が“本当にあった呪いのビデオ”なの?』とどうでも良い矛盾に頭を悩ませている横で桜井さんが、

『ああー、貞子ちゃんですー。久しぶりですねえ、元気でやってるでしょうか?』

て言っと思って思い出に浸ったり、

『俊雄くーん!! やつと見付けましたよぉー!! この間トイレに行つたつきり帰ってこないと思つたらこんなとこにいたんですかぁー。はい、タッチです。次俊雄くん鬼ですよー』

て言っつて、DVDのパッケージにぺちんとタッチしたり、

『あー!! 美津子ちゃんの幼稚園の卒業祝まだ上げてないですー!! どうしまししょう祐介さん!! どうしましよー!!』

て言っつて泣きながら僕にすがつたりと。
とにかくはしゃいでました。

と言っつか。

え?

何?

みんな友達?

つか実在するの?

全部フィクションじゃないの。

何それ。

超怖いんですけどぉー。

「いやあ、レンタルショップって楽しいですね、また行きたいです
う」

帰り道。

僕の周りでフワフワと　まるで妖精のように浮いている桜井さんはニコニコしながら言った。

あ、桜井さん幽霊だから“浮け”るんですよ。

僕は改めてその事実を“受け”入れました。

超“ウケ”るんですけどおー。

ごめんなさい。

調子に乗りました。

それにしても桜井さんは本当に楽しかったんだな。

鼻唄なんて歌っちゃって。

まだ余韻に浸ってるのかな。

……。

子供みたいで可愛い。

て言うか、桜井さんって何歳なんだろう。

見た目は僕と一緒に、年下っぽいけど。

……。

どうでも良いや。

それに楽しかったのは僕も一緒だし。

「桜井さん」

「何ですかあー？」

「映画楽しみだね」

「はい！！楽しみですね！！」

そんな僕と桜井さんが借りてきたDVDは、

『本当にあった呪いのビデオ』でした。

第10話 驚かしますう

ふう、暑いなあ。

夏は嫌いだ。

荷物重いし。

と言うことで。

僕は少なくなった食料を調達すべく、近くのスーパーに行ってきました。

今はその帰りです。

しかし一人暮らしは親から解放されて自由になった反面、身の回りのことは全て自分でやらないとダメなところがちよつと大変だ。でも逆に家にいたら家にいたで身の回りのことは親がやってくれるけど、その親がめんどくさい。

結局はどっちにしてもメリットとデメリットがあるものなんですねー。

まあ、今回は一人暮らしの場合ですけど

人生に於いて。

自分の中で何を優先的に考えるか。

皆さんもこれをしっかり考えて毎日をご過ごしてくださいね。

「ただいまー」

僕はそう言いながら部屋のドアを開けた瞬間。

「わー!!!」

.....。

「あ、あれ？わー！！」

……。

「あれ？え、えっと……。わ、わー！！わあー！！」

「桜井さん何やってんの？」

両腕を前に出し、手のひらをこちらに向けて、ひたすら『わあー！！わあー！！』と叫んでいる綺麗な黒髪のロングヘア―幽霊こと桜井奈緒さん。

「いやあ、祐介さんが買い物に出掛けて、あたし暇になっちゃって。それで何かないかなーって思ってた部屋の中を探索したら何とー！！良いものが出てきたんですよ」

桜井さんはじゃじゃーんと言いながら一冊のマンガを取り出した。そのマンガの表紙は紫色の背景で、真ん中にキーボードを弾いている 眉毛がたくあん形の形をした女子高生が描かれていた。

「ああ、ム○ちゃんの真似か」

「はい」

桜井さんはニコツと笑った。

「このマンガ面白いですよー。あたし一気に読んじやいましたよ」
そう言いながらマンガを持って、振り子のように体を左右に揺らす。

僕地味にこれやってる桜井さん好きなんだよね。

何とも可愛らしい。

「きゃー！！『可愛らしい』いただきました！！『可愛らしい』い
ただきましたあー！！」

相変わらず読心術は健在と。

「あ、桜井さん」

「何ですかあ？」

「そう言えば、桜井さん初めて会った時のことなんだけど」
「はい」

「桜井さんあの時、僕に憑いてきたんだよね？」

「そうですね。祐介さんにこう、ガバツと覆い被さって」

「…そうなんだ」

全然気付かなかった。

くそ、惜しいことしたな。

桜井さんが僕にガバツと覆い被さっていたと言うことは…。

僕の背中に胸が当たってた！！

…気付けなかった自分が恥ずかしい。

「それを聞いたあたしの方が恥ずかしいですよ」

あ。

くそ！！読心術の存在に気付かずに、僕の汚れた欲望で心を満たしてしまった！！

ごめんなさい桜井さん。

「良いですよー、気にしないでください」

優しいなあ、桜井さんは。

「えへへえ。で、さっきの話に戻りますが、祐介さんが気付かなかったのも無理はありません」

「ん？何で？」

「実は幽霊ってそこら辺にわんさかいるんですよ」

わんさかいるの？

信じられないなあ。

どうしよう、おしっこしてるところとか見られてたら。

「でも人間はそれに気付かないんですよ。何故だかわかりますか？」

「それはやっぱり靈感のあるないの問題なんじゃないの？」

僕は当然のようにそう答える。

「それに関係していますが、それだけじゃないんですよ」
えー。

何だろう。

「それは“意識”です」
ほう。

意識。

つまりどうということだろう。

「例えば、Aと言う女の子がいます」

Aか。

なら名前は“歩美”だな。

「祐介さんは、最初はAに対して好意も何も持っていないとするじゃないですか」

持つわけないじゃん。

“歩美”って名前嫌いだもん。

「その場合、例えば廊下で祐介さんがAを見掛けた時、そのまま何も思わずに通り過ぎますよね？」

「うん」

「でもこれが、祐介さんがAに対して好意を持っていたとなると…」

ああ、そういうことか。

「わかりましたよね」

うん。

きつと僕が“歩美”のことを好きで、さっきと同じ状況になったら普通には通り過ぎない。

と云うか通り過ぎれない。

“意識”しちゃうから。

平然を装いながらも、必ず“意識”する。

普通になんて絶対に見れない。

あえて見ないようにしたり。

あえて距離を取りつつ、通り過ぎたり。

更には何かアクションを起こすかもしれない。

僕チキンだからそれはないけど。

「それと同じことで、人間が幽霊のことを“意識”すれば存在に気

付くことは難しくはないんですよ。同時に見ることでって可能です」
なるほど。

つまり僕はその時、桜井さんのことを“意識”してなかったから
気付かなかったんだ。

ん？

待てよ？

「じゃあ何であの時僕は部屋にいた桜井さんを見ることが出来たの
？ 僕桜井さんのこと“意識”してなかったのに」
うん。

立派に矛盾している。

「じゃあちよつと話変えますけど、祐介さんに憑いていたあたしが、
あの時どうして先に部屋にいたんだと思いますか？」
そう。

実は僕、最初にこれ聞きたかったんだよね。

『どうして僕に憑いていた桜井さんが僕より先に部屋にいたのか』

「これは素直にわからないなあ」

頭悪くてごめんね桜井さん。

「いいえ、良いんですよー」

桜井さんはニコツと笑って僕にピースをする。

くそう、可愛いなあ。

「えつとですね、あの時あたし、実は祐介さんを驚かそうとしたん
ですよー」

いや。

今更だから別に良いんだけど。

いや、だから桜井さん『きゃー！！』じゃなくて。

まあ良いや。

とりあえず言わせていただきます。

「やっぱり驚かそうとしてたんじゃないかあああ！！！！」

ふう、すつきり。

「ごめんなさいですうー」

可愛いから許す!!

フンスツ!!

「ありがとうございますうー」

さあ、続けよう。

「で、驚かそうとしてたことと何か関係があるの？」

「はい。驚かせると言うのは相手に警戒心を植え付けるということが出来ます」

「警戒心？」

「はい。警戒心　つまり、“意識”を持たせることです。まあ、驚かす場合に於いてはこれは二回目以降になってしまっんですけど」
「あ、一回目に驚かされるからこそ、それを“意識”して警戒心が高まり、二回目以降は威力が弱まるからね」

「はい。だから警戒心を植え付けさせるのは二回目以降から有効になります」

「うん」

「でも私たち幽霊は一回目から警戒心を植え付けることが出来るのです」

「どうやって？」

「幽霊は人間からしてみれば恐怖そのものです。それは見えて見えなくても同じことです。まあ、見えてない場合の方が怖い上に不安になります。となれば、人間はどうするか？答えはただ一つです。それは警戒する　つまり“警戒心”を持つんですよ祐介さん」

「にゃっはっはーと笑いながら僕の肩を叩く桜井さん。
何だろう、ちょっと嬉しい。

「ちなみに祐介さんが部屋のドアを開けてから電気を点けるまでの間、何か感じませんでしたか？」

「特に何も？まあ、強いて言えば…」

「“暗かった”」

うおっ。

僕と桜井さんがシンクロした。

「まあ、電気点けてないんだから暗いのは当たり前ですけど」

そりゃあそうですねーと桜井さん。

そして続ける。

「ところで人間は闇を嫌いませんか？普通に言ったら暗いところですね。まあ、中には好きな人もいますけど。大体は嫌いだと思います」

「僕も暗いのはちょっと苦手だな」

「何ですか？」

「やっぱり視界が真っ暗で何も見えないと不安だし、今回の僕の場合には靈感ないし幽霊も見なかったけどやっぱり心霊スポットの帰りだったから多少は怖かったし」

…はっ！！

なつつつて。

もう大体想像付いてるっしょ？

うん。

僕は桜井さんの言う通りだよ。

「ですよ。つまり祐介さんはドアを開けた時から電気を点けるまでの間の短い時間の中で“警戒心”を持ったんです」

「せーかい」

「やったですう」

桜井さんはバンザイをしながら喜ぶ。

「まあ、最初にあたしは祐介さんを驚かそうとしたって言いませうけど、それは様々な条件と、その時の状況が合致して初めて祐介さんを完全に驚かすことが出来るのです。あたし自身が祐介さんを驚かそうとしたのは言わば“だめ押し”です」

結局寝てましたしと桜井さんは苦笑いする。

「つまり、そういった様々な条件とその時の状況が合致したことによって祐介さんが警戒心を持ち、無意識に幽霊を“意識”した。その結果、あたしを見ることが出来たんですね」

なるほど。

意識か。

「何かいっぱい喋ったらトイレ行きたくまりましたよう
そう言って桜井さんはトイレに向かった。」

その時、僕は小さく呟く。

「じゃあ桜井さんを人間として意識したら……」

……。

止めとこつ。

第10話 驚かしますう（後書き）

ちよつとけいおんのネタを使っちゃいました。

ごめんなさい。

あと、ぶつちやけ意識するだけで幽霊が見えるわけがないので信じ
ちゃダメですよ（笑）

第11話 飛びますう

「祐介さん祐介さん」

「どうしたの？」

四つん這いになって僕を手招きするストレートロングヘアの口
りつ子幽霊こと桜井奈緒さん。

何か上記みたいな書き方すると卑猥な感じがする…。

「今更ですけどこれ何ですか？」

僕も桜井さんに倣^{なら}って、隣に四つん這いになる。

「ああ、コンポね」

桜井さんが指差す先にあるものはコンポだった。

「こんぽ？梱包？」

ん？

「こんぽおゝかんぽおゝけんぽおゝでアチョー!!」

おおっと!!

桜井さんどうした!?

「言葉が似てたんでつい…」

…あ、そう。

「桜井さんラジカセわかる？」

「わかりますよおー」

「あれの進化形みたいなやつだよ」

と、僕は簡単に説明しながら、とりあえずCDをコンポに挿入す
る。

「うわっ!!薄っぺらいドーナツが吸い込まれました!!何です
か!?!」

桜井さんはそう言いながら、怪訝な表情でCDの挿入口を指でな
ぞる。

「CDね。って言うか、DVDレコーダーで体験したじゃない」

ちなみにDVDレコーダーの時は、

『うおっ！！この機械、舌（トレイ）出してきましたよ！？え！？舌の上に薄っぺらいドーナツ（DVD）を乗つけるんですか！？食べられmああああ！！！食べられました！！ドーナツ食べられましたよ祐介さん！！どうするんですか！？あわわっ！！た、助けないと！！祐介さんドーナツを助けないとおお！！！』
と、こんな感じにはしゃいでました。

て言うか、DVDレコーダーはともかく、ラジカセを知ってるんならそんなに驚かなくても…。

僕はそう思いながら、再生ボタンを押した。

「あ、音楽が鳴りましたね。これ誰の曲ですか？」

「これは“Fresh Strawberry Pancake”（フレッシュいちごパンケーキ）って言う人たちの曲だよ」

「甘ったるい名前ですね。へえ、初めて聴きます」

そらそうだよな。

僕も中学時代のサッカー部の先輩から聞いて初めて知ったんだから。

この人たちマイナーだからな。

そう思いながら、僕と桜井さんはしばらくCDを聴いていました。

「祐介さん祐介さん」

「どうしたの？桜井さん」

「祐介さん、空飛びたいと思いませんか？」

ん？

空？

まあ、思ったことはあるなあ。

実際、僕は中二の頃本気で“鳥になりたい”と思ってたし。
はっ！！

僕のイタイ過去の一部を晒してしまった！！
…僕ちよつと死にたくなつた。

「死んだらあたしと一緒にすねっ」

床にちよこんと座つた桜井さんがニコツと笑う。

「う、うん…。そうだね…」

嬉しいんだか嬉しくないんだか。

僕が桜井さんの言葉に困惑していると、桜井さんは『よつと言
つてぴよんと立ち上がる。』

「祐介さん、ちよつと立つてもらつて良いですか？」

続けて僕にそう言う桜井さん。

「立つた！！」

「ひゃっ」

桜井さんは僕の大声に若干ビビつた後、僕の両脇に手を掛けた。

「え！？ちよ、ちよつと桜井さん！？何してるの！？」

て言うか近い！！

顔が近い！！

てか桜井さん肌すごい綺麗だな…。

きれーだなあー。

ヤバイ。

照れる。

桜井さんの顔見れない。

ただでさえ可愛いのに。

ただでさえ綺麗なのに。

あー、僕もうダメだ。

興奮する。

「祐介さん、全部聞こえてますよう…」

桜井さんは僕の両脇に掛けた手を一旦離し、その手で顔を覆い隠す。

はっ！！！！！

ま、またやってしまった！！

しかも今回は“興奮する”とはつきり言ってしまった。

いや、口には出してないんだけど。

いやいや！！

今はそんなことどうでも良い！！

とにかく桜井さんに対して失礼なことを言ってしまった！！

あ、謝らなければ…。

「そ、そんな『肌が綺麗で可愛くて美しい』なんて言われたら恥ずかしいですう…」

…あれ？

あ、そっち？

いやいや、桜井さん『きゃー！！』じゃなくて。

そう思われて恥ずかしかったの？

あら…、そう。

て言うか。

今まで僕結構そう思ってきたよね？

うん。

「祐介さん、後ろ向いてくださいっ」

桜井さんは意気揚々と僕にそう言った。

後ろ？

僕は言われるがままに後ろを向いた。

「えいつ」

「うわっ！！ちょっと桜井さん！？何抱き付いてんの！？いやあ、今日も理性が忙しいなああ！！あっはっはあ！！」

僕はおおげさに笑う。

もうこれ拷問だよ。

だって背中には胸が…。

むうぬえがあああ！！！！

「サービスですよ祐介さん」

僕の耳元で桜井さんが囁く。

そして、

「行きますよおお!!！」

その掛け声と共に、僕は桜井さんに抱かれたまま、窓から飛び出た。

「うわああああ！！！！高ええええ！！！！怖ええええ！！！！」

僕は今、空を飛んでいます。

風が気持ち良いです。

僕の隣には僕と並行しながら飛んでいる小鳥さんたちがいます。とても気持ち良さそうです。

「やべええええええ！！怖ええええええ！！桜井さああああん！！手えええ離したらダメだからねええええええ！！！」

とても清々しい気持ちです。

中一の頃の僕。

聞いてますか？

君は“鳥になりたい”って言うてたよね？

安心して下さい。

君は……鳥になれる。

今の僕のように。

だからめげずに頑張ってください。

君は僕より強いんだから。

ありがとう。

「あつはっはぁー。祐介さんですか？気持ち良いですかぁー？」

「きいいいもぉ おおおいにええええええ！」

「！！！！怖ええええええええええ！！！！」

「喜んでもらえて嬉しいですっ」

僕はこれを機に高いところが苦手になりました。

第12話 クールビューティー登場ですう

「祐介さん祐介さん」

「何？桜井さん」

「今日は何の本買いに行くんですか？」

そう言いながら僕の隣でフワフワ浮いているストレートロングヘアのロリっ子幽霊こと桜井奈緒さん。

今日は桜井さんと一緒に駅前にある本屋に行くことになりました。まあ、“なりました”と言っても、提案したのは僕だけ。

「特に決めてないよ。何か面白そうなマンガあったら買おうかなって感じ」

ぶっちゃけ暇つぶし程度だよー。

「あ、そうなんですか？」

「まあね。それにせつかく桜井さんが現世に残っているのにずっと家にいるのもアレでしょ？だから今日はとりあえず本屋に行こうと思っ」

何となく『本屋』って決めちゃったけど。

でも家にいるよりは桜井さんも退屈はしないだろう。

それに桜井さんにいろんなものを見せてあげたいからね。

僕は出来るだけ桜井さんに協力したいと思ってるから。

「祐介さん」

「ん？」

「ありがとございます」

…いいよ。

さて、本屋に着きましたよ。

「うわぁー、たくさん本がありますねー」

桜井さんは店内を眺めながらそう言った。

「うーん、とりあえず本屋に着いたけど、ぶっちゃけ何を買つか決めてないからなあ」

どうしようかな。

「桜井さん、とりあえず店内を見て回ろうか」

「はい」

そう言つて、僕が歩き出した時、突然僕の中で警戒心が働く。

…どうしたんだ僕。

何に警戒してるんだ？

何を“意識して”警戒してるんだ？

僕はこのなんとも言えない感覚に戸惑い、店内をキョロキョロと見回す。

そして見つけた。

警戒する対象を。

“意識する対象”を。

「よお祐介、お前も本屋に来てたのか」

僕の視線の先にいる人物が僕にそう言ってきた。

「あ、ああ…怜」

その人物の名前はおおさわ大沢 さとし怜。

夜中に高校に行った友達の一入である。

坊主頭が印象的で、一見ひょろつとしているが、意外と筋肉質な体をしている。

靈感に関しては強い方で、良く見えるらしく、たまに僕や友達に自分の体験した心霊現象についていろいろ話をしてくる。

ちなみに、高校に行こうと提案した張本人。

そして隣の隣で 桜井さん同様に浮いているもの。

それこそ僕の“意識の対象”だった。

「あれえー！？みきちちゃんじゃないですか！！」

突然桜井さんが大声をあげた。

僕はびっくりして咄嗟に桜井さんの方を見た。

…興奮してる。

でもこれではつきりした。

“こいつも幽霊”だということが。

浮いているのを見た時点で確信していたけど。

そして桜井さんが興奮してることで“確信”から“決定”に変わった。

「奈緒か、久しぶりだな」

「久しぶりですねえ！！あ、祐介さん、こちら木下^{きのした}美喜子^{みきこ}ちゃんです。通称“みきちちゃん”ですうー」

桜井さんに紹介された木下美喜子と言う女の幽霊。

ロングヘアの桜井さんと対称的な短い髪のショートボブで目が隠れるほど長い前髪を右に流している。

右目は前髪によって隠れているが、あらわになっているつり上がった細い左目の鋭さと言ったら、幽霊でなくても警戒に値するほどである。

そして彼女 木下さんの着ている旅館の女将のような着物。

紫の帯を締め、ピンクや水色などといった多彩な花柄の黒い着物を着たその姿は、和風ならではの美しさを放っていた。

実にクールビューティー。

実に和風美人。

まさに完璧なる大人の女性であった。

「お前、私が見えるのか？」

木下さんが僕に話し掛けてきた。

木下さんの鋭い視線が僕に突き刺さる。
うわっ。

マジで緊張する。

この人綺麗だけどすごい怖い。
視線だけで殺されるよ…。

「え？あ、はい…」

僕は恐る恐るそう答えた。

「祐介、さっきから気になってたんだが…」
あ。

怜のことすっかり忘れてた。

「お前みき姉が見えるのか？」

怜は若干驚きを見せながら言った。

「ああ…、見える」

僕は完全に木下さんに圧倒されながらも、小さくそう答えた。

「へえー、お前も靈感あつたんだな」

怜は笑いながら僕の肩を叩く。

「あ、自己紹介が遅れました。俺、大沢怜と言います。よろしくね」
そして怜は僕から視線をずらし、桜井さんに向けて軽く挨拶をした。

「あなたも見えるんですね。あたし桜井奈緒です。よろしく願い
しますっ」

桜井さんもいつも通りの笑顔で元気に挨拶をする。

「奈緒、あまりこいつと親しくすると痛い目に遭うぞ。気を付けろ」
そんな桜井さんに木下さんは一言注意を促す。

「大丈夫ですよみきちゃん、あたしはみきちゃんが憑いてる人を盗
ったりしませんからあ」

「いや、そう言うことではなくてだな…」

「みなまで言うなです」

うううと唸っている木下さんに対してニコニコと笑って楽しそう
にしている桜井さん。

完全に桜井さんペースだな。

て言うか。

桜井さんすごい…。

「お前に憑いてる幽霊すげえな…。あのドSのみき姉を手玉に取ってる」

怜は苦笑しながら僕の耳元でそう囁いた。

「おい貴様、今なんて言った？」

木下さんは目をギロリと光らせ、怜を睨み付けた。
怖えええええ。

あの目もうレーザービームでるんじゃないの？

木下さんたもと袂から何か出そうとしてる…。

絶対刃物だ。

絶対刃物だ！！

「えっ？い、いや、何も言ってないよ？」

怜…。

そんな震えながら汗たくさんかいて…。

君も苦労してるんだな。

「ねえねえみきちゃん」

「お、どうした奈緒よ」

桜井さんGJ！！

木下さんも袂そでから何も取り出さずに着物の袖から腕を引き抜いて
いる。

桜井さんGJ！！

「怜、あとで桜井さんにお礼言っておきなよ」

「ああ…」

怜は大きく深呼吸をして心を落ち着かせた。

「これから一緒に遊びに行きましょうー！！」

そう言って桜井さんは高らかに右手を上げたのです。

第13話 喧嘩するほど仲が良いですう

桜井さんの提案のもと、僕と桜井さん、そして怜と木下さんは、本屋を出て近くの喫茶店までやってきました。

ちなみに怜と木下さんは、

『まあ、別に良いか。みき姉も良いだろ?』

『そうだな、久しぶりに奈緒に会ったことだし。それに久々に貴様以外との会話が楽しめるしな。それは私にとって至極幸福なことだ。それとともに私の品格が保たれる。生ゴミ以下の貴様と会話するとどうも私の品格が落ちて仕方がない。ん、何か服が臭う。おい生ゴミ、ファブリーズ買ってこい。二秒以内に買ってこい。ああ、更に服が臭う!!呼吸をするなクスが』

と、こんな感じで快く了承してくれました。

「いやあ、それにしても久々ですねえ。何年ぶりですかね?」

そう言いながらニコニコしてるストレートロングヘアのロリっ子幽霊こと桜井奈緒さん。

そう言えば桜井さん、木下さんと会ってからずっとニコニコしてるな。

よっぽど同じ幽霊に出会えたのが嬉しいのかな。

「そうだな、かれこれ二、三年てどこではないか?」

そう言いながらコーヒークップに口を付ける木下さん。

これって他の人から見たらどう映ってるんだ?

だって幽霊がコーヒー飲んでるんだよ？

和風美人がコーヒー飲んでるんだよ？

お茶じゃなくて。

まあ、その不釣り合いさがまた良いね。

……。

じゃなくて。

僕が言いたいのは幽霊がコーヒーカップを持ってることについてなんですよ。

他の人には木下さんが見えてないから、コーヒーカップが浮いてるように見えてるでしょ絶対。

「いや、大丈夫なのだよ藤森」

「え？」

あれ？

今、僕口に出してたっけ？

「悪いが、心を読ませてもらった」

そう言いながらカップを静かにテーブルの上へ置く木下さん。

ああ、読心術って幽霊の特権なんだね。

もう驚くことに疲れました。

「幽霊と同化しているものは人間には見えていない。私や奈緒が着ている服がその良い例だ。つまり私とコーヒーカップは今、私と同化しているため見えてないのだ」

なるほど。

大体わかった。

「で、みきちゃんは今まで何してたんですか？」

そう言いながらズズッとカフェオレを飲む桜井さん。

「あの高校から出た後、いろいろな人間に憑き回ってな。まあ、今はこんなくしゃくしゃになったストローの袋みたいな奴に憑いて

いるが」

そう言つて木下さんは怜をギロリと睨む。

…お前は木下さんに何をしたんだ怜よ。

「へえ、そうなんですか」

桜井さんはカフェオレをふうふうしながらそう言つ。

桜井さんはたまに自分から振つておいてリアクション薄い時あるよな…。

「そう言う奈緒は今まで何をしてたんだ？」

今度は木下さんが桜井さんに質問する。

「ん、みきちやんがいなくなつてからも特に変わらずいつも通りのほんと暮らしてましたよ。今は祐介さんに憑いて楽しく過ごしてますけど。あつつつ!!」

桜井さんは舌を火傷したのか、口の中を手で扇ぐ。

桜井さんて猫舌？

「祐介さあん、舌火傷しちゃいましたあ…」

そして目をウルウルさせながら涙ぐんで僕に助けを求める。

実にキュート!!

「大丈夫？とりあえず水飲んで口の中冷ましな」

僕はハイと、水を渡す。

「何かお前ら微笑ましいな」

怜は僕と桜井さんのやり取りを見て、小さく呟く。

「そう？」

「ああ。何かお前ら見てるとほのぼのするよ」

今日も平和だなーと怜は言う。

「貴様には無縁なことだ、怜。この私が憑いている以上、貴様に平穩は訪れることはない。覚えておけ愚者よ」

木下さんは鋭い眼光で怜を一瞥する。

「みき姉」

「気安く名前を呼ぶな人間廃棄物」

すごい毒舌。

良く桜井さんは木下さんに対して恐怖心を持たないな。

「怖いわけじゃないですよ、だってみきちゃんは優しくて良い人ですもんっ」

…すごいポジティブ思考だな。

そんな僕らをよそに、いつの間にか怜と木下さんは口論していた。口論ってか、喧嘩ですね。

「もう罵られるのは慣れたから別に良いけど、やっぱり言われて気持ちの良いもんじゃねえ」

「ほう、私に意見するのか。良いだろう、貴様の毛と言つ毛を毛抜きで一本ずつ時間を掛けて抜いてやる」

「やれるもんならやってみるこの人間のなりそこない」

「その言葉忘れるなよ社会の汚れ者」

「俺はちゃんと高校生やつている。れっきとした学生だ。いよいよ頭沸いたのか世界不適合者」

「バカかお前は。それこそ私の肉体は蒸発してるわ」

「魂も蒸発させてやろうか？」

「やってみる海坊主」

「忘れたわけじゃねえよなクソ幽霊。俺が保険として常に除霊道具一式持ち歩いてんのをよ」

「申し訳ございません怜様。これまでの数々の無礼をどうかお許しください」

「わかれば良い。あまり図に乗るなよ？」

「申し訳ございません。私の愛情の裏返しが過ぎました。どうかお許してください」

「まあ、いい。許してやろう」

「ありがとうございます怜様」

この二人の力関係がわからん。

「桜井さん」

「何ですかあ？」

「僕たちは出来る限り仲良くやろうね」

「はい」

少なくとも、目の前の二人みたいに罵り合う関係にはならないように。

そうしてる内に、夕方になったので、僕は喫茶店で別れました。その別れ際に木下さんが僕にそっと寄って、

「藤森よ、明日からお前に憑いても良いか？」

と言ってきました。

「いや…、ちよつと…」

と口ごもつてると、

「みき姉、調子に乗るな。俺の友達に迷惑掛けたらあの世に送るか

らな」

と怜に言われ、シュンとなっていました。

なので僕はあの世に送ると言われた木下さんに、
「木下さんも頑張ってください」

と励ましの言葉を送ってあげました。

第14話　アイス食べますう

「あつついなあー」

「あつついですねえー」

部屋で暑さにやられてる僕と桜井さん。

「エアコン欲しいね」

僕はうちわで扇ぎながらそう呟く。

僕の住んでる学生寮はエアコンが備え付けられていない。

学生寮とは言っても、実際はアパートみたいなもので、そこまで環境に恵まれているわけではないのだ。

聞いた話によると、築二十年以上だとか。

まあ、高校の寮なんてそんなものだろう。

「えあこん？何ですかそれ。『ふあみこん』みたいなものですか？」
扇風機の生温い風を浴びながら、僕にそう問い返すストレートロ
ングヘアーのロリっ子幽霊こと桜井奈緒さん。

「エアコンって言うのは、冷たい空気が流れる冷房機器だよ。夏に
は必需品なんだよ」

て言うか『ふあみこん』で。

しかも平仮名表記。

ファミコンみたいなエアコンでどんなのだろう。

「へえー、それ良いですね。今から買いに行きましょうよ」

あたしも付き合いますよと、桜井さんは言う。

「いや、僕たち学生の身分で買えるような代物じゃないし。て言う
か、寮に勝手にエアコン付けても良いのかな？」

「あたしが許します。祐介さんは是非付けましょう」

桜井さんの許可も下りたし、付けるか。

…とはならないよ。

「ちえーですう」

桜井さんは口を尖らせて『暑いですよー!!』と、手足をジタバタさせながら騒いでいた。

「本当夏は嫌になるね。窓開けても熱風しか入ってこないし、扇風機だつて生温い風しかこない」

「年々気温も高くなってますからね。温暖化ですよ温暖化。その内あたしたち干からびて死ぬんじゃないですか？まあ、あたしはもう死んでますけど」

あつはつはーと桜井さんの心のこもっていない笑い声が木霊する。
「今思つたんだけど、桜井さんって暑さ感じるの？」

幽霊だよな？

魂だよな？

一見本物の人間に見えるから、たまに桜井さんが幽霊だと言うことを忘れちゃう。

「…あ。そう言えばあたし幽霊でしたね。言われてみれば思ってるほど暑くないですね。と言うかむしろ常温ですうー」

桜井さんも自分が幽霊だつて忘れてたの？

さつき自分で『死んでますけど』って言つてたのに。

はは、おちゃめだな。

「祐介さんのその暑さに悶えた顔を見たらあたしも暑く感じちゃったんですねー」

僕暑さに悶えた顔してたんだ。

ブサイクだつただろうな。

「いやあ、何にしても夏は嫌だ」

暑さに耐えきれなかった僕はせめて体内を冷やそうと思い、アイスを買つてくることにしました。

「桜井さん、アイス買つてくるけど食べる？」

「アイスですかっ！？食べますう！！」

桜井さんは『アイス』と言う言葉に反応し、ガバツと起き上がる。
…びつくりしたなあ。

「何が良い？」

「抹茶アイスかあずきバーが食べたいですっ！！」

…目がすっごいキラキラしてる。

そんなに食べたいのかな？

「あたし甘い物大大だぁ〜い好きなんですよぉー。きゃはっ、嬉しいなっ、楽しみだなっ」

桜井さんは『アイス〜アイス〜』と上半身を振り子のように揺らしながらニコニコしている。

桜井さんが可愛すぎて生きるのが辛い…。

「抹茶アイスかあずきバーね。わかった」

僕は桜井さんにそう確認してから、部屋を出た。

コンビニに向かう途中、見慣れた人物と遭遇した。

「お、藤森か」

早くも登場、木下さんです。

この暑い中、汗一つかいていないその綺麗に整っている顔立ちは健在です。

まあ、幽霊だから暑いわけないんだろうけど。

「あれ？今日は怜と一緒にじゃないんですか？」

どうやら木下さん一人のようだ。

「あいつと一緒にいると言うのはヘドロの海でバタフライすることと同意語だからな。私はこうして一人で散歩してるのだ」

…懲りてねえなこいつ。

「貴様、今何か言ったか？」

木下さんは着物の袖に腕を通しながら僕をギロリと睨む。

「いいえ、何も言ってます。ところで木下さん暇ですか？良かつたらコンビ二まで一緒に行きませんか？アイスご馳走しますよ」

「む、本当か？」

袖に通した腕を引き抜き、木下さんは僕にそう言った。

お、反応あり。

木下さんもアイス好きなのかな。

「はい。僕もアイス買いに行きますし、せっかくなんで」

それに木下さんだって桜井さんと同じ幽霊だ。

何が現世に思い残したことがあるのだろう。

だったら些細なことでも体験してもらいたい。

まあ、既に大概のことは体験してると思うけど。

「驚いたぞ藤森」

「え？何がですか？」

「お前は稀に見る優しい人間だ」

僕が？

僕別に優しくなんかないぞ？

ただ単純にそう思っただけだい！！

「無意識にそう思うと言うことは、お前が優しい心を持っていると言うことだ。優しさこそ全てではないが、自分の損得に捕らわれず、純粹に他人の気持ちを考えられるその心を私は素晴らしく思うぞ」

僕にそう言ってくれた木下さんの表情に、僕は驚きを隠せなかった。

今まで僕が感じた冷酷さや非情さと言ったものがなく、それこそ優しくて暖かい、まるで女神のような表情だった。

やっぱりこの人、すごい綺麗だ…。

桜井さんの言葉もあながち間違いではないのかもしれない。

「お前とは上手くやっていけそうだ。さて、コンビ二行こうか」

コンビ二に着いたぞ。

えーっと、桜井さんが食べたいのは…。
あった。

抹茶アイスとあずきバー。

多いのに越したことはないし、二つ買おうか。

「木下さんは何にしますか？」

僕の隣でフワフワ浮いている木下さんに聞いた。

「うーん、ガリガリ君も良いが、ピノも捨てがたい…。さてどうしたものか」

「何だったら二つ買いましょうか？」

「いや、幽霊とは言えど、一応女だ。あまり甘いものを食べ過ぎるのは何となく良くない気がする」

何となくですか。

「ううーん、悩む、悩むぞ藤森！！私はどうすれば良いのだ！！」
うおっ！！

木下さんが頭を抱えて叫びだした。

「木下さん落ち着いてください！！とりあえず今何に迷ってるんですか？」

「ガリガリ君かピノかスイカバー」

あれ？

増えてる。

「それとガリガリ君」

それさっき聞いたよ。

「三つか…。じゃあとりあえず二つに絞りましょう」

「ううー、じゃあ雪見だいふくとスーパーカップ」

あれ？

候補外の二品？

まあ、良いや。

「じゃあジャンケンして僕が買ったら雪見だいふく、木下さんが買ったらスーパーカップにしましょう」

我ながらナイスアイディア。

「わ、わかった」

「よし、それじゃあ行きますよー。最初はグー、ジャンケン……」

「ただいま桜井さん」

「奈緒よ、邪魔するぞ」

「ああー、みきちゃんですうー!!」

桜井さんはパタパタと僕と木下さんの方に駆け寄ってきた。

あの後、僕はせつなくなると、木下さんを僕の部屋へと誘った。桜井さんと久々に再会したとは言え、まだ話し足りないこともあるだろうし、きつと桜井さんも会いたいだろうと思って。

案の定、桜井さんは『会いたかったですうー!!』と言いながら、木下さんに抱き付いてるし。

木下さん連れてきて良かったな。

「あ、はいアイス」

僕はコンビニ袋から抹茶アイスとあずきバーを取り出して桜井さんに渡した。

「二つ買ってきてくれたんですかっ!? きゃー!! やったですっ!! 嬉しいですよー!!」

そんなに喜んでもらえると僕も嬉しくなるな。

「良かったな、奈緒」

木下さんも優しく微笑む。

しかしアレだよな。

何か木下さんと桜井さんて姉妹みたいだよな。

何か、良いな。

こつ言っの。

そう思いつつ、僕は自分のアイスを取り出し、

「それじゃあみんなで食べようか」

と、二人に向かってそう言った。

「はいっ」

「いただきますしょうか」

こうして僕たちはアイスを食べながら楽しい一時を過ごしました。

「しかし美味しいな、モナ王は」

ちなみに木下さんが選んだのはモナ王でした。

第15話 海に行きますう（前編）

とある日の午前。

怜から電話がありました。

『祐介、今日暇か？』

「今日？別に何も無いけど」

『皆で海行かねえ？』

「別に良いけど。誰々行くの？」

『俺と司と亮平』

「まあ、いつものメンバーだね。良いよ、何時頃行く？」

『十二時頃、駅前はどうだ？』

「わかった」

『あ、それとみき姉預かってくんない？』

「預かる？」

『いや、お前んち奈緒ちゃんもいるからさ、ちょうど良いかなと思
つて』

「え？連れてかないの？」

『俺とお前だけなら別に良いんだけど、司と亮平もいるからさ』

「うーん、ちょっと桜井さんに聞いてみるわ。また後で電話する」

「と言うことなんだけど、桜井さんどうする？」

電話を一旦終えて、事情を桜井さんに告げる。

確かに、僕と怜だけなら桜井さんと木下さんとで四人で遊べるけど、司と亮平がいるんなら話は違ってくる。

二人には桜井さんと木下さんの姿は見えないし。

連れてったところで、みんなでどう遊べば良いのかわからないしな。

正直僕は桜井さんも連れていきたいし、木下さんとも遊んでみたい。

しかしこればかりは難しいよな…。

「祐介さんは海行きたいですか？」

そう僕に言う、床にちょこんと座っているストレートロングヘアのロリっ子幽霊こと桜井奈緒さん。

「うーん、特別行きたいってわけじゃないけど、誘われちゃったかなー」

僕、誘われたら断れないタイプなんだよねー。

こう言う時、厄介な性格なんだよな。

「じゃあこう言うのはどうでしょう？あ、祐介さんがよろしければの話ですけど」

と言うことで、僕は約束の十二時に駅前にやってきました。海はまだ今年行ってなかったな。

まあ、夏休み始まったばかりだから仕方ないんだけど。

「おい、祐介！」

僕は呼ばれた方へ顔を向けた。

「おう、司」

僕の目の前いる人物

小田切おたぎり 司つかさ

僕が手を振りながら僕の方に駆け寄ってきた。

左右の髪の長さが違う アシンメトリーで、右の方が耳が隠れるほど長く、またその部分だけ金色のメッシュが入っている。隠れてない方の左耳にはリング型のピアスが目立つ。

首にはネックレスが付いてあり、若干小さめの白いTシャツにスキニータイプの黒いパンツ、そして黒いスニーカーを履いている。

いつもは指輪を付けているのだが、今日は海と言うことで外してきているようだ。

「今日もロックだね司」

「ははっ、ありがと」

司は荷物を置き、僕の隣に立った。

「昨日もバンド練習してたんだけど、どうも上手くいかない」

司は大きく溜め息を吐く。

司は中学からの友達とバンドを組んでいる。

確か、ギターボーカルだったかな？

本人曰く『音楽こそ自分の本音をぶちまけられる唯一の武器』だとか。

そこら辺は良くわからない。

「まだ怜と亮平は来てないみたいだな」

「あの二人、時間にルーズだから」

「特に怜。アイツ本気出したら一、二時間は平気で遅刻するからな」
「出来れば今日は最悪でも三十分にして欲しいよ」

そんなことを言っている内に神谷かみや 亮平りょうへいの姿が見えてきた。
髪が長くツイストパーマをかけているため、常に爆発しているよ

うな頭が印象的である。

そして身長が僕並みに小さいのにも関わらず、緩い服装　俗に言うストリート系の格好をしている。

「今日意外に俺早いだろ!？」

そう言いながら、司と同様に荷物を地面に置いて、僕の隣に立つ。
「てか二人とも香水くさいよ」

司と亮平に挟まれた僕は二人が付けている香水の匂いに若干具合が悪くなる。

「俺はそんなに付けてないぞ」

適度にだと、司は言う。

「身だしなみだよ身だしなみ。だってさ、海と言えばナンパじゃんか!!」

亮平は興奮しながら言った。

「成功すると思ってるの？おチビちゃん」

そんな亮平に向かって司は小さく言い放つ。

「うるせえ!! 成功させるんだよ!!」

「まあ、せいぜい頑張りたまえ」

ははつと司は笑う。

「て言うか海入るんだから意味ないじゃん」

僕が呆れながら言った。

「バカだな祐介は。ナンパは家を出てから既に始まっているのだよ」
そもそも僕はナンパ目的で来てるわけじゃないんだけど。

とりあえず頑張れ亮平。

そうこうしている内にやっと怜が来た。

「お、みんな早いな。じゃあ早速行くか」

そう僕たちに言った時に亮平が、

「いや、君の謝罪が先だ」

と言う言葉が引き金となり、僕たち三人の攻撃が始まった。

怜の奴、案の定一時間遅刻してきやがったなこの野郎。

さて、海に着きましたよと。

これはかのム○カ大佐も『見ろ！！人がゴミのようだ！！』と言わんばかりの人の多さだな。

海にはサーファーや、ボールで遊んでいる人たちがたくさんいた。みんな楽しそうに遊んでいる

浜辺ではビニールシートを敷いて、体を焼いたり休憩している人、もつとすごいとバーベキューまでやっているの人たちも見受けられた。

また海の家には巨大なオーディオ機器が設置されているものもあり、まるでクラブハウスのようだった。

夏にしか遊べないためこの海で、この時を今か今かと待ちわびたたくさんの人たちが、童心に返り、まるで子供のようににはしゃいでいた。

「さて、着替えようぜ」

怜の言葉を合図に、僕たちは脱衣所に向かう。

しかしその前に僕は怜に聞きておきたいことがあった。

僕は司と亮平が脱衣所に向うのを確認した後、怜に話し掛けた。

「怜」

「どうした祐介」

「木下さんどうしたの？」

「いつもみたいに一人で散歩してるよ」

「そっか」

「まさかお前と奈緒ちゃんがあんなこと言うなんて思ってもみなかったからな」

「帰ったら木下さんに謝っておいてちょうだい」

「気にするな。みき姉はそんなことで怒らねえよ」

「そっかなあ？」

まあ、呆れて何も言えないのが本音だろう。

「てかお前、バレないように気を付けろよ」

「それは桜井さん次第だよ」

「姿が変われば良いのにな」

「そこまでこの世はファンタジーじゃないからね」

「まあ良いや。頑張れよ」

「ああ」

会話を終えた僕たちは、遅れて脱衣所に向かった。

着替え終わった僕は、トイレに行くからと言って三人と離れた。

「桜井さん」

「はいっ」

ひょこつと桜井さん登場。

実は桜井さんは付いてきていました。

「ましたあー」

怜には予め連絡していたから、駅前ではスルーしてくれてたんだ。

「ましたあー」

さすがに着替えてる時は桜井さんに別の場所で待機してもらってたけどね。

「ましたあー」

よし、それじゃあ作戦開始だ。

「まず最終確認!!」

「はいっ!!」

「桜井さんが僕に乗り移る!!」

「乗り移ります!!」

「したらもう僕は体は動かせないんだよね?」

「はい。その時はもうあたしが祐介さんの体をジャックしてますからねっ」

「でも僕の意味はあるんだよね?」

「はい。あたしと祐介の意思は祐介さんの体の中で共有されます。だからあたしとは会話は出来ますよっ」

「それと！！」

「はいっ！！」

「桜井さんが僕の体から出た時は、僕はしばらく体を動かすことが出来ないんだよね？」

「しばらくまではいきません。正確には一、二分です」

「まあ、そこら辺は後で考えよう！！」

「はいっ！！」

そう。

桜井さんは“僕に移る”のだ。

つまり桜井さんは僕になる！！

そうすることで、桜井さんはみんなと遊ぶことが可能になるのだ。せつかく海に來たんだ。

桜井さんにも海で楽しんでもらいたい。

桜井さんにも夏を楽しんでもらいたい。

それは桜井さんの願いでもあり、僕の願いでもある。

桜井さんが楽しめるなら、

桜井さんが喜んでくれるなら、

僕は喜んでこの身を授けよう。

「それじゃあ桜井さん、始めようか」

「わかりました」

僕の体は桜井さんの言葉を境に、人形のようにぐしゃりと地に落ちた。

第15話 海に行きますう（前編）（後書き）

私はファッションセンスがありません…。

第16話 海に行きますう（後編）（前書き）

卑猥な描写はありません。

苦手な方は申し訳ありません。

ちよつとした遊び心です（笑）

第16話 海に行きますう（後編）

きやはっ。

どうもおー。

『体は男、中身は女、その名も』

桜井奈緒ですっ

今回はあたしが祐介さんの体に移ってるので、あたし視点でお送りしたいと思いますうー。

…ああ。

…ああああ！…！

今、あたし、祐介さんと一つになってる…。

何でしょうかこの心が満たされる感覚は…。

はあんっ。

気持ちイイ……。

…ダ、ダメ…ですう…。

ゆ、祐介さああん…、あたし…、もう…ダメですう…。

この体を流れる一つひとつの感覚があ…。

何とも言えぬ…幸福感を与えてくれるんです…。

んっ！！

そ、そんなに…、激しくされたらあたし……。

クラクラしてえ…、倒れちゃいますう…。

あ、ああああ！…！

も、もうダメですう…！！

祐介さん！！あたしもうイッちゃいそうですよおー！！

が、我慢できないですよおー！！！！

イッちゃうイッちゃうイッちゃうイッちゃうイッちゃうイッちゃ
ううー……！！！！！！

「ぬいんぐうえんすわぁいいいこおおお！！！（人間最高）」

《上記の卑猥な描写及び誤解を招く記述をして誠に申し訳ありません。これは、僕の肉体を介し、久々に人間の血や、肉や、骨などをその身で感じた桜井さんの、高揚する感情をそのまま表現したものです。ちなみに“イツちゃう”と言う言葉。正しくは“言っちゃう”で、その高揚する感情を自分の心に留めることが出来なくなり、思わず口してしまったことによる発言なので、誤解なさらぬようお願い致します》

あら、この声は祐介さんですねっ。

《もう桜井さん、久々の人間の体に感動したからって変な言い方しないでよ》

「だってー、感動したんですもーん」
だって、だってっ。

歩けば砂のつぶつぶ感が足に伝わる…。
海を触れば海水の冷たさを感じる…。

コケたら痛覚が刺激され、身体中に痛みが広がる…。

「こんなに素晴らしいことをまた体験出来て感動せずにはいられませんよ！！」

《いや、だから言い方の問題》

と言うことで、あたしは人間になってまーす。
祐介の体ですけど。

《桜井さん》

「何でしょうか？」

うおっ、今更ですけど祐介さんの声ですっ。

「あー、あー」

《桜井さん？》

「海賊王に、俺はなる！！」

きゃーっ！！

このセリフ言ってみたかったですうー！！
やったですっ！！

《桜井さん！！》

「ひゃっ」

あわわ、祐介さんの存在意義を忘れてましたっ。

《意義を忘れるな！！》

「すみません、わざとです」

《…まあ、良いや》

良いんですか！？

《今、桜井さんは僕になっている。と言うことは桜井さんは“僕を演じないとダメだからね”》

「はい」

《だから『あたし』とか『くですう』とか『きやはっ』とか言っちゃダメ》

「あたし」はそんな言い方のしない“ですう”」

《言ってるそばからあと一つでコンプリートです》

「きやはっ”」

《フルコンおめでとう》

「ありがとうございますっ」

《…て、これじゃあ話が進まない》

あわわ、祐介さんが困っちゃいましたあー。

「ごめんなさいいー」

その後、あたしはしばらく祐介さんの特訓を受けました。

「すごいだろー、これが特訓の成果だぜい！」

《成果あつたの…？》

「おい、遅いぞ祐介！！どんだけでっけえのしてたんだ！？」
だれ？

《あれは亮平だよ》

あ、そうそう。

亮平さんは待ちくたびれた様子で、あたしたちを見ては溜め息を吐いてました。

と言うか。

“でっけえの”ってどうなんでしょうか。
デリカシーに欠けますっ。

《僕の姿だから仕方ないよ》

そうですね。

よし。

「ごめんごめん、思いの外でかくて写メ撮ってブログにUPしてたら遅れたよ」

《ちょっと桜井さん!?!》

「マジかよ!?!俺の他にそんなことしてる奴いたのか!?!」
バカですこの人。

《バカは桜井さんだよ》

「汚いからお前。何でそんなことしてんのよ」
怜さんがまるで汚いものを見るような目で亮平さんを見ていました。

「さすが歩く公然わいせつ陳列罪」

司さんもバカにしてみました。

…しかし“歩く公然わいせつ陳列罪”ってすごいですね!?!
犯罪が歩いてるんですよ!?!

興奮します！！

フンスッ！！

「さて、どうする？」

司さんの言葉にみんな唸り声をあげました。

「ナンパするには情報が足りないしな」

ひゃっ、ナンパですか！？

あたしはつついっぴ亮平さんの言葉に驚いてしまいました。

「いや、ナンパしに来てないから」

ですよねえ。

さすが怜さん。

あたしがいるのにナンパは失礼ですよ。

てか早く海入りたいですうー！！

《怜は果たしてそれを見越して言ったのかな？》

「祐介何するー？」

司さんがあたしにそう聞いてきました。

そんなもん決まってるですっ！！

「海に入りたいですうー！！」

あたしは両手を高らかにあげてそう言いました。

《桜井さん！！》

「あ」

やべえーです。

「ですうー」？

「ちょ、ちよつと待って！！祐介が“ですうー”だつてよ！！ギャ
ーッハハハハハ！！祐介キモいですうー、ギャハハハハハハハ！！」

《亮平ええええええ！！この野郎おおおお！！》

「亮平、僕は『海に入りたい。で、吸う』と言ったんだよ」
あたしは親指を立てて力強く言い放ちました。
亮平さんの目を逸らすことなくジッと見つめて。
あたしは“ですうー”なんて言っていないと主張するように。

《海で何を吸うのさ》

「奈緒ちゃん、それは…苦しいぞ」

怜さんが頭を抱えて小さく呟きました。

「あ、そうだったんだ。ごめん」

この人アホです。

「アホだ」

「アホだな」

《アホだね》

「それじゃあとりあえず海入ろうぜー」

そう言って亮平さんは一人海に向かって走り出しました。

「よっしゃー」

「待てよー」

それに続いて怜さんと司さんも走っていきました。

「よーし、今日は思いっきり遊びますよぉー」

あたしも三人の背中を追うように走り出しましたっ。

《今日はいっぱい楽しんでね桜井さん》

はいっ

それからあたしたち四人は、まるで子供のようにはいでいました。

「ブレエエンバースタアアアー!!」

「ちょ、やめろって怜っ!!がばっ、ごぼぼっ」

「あっはっはー。亮平ドンマイ」

「きゃーっ!!怜さん、それあたしにもやってくださいですうー!!」

「ゆ、祐介!?!」

《桜井さん言葉遣いが…》

じゃなくてです。

「おい怜、それ俺にもやれやあー!!」

「ゆ、祐介!?!どうしたんだ!?!」

《僕そんなキャラじゃないよ!!》

「よおーし、来い祐介!!」

「上等だオラアアー!!」

《桜井さあーん!!》

「祐介!!かき氷食おうぜ!!」

かき氷!?

きゃーっ!!

食べたいですー！！

「よかるう、ではどちらが早くかき氷売場まで着けるか勝負ですぞ
亮平殿！！」

「殿！？」

《僕はそんな將軍みたいな喋り方しない！！》

「では、敗者は勝者にかき氷をご馳走すると言うのは如何か祐介殿
！！」

「亮平まで！？」

「よかるう！！では勝負でござる！！」

そう言っただけと亮平さんは走り出しましたっ！！
「もうお前らやっつけ。怜、俺らもかき氷食おうぜ」

「やっぱり海に来たら砂に埋めないとな」

亮平さんが砂に埋められてますね！

「いっつも俺だよな。こういうの」

「チビだからな、お前」

「うるせーよ司。祐介だってチビだろうが」

《亮平よりは高いぞ僕は》

「ちっちゃかったら埋めるの！？だったら埋めてください！！」

「おっ、良いぞ祐介」

「やったですー！！」

「待て怜、まだこいつの頭を埋めてない」

「生き埋めかよ！？」

「じゃあさっさと亮平さん埋めましょー！！それで早くあたしを埋

めてくださいですうー!!」

「良く言った祐介」

「祐介まで!？」

《何か言葉遣いに対してスルーされてる…》

「はあ、疲れたなー」

「だな」

あたしたちは浜辺で海を見ながら黄昏たそがれていました。
気が付けば夕方です。

オレンジ色の空に沈んでいく太陽。そしてその太陽の光が海に反射して輝いていました。

まるで、キラキラ光る海の上に太くて長い光の道があるように。
そんな幻想的でとても綺麗なその景色をずっと見ていたくなりま
す。

波に揺れて、時折ぼやけつつも、決して消えることのない光の道。
この光の道しるべに沿って行ったら何があるんでしょうか。

きつと、まだあたしの見たことのない世界が広がっているんでし
ょうね。

見てみたいですね…。

その世界を…。

「どうする? 帰るか？」

怜さんはゴロンと寝転んであたしたちに言いました。

「そうだなー。はしやぎすぎて疲れた」

亮平さんも同じようにゴロンと寝転びました。

「亮平、結局ナンパは成功しなかったな」

寝転んだ亮平さんを見下ろしながら司さんは言いました。

バカにしたように笑ってます。

「うるせえ」

「あははっ、今日は本当楽しかったねー。良い思い出が出来たよ」

あたしもゴロンと寝転びますー。

「何言ってるんだよ、夏はまだまだこれからだぜ祐介」

「あいたっ」

うー。

亮平さんに叩かれましたあー。

《桜井さん大丈夫？》

大丈夫ですっ

「まだまだやりたいことが山ほどあるー！せつかくの夏休みだ、思う存分遊ばないともったいねえべ」

「そうだなー、海だけじゃ足りねえよな。あ、俺キャンプしてえ」

「お、良いねー」

「お前ら、夏祭り忘れんな。ナンパし放題だぞ」

「お前は成功しねえだろうが」

「うるせえよバカ司」

ぷっ。

「あはははっ」

あたしは思わず笑ってしまいました。

「お、ウケた」

「祐介えー、笑うなよー」

人間てやっぱり良いですね。

「じゃあ次はキャンプしよう。僕もキャンプしたい」

と言うより。

もっと皆さんと楽しい時間を過ごしたい。

もっと皆さんと遊んでみたい。

ねえ祐介さん。

《何？桜井さん》

幽霊のくせにそう思うあたしはおこがましいでしょうか？

《全然。僕は良いと思うよ》

そうですか。

ありがとうございます。

「よし、じゃあ次はキャンプだー!!」

「楽しみだな」

「俺そう言つの超大好き。だから楽しみですうー、ギャーハハハハハー!!」

むう。

えいつ。

「ぎゃあああああー!!」

「今日の祐介はなかなかG」だな」

「俺もやろー。オラァアアー!!」

「うぎゃあああああああー!!」お、お前ら背中叩くなー!!日焼けしてんだからー!!」

あっはっはー。

楽しいですうー

「じゃあそろそろ帰るか」

「そうだな」

「帰るべー!!」

ぺちん。

「ぎゃあああああー!!」祐介この野郎おー!!返事変わりに背中叩くなー!!」

視点は桜井さんから僕に変わりますよ。

あの後、僕は着替える前に桜井さんと入れ替わり、何食わぬ顔で着替えを済ませた。

電車の中で亮平が、

『また撮ってたんだろ。今度ブログ見せろよ』

と言ってきたので、持ってたバッグで背中を思いっきりぶん殴ってやった。

その痛みに悶える亮平の顔が破壊的に面白かったので泣きながら（爆笑して）写メに撮った。

僕、ブログはやってないけどmixiはやってるので今度UPしたいと思います。

良かったら皆さん見に来てください。

そして電車内でマナーもへったくれもない行動をとってしまったってごめんなさい。

そうしてる内に僕らの集合した駅に着いたので、駅前で三人と別れ、今に至ります。

「桜井さん、今日は楽しかった？」

僕は隣でフワフワ浮いてる桜井さんに向かってそう言った。

「はいっ！！今日は本当に楽しくてすごい良い一日でしたっ！！」

僕と入れ替わってからずっとニコニコしている桜井さん。

よっぽど楽しかったんだな。

本当、入れ替わって良かったな。

「大丈夫？疲れてない？」

「大丈夫ですよー」

そう言いながら桜井さんは鼻歌を歌いながら変な踊りを踊っている。

何その踊り。

「祐介さんも大丈夫ですか？」

桜井さんは踊りを止め、フワフワと僕の前に移動した。

「幽霊が乗り移ると言うのは、乗り移られた人にとって精神的にすごい負担がかかるんです。それにあたしもはしゃいでましたし…。祐介さんの身体には精神的負担と肉体的負担の両方の負担がかかっている状態なんですよ。だから心配ですう…。」

さっきまでニコニコしてたのに？

ずいぶん急激に態度変わったね。

でもありがとう。

心配してくれて。

「僕は大丈夫だよ。確かにちょっと疲労感はあるけど、嬉しそうな桜井さん見てたら嫌でも元気出てくるからね。だから心配しないで」
ぽんぽんと桜井さんの頭を軽く叩きながら僕は言った。

「ひゃっ、あ…、はい」

桜井さんは頭を両手で触りながら上目遣いで僕を見る。
ちよつと照れているようだった。

そして僕の隣に戻り、

「お腹空きましたねっ」

と笑顔で言った。

「今日はまたオムライスでも食べようか」

「やったですうー!!」

そう言いながら桜井さんは右手をあげて喜んでいました。

第17話 カブトムシを捕りに行きます

「あゝ体痛いゝヒリヒリするゝ」
ぺちんっ。

「ぎゃあああああ！――桜井さん！？僕は亮平じゃないよ！？背中叩かないでー！！」

「日焼けってそんなに痛いんですか？」

ベッドに寝てる僕の背中を擦りながらそう僕に問い掛けるストリートロングヘアのロリっ子幽霊こと桜井奈緒さん。

「痛いよっ――！」

背中痛いからうつ伏せで寝てたのに…。

「へえー、そうなんですか」

若干擦られるのも痛いんだけどなー。

「祐介さんって兄弟いるんですか」

お昼。

僕と桜井さんは昼ごはんのラーメンを食べてました。

ちなみに僕は醤油ラーメンで、桜井さんは塩ラーメン。

僕はあっさり醤油ラーメンが好きなんだよね。

塩ラーメンを食べる桜井さんも多分あっさり系が好きなんだろう。それで桜井さんが麺をちゅるっとなら滑らせて、僕にそう聞いてきました。

「兄弟？いるよ」

僕はズツとスープを口に運ぶ。

あっさりには本当に良いなあ。

インスタントだけど美味しい。

「お兄ちゃんですか？」

桜井さんはそう言いながら蓮華に麵を乗つけてふうふうして

いる。

そしてパクツと口に含んで、

「うーまー」

と、頬つぺたに手を当てて、とろける表情をしている。

うん、幸せそうだ。

「いや、弟だよ」

僕はそう言いながら、桜井さんのどんぶりに蓮華を入れてひよいとスープを掬^{すく}った。

だって桜井さん、すごい美味しそうな顔してたんだもん。

スープだけでも味見したいじゃないか。

と言つても作つたのは僕なんだけどね。

ズズズツ。

「うーまー」

「ああーっ、あたしのスープがあ」

桜井さんは口を膨らませて言う。

タコみたいで可愛いなー。

「タコは可愛くありません。お返しです。えいっ」

桜井さんはニヤリと笑い、僕のどんぶりに蓮華を入れてスープを掬^{すく}って口に運ぶ。

「うーまー」

「醤油も美味しいでしょ？意外にあっさりしてて」

「美味しいですね」

「良かったら一口どう？」

僕はそう言つて桜井さんの方にどんぶりを寄せた。

「良いんですか？きやはっ、じゃあ遠慮なくいただきますうー」

桜井さんは寄せたどんぶりから麵を取り出してちゅるっ^びと口に運

「うーまー」

と、やっぱり幸せそうな顔をしてました。

「さっきなんで僕に兄弟いるか聞いてきたの？」

食事の後の待ったりタイム突入です。

「何となくですね」

床にちよこんと座りながらそう言う桜井さん。

と言うか桜井さん結構床に座ってるけど、足痛くないのかな？

僕んち座布団ないから直に座る形になるんだけどさ。

絶対痛いよね。

「てか桜井さん、ベッドに座りなよ。足痛いでしょう？」

「良いんですか？きやはっ、じゃあ遠慮なくですう」

桜井さんはフワフワと浮いて、僕のベッドに移動する。

そして、

「ぶあっ！ー！」

と、うつ伏せでベッドに落ちた。

「ふつかふかですうー」

ベッドの上でクロールをする桜井さん。

パタパタ…。

パタパタ…。

パタパタ…バギツ！！

「ふう…」

「“ふう…” じゃないよ桜井さん！！今なんか変な音したよ！？壊したね！？ベッドの内部を破壊したよね！？」

「……………そお？」

おい。

何だその『え？そんな変な音しましたっけ？それより来週水泳の大会なんで練習の邪魔しないでくださいよ』的な顔は。

まあ、良いや。

「良いんですか！？」

「うん」

「え…？ああ…、そのお…、何かごめんなさいですう…」

ははっ。

桜井さん、ばたんきゅー。

「あたし、兄弟いないんですよー」

ベッドに座り直して桜井さんは言う。

「桜井さんって一人っ子なんだ」

僕は床に胡座をかきながらそう言った。

へえー、桜井さん一人っ子なんだ。

イメージ的にはお姉さんがいそうなんだけどな。

おちゃめだし。

甘えん坊要素も取り入れてあるし。

「違うんですよ祐介さん」

ん？

何が？

「一人っ子だからこそおちゃめで甘えん坊なんです」

そうなの？

僕には良くわからないや。

「遊んだりケンカする兄弟がいないから、やりたい放題やったり甘えちゃうんです」

桜井さんは寂しそうに笑う。

「でも今は違いますよー」

桜井さんは寂しさを振り払い、ニコツと笑う。

「祐介さんがいますからっ」

僕を見て　桜井さんはニコツと笑う。

「あたしのお兄ちゃんみたいな存在ですっ」

そして振り子のように体を左右に揺らし、嬉しそうに言った。

「僕も可愛い妹が出来たみたいだよ」

そう言って立ち上がり、桜井さんの頭を撫でてあげた。

桜井さんはまるで猫のように目を閉じて『うにゃー』と鳴く。
本当に猫みたい…。

ゴロゴロしたいなあー。

「ゴロゴロゴロゴロお〜」

僕犬より猫派だから正直タマンネ。

と、そんなにゃんこ幽霊こと桜井さんと遊んでいると、僕のケータイが震えだした。

「祐介さん、『けーたい』がにやってますにゃん」

「いや、可愛いけど、“何でもは知らなくとも、ほとんど何でも知ってる巨乳学級委員長ちゃん”とキャラが被るから止めとこうか」

「はいっ」

桜井さんにそう言っけケータイを開いた。

「メールだ。…亮平から？」

「あの変な頭のナンパ野郎ですね」

ずいぶんない種だね桜井さん。

そう思いながらメールの内容を確認した。

『カブトムシ取りに行こう』

ぶぶっ！！

「くくく…、高校生にもなって…、カブもぶぶっ！！カブトムシつて！！」

やばい。

何かツボに入った。

「カブトムシ取りに行くんですか！？きゃー！！祐介さん、是非行きましよう！！」

あら、桜井さんがはしゃいでる。

別に行きたくないけど、桜井さんが行きたいなら行くしかねー

べ。

僕は、

『良いよ。どこ取りに行く？』

と、メールを返した。

「ぐわあー！！挟んじゃうぞあー！！お前の体挟んじゃうぞあー！！」

桜井さんは腰を前に曲げて頭を挟み込むように両腕を伸ばすと、その伸ばした両腕を左右に動かし、僕に迫ってきた。

「桜井さん、それクワガタ」

「あ……」

「祐介ー！！こっちだこっちー！！」

「おー」

僕たちは街から外れた所にある公園にやって来ました。もちろん移動手段はチャリです。

「うわぁー、何か自然に囲まれた公園ですねー」

桜井さんが辺りを見渡しながら言った。

この公園は街中にある遊具を中心とした公園ではなく、公園と言うよりは林に近いほど自然に囲まれていた。

もちろん遊具もあるのだが規模が小さく、また設備も不十分なため、遊具で遊ぶ子供たちはあまり見かけない。

しかしその反面、サッカーや野球などそう言った運動の出来る広場が設けられてあるため、そう言った面では何不自由なく遊べる。

また、広場とは別の場所にどこから水を引いてるのかわからないが小さな川が流れていて、その川を中心にあちらこちらに数多くの木々がそびえ立つ。

そんな川のせせらぎや風によって鳴り広がる葉音が、訪れた人々の心を癒し、また爽快感を与える。

老若男女に拘わらず、人々にとってこの公園は、言わば憩いの場のような存在であった。

「ようし、カーブトムシ取ろうぜー」

亮平はそれはそれは元気いっぱいに言いました。

「取ろうぜーですう」

桜井さんもそれはそれは元気いっぱいに言いました。

「ほら、祐介も」

やめて。

僕を煽らないで。

「ほら、祐介さんも」

やめて。

僕を更に煽らないで。

「祐介！！」

「祐介さん！！」

わっ。

二人迫られると怖いなあ。

…はあ。

仕方ない。

「取ろうぜー」

はい、完全に棒読みです。

僕たちはとりあえず、川のある方へ行き、そこで三人別々に行動することにした。

ちなみに虫かごは亮平が用意してくれました。

用意周到だね。

無駄に四つもあるし。

亮平に聞いたところ、四つの虫かごはそれぞれ僕、亮平、司、怜の分だったらしい。

でも司と怜は用事で来れないと言うことなので、現在僕と亮平は二人で二つずつ虫かごを持ってまゝす。

桜井さんに一個渡そうかな。

桜井さんに持たせても同化するから亮平には見えないんだし。

ま、いつか。

「なかなか見つからないな、カブトムシ」

僕はそう呟きながら、目の前にある木を蹴ってみた。
ドスッ!!

.....。

反応なし。

「やっぱ落ちてこないか」

僕は溜め息を吐きながら、他の二人の様子を伺った。

亮平は...

ぶぶっ!!

あいつ、木に向かって全力のドロップキックをお見舞いしてる。
てか、ドロップキックしてる最中の亮平の顔よ。

歌舞伎役者みたいな顔をしてるじゃないか。

あいつ、パねえ。

さて次は桜井さんだね。

て言うか全然見当たらない。

.....。

.....。

...!

あ、ずるい!!

浮きながら探してる。

あれじゃあもう優勝じゃん。

カブトムシ捕り大会優勝だよ。

いや、別にやってないんだけどさ。

まあ、とりあえず二人とも喚声をあげてないから、まだ一匹も捕
まえてないんだろう。

僕は少し移動して、また木を蹴ってみた。

ドスッ!!

.....。

反応な...

ガサツ。

うおっ、反応あり！！

後ろの方だ。

僕はそう思い、後ろを見た。

「いててて…」

「！？」

慌てて振り返る。

もし見間違いであれば、再度振り向いたらそこにはきつと“カブトムシ”がいるはず。

でも見間違いでなければ…。

僕は恐る恐る後ろを向いた。

「何するんだよ！！落ちちゃったじゃないか！！」

「！！！？」

…見間違いじゃなかった。

僕の目の前にはカブトムシなんていなかった。

それと引き換えに…。

「男の子？」

そう。

それは麦わら帽子にランニングシャツ、そして短パンを履いた少年だった。

お尻を擦って苦痛な表情を浮かべていることから、恐らく僕の蹴った木から落ちてきたのだろう。

しかしそれはあり得ないのだ。

僕の蹴った木。

人の手が届く距離に“枝がない”のだ。

しかも木の主体となる幹はとても太くて、登ろうとしても体を支えるのが困難なのである。

つまり、“人間には登れない”のだ。

「君…、人間？」

僕は恐る恐るその少年に尋ねた。

「僕は幽霊だよ」

その少年はぴょこんつと立ち上がり、胸を張って言った。
「うわあ…。」

ちっちゃいなあ…。

その少年の身長は僕の胸すらにも達していなかった。

僕も身長ないのに。

「うるさいな！！子供なんだから仕方ないだろ！！」

その少年は、その小さな体を大きく動かして地団駄を踏んだ。

頑張ってるな！。

「うるさい！！頑張ってるって言っな！！」

ほれ、頑張れー頑張れー。

「うるさいうるさい！！」

はい、頑張れー頑張れー。

「うるさいうるさい！！」

頑張ってーあそーれ頑張ってー。

「う……………っ」

？

「うわああああああん！！！！」

やべっ！！

泣いちゃったっ！！

どうしようどうしよう！！

弟ならまだしも、こんなちっちゃい子を泣かせちゃったよ！！

「ぢつぢやいつで、ゆうなああゝあゝ…。」

少年は泣きながらも懸命な抵抗を見せる。

「ああ！！ごめん！！ごめんね！！」

僕も必死に宥めようとするがそれも虚しく、少年は泣くことを止めない。

「祐介さあん、さっきからうるさいんですけどあ…、おおおお！！」

桜井さんだ！！

良いところに来てくれた！！

「桜井さあーん、僕、この子泣かせちゃったよお」

そう言いながら僕は桜井さんにすがる。

僕も泣きたくなるよお。

あれ？視界がぼやけてきた。

あれ！？桜井さんが見えない！！

あるええ！！？桜井さんどこおお！！？

「ゆ、祐介さん！！あたしはここにいますよおー！！落ち着いてください！！」

あ！！

桜井さんの声だ！！

桜井さああああん！！

「落ち着きましたか？」

「うん」

は、恥ずかしいところを見せてしまった…。
情けない…。

「ゆ、祐介さん、全然大丈夫ですから！」

桜井さんがへこんでいる僕の肩をポンポンと叩きながら慰めてくれた。

「あ、ありがとう。落ち着いたよ」

「良かったですつ。ところでこの子、どうしたんですか？」

桜井さんは視線を少年に向けながら僕に問い掛けた。

「うん、実は…」

僕はこれまでの経緯をありのまま桜井さんに話した。

ちなみに、歌舞伎役者のような顔をして木に全力でドロップキックをお見舞いしてる亮平のことを話した時、

『ぶふっ！！』

と、桜井さんは吹き出していました。

「…なるほどです。つまり祐介さんが蹴った木から幽霊のこの子が落ちてきて、思わず泣かせちゃったと」

桜井さんは手をアゴに当てて、納得した様子を浮かべていた。

「はい…。ちよつとした出来心だったんです…」

まさか泣くとは夢にも思ってたかったし。

これは素直に反省してる。

「わかりました。祐介さん、ちよつと待っていてください」

桜井さんは僕にそう一言残した後、ゆっくりとうずくまってる少年に近付いた。

「こんにちはです」

「ひつく、だあれ…？お姉ちゃん…」

桜井さんの言葉に重い頭を上げる少年。

と、言っても顔を隠すように麦わら帽子を深く被っているため顔は見えなかった。

「あたしの名前は桜井奈緒ですつ。あそこのお兄ちゃんのお友達ですよ」

桜井さんはこつちを指差しながら少年と話している。

どんなの話してるのかな。

「あいつ…、嫌いだよ…。僕を苛めるんだよ…？酷いよ…」

少年は更に麦わら帽子を深く被る。

「うん、あのお兄ちゃんから聞きました。でもすつごく反省してるとも言っていましたよ」

「うつ、ひつくつ、嘘だあ…」

「嘘じゃないです。本当ですよ？すつごく反省してました。だからあのお兄ちゃんのことを許してあげて貰えないでしょうか？」

桜井さんはそう優しく微笑み、柔らかい口調で少年に僕の許しを願った。

「やだよ…。嫌いだよ…。あんな奴…」

しかし、少年は許すことを拒む。

すると桜井さんはその少年を抱き寄せた。
優しくそつと。

まるでシャボン玉に触れるかのように。
優しく丁寧に。

少年を包み込んだ。

「幽霊でいることって辛いですね。一人でいることって寂しいですよ。ね。ずっとこの公園に一人孤独に過ごしていたあなたなら身を^{もち}以て痛感したと思います」

抱き寄せた際に、麦わら帽子が地面に落ちて、少年の頭があらわになっていた。

桜井さんはその少年の頭を柔らかく撫でる。

しっかりと。

少年の存在を確かめるように。

「だからこそ幽霊のあなたを見て、話しかけてくれた生身の人間に出会った時、あなたはとても嬉しかった。顔には出さずとも心の中では歓喜の気持ちでいっぱいだった筈です」

少年も突然抱かれたことに戸惑いを隠せなかった。

しかし桜井さんから伝わる温もり、そして言葉の一つひとつに少年は安心感を覚える。

体だけでなく、心も包み込むその温もりに少年は魅了されていた。
「だからこそ、あなたは戸惑っちゃったんですね？人間と接すると言うことに。それはあなたにとって久しい記憶なのですからね。ふふっ、あなたのその服装を見ればわかります」

桜井さんは少年の頭を優しく撫でていた手を下に滑らせる。

ちよつと汚れた白いランニングシャツ。

所々糸が解れている青い短パン。

それらを指でなぞっていく。

触れるか触れないかと言うほど柔らかく。

まるで舞い散る雪の結晶が肌に触れて消えていくように。

「それにあなたは幽霊である以前に子供なのです。見たこと、聞いたこと、

たことを素直に受け入れ、ありのままに自分の感情へ変換させることが出来る、純粹で清浄無垢な心を持っています。それ故に、あの人間の“優しさ”を“悪意”と捉えてしまったんですよ」

そして桜井さんは少年と向き合う。

目の周りを真つ赤に腫らせた少年の目。

不安で彩られた純粹の集合体。

そこから流れる涙を人差し指で拭き取る。

「優しさ…？」

少年は呟く。

「はい、優しさです。きつとあなたをどこかで弟の姿と重ねていたんでしょうね。だからちよつとイジワルしちゃったんです。言ってしまうえば愛情の裏返しみたいなものですよ」

そう言つて桜井さんは落ちていている麦わら帽子を自分の頭に被せる。

「似合いますか？うふふっ」

そう少年に微笑みかけた後、麦わら帽子を少年の頭に被せた。

「幽霊にとつて幸福なこと、それは人間同様に見てくれることだと思つんです。幽霊の在るべき場所じゃないこの世界であたしたち幽霊の存在を在るべきものとして認識してくれる。そして在るべきものとして接してくれる。人間の搾りかすのようなあたしたちにとつて、それは幸福以外に何と言えるでしょうか？」

桜井さんは再度僕に指を差す。

「あのお兄ちゃんとはちゃんとあなたの存在を認識し、人間同様に接してくれました。イジワルをしたのがその証拠です」

そう言つた後、桜井さんは少年にニコツと笑つて立ち上がった。

「あのお兄ちゃんのところに行きましょう。そして許してあげてください」

少しの距離を隔てて、僕と少年は向き合う。
気まずそうに僕を見る。

そして少年の隣には桜井さんがいる。

少年を安心させるかのように手を握らせていた。

「祐介さん」

うん、わかつてるよ桜井さん。

僕は大きく深呼吸した。

落ち着かせるために。

しっかりと謝れるように。

…よし。

「なあ、名前教えてくれないか？僕は藤森祐介」

僕はまず、少年に名前を聞いた。

いくら子供とは言え、お前呼ばわりは失礼だ。

誠意の欠片もない。

「高橋 たかはし かぶと 甲…」

小さい声で少年 甲が言った。

泣いた後だから疲れてるのか、まだ僕を許そうとする気持ちがないのか。

絶対後者だろう。

良いんだ。

僕が悪いんだから。

子供相手にちよつとした出来心でイジワルしたんだから。

許してもらうまで 謝り続けるんだ。

「甲か、カッコイイ名前だね」

僕は出来るだけ明るく、そして笑顔で言う。

だって素直にそう思ったから。

「……………」

甲は僕から視線を外し、何も言わずにうつ向いた。

「甲、僕が悪かったよ。何か…、可愛くてさ。僕の弟のちっちゃい頃にそっくりで。そして何だか懐かしく思えてきちゃって。それで…
ついついイジワルしちゃったんだ」

そして僕は頭を下げて、

「ごめんなさい」

と、一言告げた。

「僕、ちっちゃくない？」

「うん。僕の方がちっちゃい」

「僕、頑張つてない？」

「うん。むしろ必死にボケようとしてる僕の方が頑張ってる」

「ぶっ」

お？

今笑った？

甲くん今笑いました？

「アハハハハハッ！！お兄ちゃん面白いね！！」

甲はうつ向く顔を上げ、お腹を抱えて大きく笑いだした。

「あ…、はは…」

突然の大爆笑で僕は呆気にと取られると共に、困惑した。

「祐介さんいろいろ必死ですからね」

甲の隣で桜井さんは口に手を当ててふふつと笑う。

おい。

「いーよお兄ちゃん。僕もちっちゃいことで泣いちゃってごめんなさいっ」

甲は少し照れながら僕に謝ってくれた。

…か。

可愛いー！！！！

頭をぐしゃぐしゃ撫でてやりたい。

だって見てよ。

照れ隠しに笑ってるんだよ？

歯抜け顔でニコニコ笑ってるんだよ？

可愛くてたまらないわ！！

「祐介さんっ」

ぼてぼてと僕に駆け寄ってくる桜井さん。

「良かったですねっ」

さっきまでの大人びた雰囲気ではなく、甲のような無邪気で可愛い笑顔で僕に言う。

そんな桜井さんに向けて、

「うんっ」

と、僕も笑顔で返しました。

「見ろよ祐介!!」

僕と桜井さんと甲、そして今まではすっかり忘れられていた亮平で集まり、今日のカブトムシ採集の結果発表をした。

甲は集合するや否や『そんなことしてたの?』と、若干バカにしたように言っていた。

“高校生にもなつて…”という蔑みの眼差しを僕らに向けていたもん。

あれ絶対バカにしてたよ。

そんなこと思いながら、僕は亮平の虫かごを見てみた。

「うわあっ!!何これ!?アブラゼミばっかじゃん!!」

亮平の虫かごの中にはカブトムシなんて一匹もおらず、その代わりにアブラゼミが大量に入っていた。

これ何匹いるんだ…!?

ザッと二十匹はいるぞ!?

気持ちわりいー!!!

てかカブトムシはどうなったんだよ!!

カブトムシ!!

KA・BU・TO・MU・SHI!!

「いやあ、頑張つて木蹴つてただけで全然落ちてこなくてさー」

結果がこれと、亮平はゼミのオーケストラの如く、無数のアブラゼミが鳴いている虫かごを指差して言った。

「だからってゼミって…」

もう気持ち悪くて亮平に近付けない。

つかどうしてお前は平然とその虫かご持っていられるんだ!?

「うるせえ!! お前なんて一匹も捕まえてないくせに!!」

そう言つて亮平は僕の虫かごを見て怒鳴る。

「この昆虫採集大会の勝者は俺だぁー!!」

みーんみーんみーんみーんみーん…。

両手を高らかにあげて叫ぶ亮平を、まるで祝福するかのようにな、虫かごにいるアブラゼミたちが一斉に鳴いた。

そんな一人で喜んでいる亮平を尻目に僕たち三人は顔を見合わせ、笑った。

悪いが亮平、今回は僕の勝ちだよ。

君には見えてないけど、とても素直で可愛い一匹の“甲”を捕まえた僕のね。

第18話 思い出ですう

高校生になって。

一人暮らしをして。

新しい友達が出来て。

行ったことのない場所に遊びに行つて。

そんな日々がいつしか当たり前になり、そしていつしか僕の日常となつていった。

様々な“初めて”を得た僕の日常。

それが今の僕である。

何かを得れば、何かを失う。

その失われたものは今から過去へと姿を変え、表舞台から降りるのだ。

人、物、風景、思い出。

そんな様々なものに対して懐かしさを感じてしまったら、それは既に過去なのだ。

つまり高校生の僕から見た中学生の僕。

まごうことなき過去の自分。

僕の 思い出したくない過去の思い出である。

まあ、思い出したくないとは言つても、傍^{はた}から見たら何が？つて思われるかもしれない。

だからこそ思い出したくないのだ。

普通だから。

これでもかつてくらい普通だから。

何の特徴もない。

一般ピープル部門代表。

実にリーズナブルな人生。

それが僕だったから。

三年間全教科オール3。

テストの順位もほぼ真ん中とか、真ん中辺りとかそう言う曖昧な表現ではなく“ど真ん中”。

趣味特技など他人より何か誇れるものがあるのかと言われても特になし。

容姿、性格も別に良くもなく悪くもない。

文化祭などの行事となると、しっかりと役割を与えられるが重役と言うほどではない。

クラスの中でも人気者と言うわけではないが、そこそこみんなと交流があるレベル。

ハリーポッターで言うネビル・ロングボトム程度の位置。

正に中途半端の極み。

それが僕こと藤森祐介である。

そんな何の変哲もない思い出をほじくり返されると、正直僕は泣きたくなるもんだ。

ここ最近、快晴の日が続いていた。

雲一つない、水色の絵の具で隙間なく塗り潰したような空。強烈な眩しい光と熱を放ち、人々の視界と水分を奪う太陽。

正に快晴である。

こんな日に海に遊びに行く人も多いだろう。

“絶好の海日和だ！！”

こんな日にプールに遊びに行く人も多いだろう。

“絶好のプール日和だ！！”

しかし、僕は違う。

僕は高校生でありながらも　主夫だ。

結婚してないけど。

結婚できる歳じゃないけど。

況してや相手なんていませんけどぉー！！
つまりはだ。

家のことは自分でやらなくちゃいけないんだ。
窓から眺めるそんな空の景色。
なあんて“絶好の洗濯日和”なんでしょうか!!

グONGグONGグONGグオン…。

「桜井さーん、そんなに洗濯機眺めて何が面白いのー?」

玄関付近にある洗濯機が音を鳴らして回っている。

今は大体脱水してる辺りだろう。

グONGグONGグONGグオン…。

それをジーーーーッと見つめてるストレートロングヘアのロリ
っ子幽霊こと桜井奈緒さん。

…何か首吊ってる人みたいにガツクリ頭を下げてるけど。

まるで 幽霊。

いや、幽霊ですごめんなさい。

「ふ、ふふふ…」

「!?!」

さ、桜井さんが…。

洗濯機を見ながら笑ってる…!?

不気味だ。

『あっはっはー』とか『きゃはっ』じゃなくて。

『ふふふ』と笑っている。

怪しい…。

怖い…。

でも可愛い…。

「楽しそう…」

え?

何が?

何が楽しそうなの?

洗濯物が?

「あたしも…、これの中に入ろうかな…」

「ストオーリーツプ!!」

バターになっちゃうぜ桜井さんっ!!

「よし、洗濯が終わる前に洗濯物を^{たた}畳もうか」

「はいですっ」

そう言って、僕と桜井さんはベランダに出た。

僕は洗濯物はベランダに干している。

別に特に理由はないけど、強いて言えば部屋に干すと邪魔になるからである。

ただでさえ七畳一間の狭い部屋なのに、況してや今では二人（一人は幽霊）で生活してるのだ。

極力物は置きたくない。

ちなみに、桜井さんの洗濯物もあります…。

い、いや、別にそれ見てどうこうしようなんて考えてないよ!?

しょうがないでしょ!!

二人で暮らしてるんだから!!

別々にやるの面倒くさいの!!

……………フツ。

「あ、洗濯物を入れるカゴ忘れた」

「そうですね。あたし取ってきますよ」

「ありがとう。カゴはクローゼットの中にあるから」

「はい」

桜井さんはそう言っパタパタと部屋の中に入っていった。
うーん。

別にカゴいらなかったかな?

そんなに洗濯物多くないし。

僕はそう思いながらも、せっかく桜井さんがカゴを持ってきてくれるので、カゴが来るのを待つことにした。

いやあ、しかし本当に良い天気だな。

夏ならではの快晴。

良いね！！

暑いけど。

「祐介さん、これなんですかぁー？」

「これ？」

僕は振り向いて桜井さんが持つてるものを見る。

そして後悔する。

桜井さんをクローゼットへ向かわせたことに。

きつと僕の顔は、この澄み渡る青空と同じ真っ青になっているであろっ。

僕の思い出が。

僕の過去が。

思い出したくない過去の思い出が。

今　桜井さんの手の中にあつた。

ピー、ピー、ピー…。

洗濯機から発せられる洗濯完了を知らせるコールは、まるで僕らの救難信号のように部屋中に鳴り響いていた。

「卒業アルバム？」

とりあえず僕と桜井さんは洗濯物を畳んで仕舞った後、先ほど洗濯していた洗濯物を干し終えた。

その最中　と言うより、その終始、僕はきつと顔面蒼白だっただろう。

時折桜井さんに『大丈夫ですか？』と心配されていたし。

そして今、僕の卒業アルバムを挟んだ形で僕と桜井さんは向かい合っていた。

「これ、祐介さんの中学時代の卒アルですか？」

…そんなウキウキしながら僕を見ないで。

…そんな期待感全開で僕を見ないで。

「…うん」

「きゃーっ！！卒アルですう　！！しかも祐介さんの中学時代の卒アルですうー！！きゃーっ！！きいやああああー！！」

“きいやあ？”

“きゃー” じゃないの？

「見て良いですかっ！？見ちゃって良いですかっ！？ねえ祐介さんっ！！」

はあ…。

僕の顔面が青空なら桜井さんの目は真っ赤な太陽だよ。

光りすぎ。

明るすぎ。

熱すぎ。

「嫌って言ったr r r r r r r r r r ああああ！？ちよっと！！桜井さん！？何でもう見てるのおおお！！！」

桜井さんは僕の返答に待ちきれず、表紙をめくっていた。

「ふふふ…、この先に、この先にい！！シヨタ時代の祐介さんが写ってるんですね！！」

うひゃひゃひゃひゃと、桜井さん。

いや、それ去年撮ったやつだよ？

しかも写ってるやつのはほとんどが中三の時のだし。

僕のシヨタ時代の思い出は闇に葬ったのだ。

「へえー、学校の周りって結構木とかが多いんですね」

「僕の住んでた所『ド』が付くほど田舎だったんだ。だから周りに木とかしかない…じゃなくて！！」

じゃなくてだよ桜井さん！！

危ない危ない！！

桜井さんのペースに巻き込まれるとこだった。

「さ、桜井さん？僕さ、あんまり中学の卒アルを見られたくないんだよね…」

僕はうつ向き、苦笑いを浮かべながら言った。

「何ですか？恥ずかしいからですか？」

そんな僕を覗き込むように見る桜井さん。

見ないで桜井さん…。

僕は今作り笑いをするのに必死なんだから。

絶対変な顔してるんだから。

「う…ん、とにかく見られたくない…」

「祐介さん…」

ああ…、桜井さんが哀れみの眼差しを向けている。

僕は、なんて情けないんだ。

チキンだ。

鳥だ。

藤“鳥”祐介だ。

「あたし、祐介さんのせいでSっ気が芽生えてきそうです…」

“きやはっ”

「え？」

耳元で囁かれた桜井さんの言葉が、僕に恐ろしさを感じさせた。

「祐介さん、可愛いからついつい苛めなくなっちゃいますよ…」

そして僕は咄嗟に桜井さんを見た。

唇と唇が触れそうなほどの近い距離。

そんな近くにいる桜井さんは。

笑っていた。

妖しく笑っていたのだ。

そして僕は悟った。

“死亡フラグが立った”

と。

「よーし、次のページいっちゃいますよー」

桜井さんは両手を上げて、意気揚々と言った。

「ははっ、は…」

もう僕は笑うしかできなかった。

もうどうにでもなれ…と。

ニコニコしてはしゃいでいる桜井さんを尻目に。

僕は軽い自暴自棄になっていました。

「祐介さんって中学の時から何も変わってないですね」

僕の卒アルを一通り見てご満悦な様子の桜井さん。

それに比べて僕は、心の中が満身創痍になっていた。

体は冷や汗でびっちょびちょ。

また洗濯物が増えるなあ。

僕はそんな的外れな心配をするほど、どうでも良くなっていた。

「そんなに見られなくなかったですか…?」

「ははは…」

そりゃあ…、見られたくないさ。

個人写真ではみんな笑顔で何かしらポーズをとって自分をアピールしているのに、僕は真顔にピースだけ。

体育祭や文化祭などの学校行事別の写真では、集合写真でしか写っていない。

僕が個別で写っている写真ならまだしも、友達と写っている写真すらない。

唯一僕が写っている修学旅行の写真なんて、トランプしていると
言う、正に普通の極みのような写真。

つまり個性がないことが卒アルだけで十分証明されているのだ。

思春期の頃の僕にとってはそれだけで“鳥になりたい”と言う現実逃避の動機に匹敵する。

ごめんね桜井さん。

そんな『やべつ、やり過ぎたかも…』みたいな顔しないで。

僕がチキンだから悪いんだ。

僕に個性がないから悪いんだ。

僕が普通すぎるから悪いんだ。

「…祐介さん」

「ははは…、何桜井さん…」

「カメラありますか？」

カメラ？

カメラなんて、いきなりどうしたの？

「ははは…」

僕は情緒不安定になりながらも、一応デジカメは持っていたのでそれをクローゼットの中から取り出した。

「…よし」

桜井さんは徐におもむきデジカメを手に取り 僕の隣にやって来た。

そしてデジカメをこちらに向けて。

「行きますよー。ハイ、チーズ」

桜井さんの合図と共にデジカメのフラッシュが光った。

「はは…、え？」

え？

桜井さん、今何したの？

と言うかどこでデジカメの使い方覚えたの？

いやいや。

どうして二人で写真撮ったの？

「桜井さん？」

「ありや？ブレてますね」

もう一回！と、桜井さんは再度デジカメをこちらに向けて、

「行きますよー、良い笑顔してくださいねえー。ハイ、チーズ」

と、シャッターを切った。

「祐介さん、もっと良い顔しないとダメですよ」

デジカメのディスプレイを見ながら桜井さんは口を尖らかす。

「桜井さん？何してるの？何で写真なんか…」

僕は桜井さんの行動に混乱していた。

しかし、桜井さんはそんな僕にニコツと笑い、

「過去に良い思い出を作れなかったら、これから作ってあげれば良いじゃないですかっ」

と、言った。

「アルバムにもあるように、写真は思い出作りにほめてこいです。だからあたしとの思い出作りに写真撮りましょー」

嫌なら良いですけど…と、桜井さんは小さな声で付け加える。

…ああ、そうか。

過去の思い出が思い出したくないほど嫌な思い出なら、これから良い思い出を作っていけば良いんだ。

桜井さんのように。

幽霊になりながらも現世に残り、いろんな世界を見てみたいと言っている桜井さんのように。

ははっ。

わかりきっていることじゃないか。

そんなこと。

今までが普通なら 根こそぎ変えれば良い。

「桜井さん」

「何ですか？」

「ありがとう」

そしてごめんなさい。

「それじゃあ行きますよー、祐介さん良い顔してくださいねー。

ハイ、チーズ」

パシャッ。

「どう桜井さん、良い写真撮れた？」

「はい、良い写真が撮れましたよー」

「どれどれ…」

「あら、これは良い写真だね」

「格好良く写ってますよ祐介さん」

「桜井さんも可愛い笑顔だね」

「きゃーっ！！可愛い頂きましたっ！！可愛い頂きましたあー！！」

「…て言うかこれ心靈写真だね」

「はい」

「はいって…」

「あたしが祐介さんと一緒に写真を撮りたいと強く願った呪いの写真ですよ…」

「ははっ、それだったらこんな嬉しい呪いはないね」

「じゃあもつとたくさん呪いの写真を撮っていきましょう」

そんなデジカメのディスプレイに写る写真。

それは満面の笑みを浮かべている桜井さんと、お世辞にも格好良いとは言えない僕のぎこちない笑顔が写っている写真だった。

第19話 ボケとツッコミですう

「ぎゃーっ ははははっ！！！ひー、お腹が…、腹がファンキーに痛てえーですうー！！うわっはっはっはー！！ひいーっ、あ、もうこれヒーハー！！」

お笑いの番組を見て仰向けで足をバタバタさせてお腹を抑えながら大爆笑しているストレートロングヘアのロリっ子幽霊こと桜井奈緒さん。

「それは…、さすがにそれはないですよー！！あっはっはー！！バットの代わりにマットって！！それでどうぶっふっ！！どうやってボールを打てと言っんですかーあっはっはっはー！！ふがっ！！」

足をバタバタさせているのに加え、頭を左右に振りながら大爆笑している桜井さん。

大爆笑の。

大号泣で。

大絶叫。

極めつけは豚っ鼻。

「ひやはははははー！！ふがっ！！」

最後の“ふがっ”。

これ。

「ちよつとイメージ崩れたなあ、桜井さん」

「涙を拭かせてくださーい」

「ん？どうしたの桜井さん」

「“笑撃”と言う名の砂埃が目に入ってきたやいましたー」

桜井さんはそう言ってティッシュで涙を拭く。

果たしてこれはうまいことを言っているのか？

うわっ!!

言っちゃった!!

言っちゃったよ僕!!

恥ずか

「いや、そう言うことじゃなくてです」

.....。

.....ナ。

.....ぐすんっ。

ナイスツツコミ!!

さすが臨機応変にツツコミを入れる桜井さんは違うなあー。

こう...、何か視界がぼやけてうまく言葉にできないけど。

ナイスツツコミ!!

とりあえずそう言っとこう!!

.....ぐすん。

「あたしと祐介さんってどっちが“ボケ”でどっちが“ツツコミ”
なんだろうかってことなんですよ」

ああ、そう言うことですか。

さあ、どうなのでしょうかね？

僕にはわかりません。

つか腹減んね？

「それは完全に桜井さんが“ボケ”で僕が“ツツコミ”じゃないの
？」

そんなことは一目瞭然ですよ。

「あたしボケ担当だったんですか！？そ、そんな...。信じられない
...」

何を今更。

信じれ現実を。

「ほら、今ボケた」

ふふん

やっぱり僕の言う通りだ。

ふっふふん

「祐介さん」

「何？」

「交代しましょうか。ボケとツッコミ」
うん。

いや、別に良いんだけどさ。

別にどっちでも良くね？

そんなこだわる必要なくね？

とりまマックでも行かね？

「え？いや、別に良いよ。交代しても」

と言うわけで。

今回は僕と桜井さんがボケとツッコミを交代してお送りしたいと思います。

僕がボケ担当。

桜井さんがツッコミ担当です。

まあ、ネタとかそんなのはなく、日常会話の中での役割担当ですので。

実際、こう役割がハッキリしていると逆にできないものですね。
何をどうボケれば良いかわからない。

僕はどっちかって言うと 自然に出ちゃうタイプなんですネ、
はい。

だから『ボケろ』とは直接言われてないんですけど、こう意図的にボケるのはちょっと苦手なんです。

前言撤回。

『ボケろ』と言われていました。
目で。

桜井さんに。

もつのすごい眼力で僕に訴えかけています。

『はよボケれ』

と。

うん。

とりあえずやってみるか。

「桜井さん」

「何ですかあ？」

「ふとんがふつとんだ」

「え？え！？本当ですか！？やばいですよ祐介さんっ！！早く逃げないとふとんが襲ってきますよ！！きゃーっ！！どうしようっ、ど
うじまじょおー！！ゆうずげざん！！」

「ストップ」

「ふえ！？ストップしてる場合じゃないですよ祐介さあーん！！ふ
とんがっ！！ふとんがあああ！！！！」

うん。

これのどこがツッコミなんだ？

見事なるボケ。

完璧すぎる。

非の打ち所がないほどに造り上げられたボケだ。

「桜井さんツッコミ担当でしょ？気持ち良いほどにボケてどうす
ん
の」

「…何でやねんです」

！？

こ、これは！？

ツッコミ！！

何だろっ…、すごい衝撃だ。

破壊力が半端じゃない。

僕と レベルが違いすぎる。

「三点」

「なぬ!？」

「ただ低レベルなツツコミだよ。
タイミング悪いし。」

「ノリツツコミにも成立していない。」

「これじゃあ赤点街道まっしぐらだよ。」

「僕もう悟ったよ」

「な、何をですか？」

「桜井さん、ツツコミ下手」

「そんな……!」

「桜井さんはガクツと膝をつく。」

「あたしはツツコミのためだけに生まれてきた存在……。それを否定されると言うことは存在を否定される　つまり死を意味すると言うこと……」

「そして桜井さんはガバツと起き上がる。」

「祐介さんっ!! あたしを殺してください!!」

「いや、もう死んでるよ」

「もし仮にそれを前提に措くなら桜井さんはもう跡形もないほどに死んでいるよ。」

「木っ端微塵です。」

「桜井さん!! 見て!!」

「何ですか？」

「ほら見て、このトランポリンすごいよ」

「僕はベッドの上でぴょんぴょん跳ねている。」

「あ、あたし空飛べるんでそう言うのはいいですね」
「……………」

「僕の体は徐々にバウンドしなくなり、そのままベッドに立ち尽くした。」

「……バツサリ切りすぎだろう。」

「何いらないですって。」

何か必死にツッコんでもらおうとした僕がバカみたいじゃないか。もう桜井さんのはツッコミじゃなくて“蔑み”だよ…。

「じゃあ祐介さんはこの場合どうツッコむんですかつ？」

桜井さんが口を膨らませて僕に聞く。

うーん、そうだな。

「ベッドじゃねえかようー!!」

とりあえず大きな声でオーバーなりアクションで。

「発展です」

発展!?

それは何!?

点数の八点と、ツッコミをもっと発展させろって意味を掛けてるの!?

ちよつとうまい!!

「祐介さんはボケもツッコミも甘いです。アマです。青二才です」

桜井さんは椅子に座り、足を組んでタバコを吸う素振りをしながら言った。

プロデューサーみたい。

その僕を見下す感じが更にそう思わせる。

Sっ気が芽生えるつてのも強ち間違いではなさそうだ。

もう完全に女王様。

ロリっ子な女王様。

「僕はそんな桜井さんも嫌いじゃないぜ」

僕は桜井さんに向けて凜とした表情で言った。

「祐介さん」

「何？」

「飽きたっ」

そう言って床にゴロンと寝転ぶ桜井さん。

「ははっ、飽きたね」

僕は笑いながら寝転ぶ桜井さんをベッドから見下ろす。

「今日の夕飯何食べようか」

「ハンバーグが食べたいですー」

「じゃあ今日はハンバーグにしようか」

「はいっ」

そんな夏のある日のことでした。

第20話 数じゃないですう

「ゆうすつけさぁーん、今日のお昼は何ですかぁー？」

床におちゃんこ座りで台所にいる僕にニコニコしながらそう問い掛けてくるストレートロングヘアのロリっ子幽霊こと桜井奈緒さん。

「今日のお昼は素麺にしようかなと思ったんだよね。桜井さん素麺で良い？」

「あぁ、良いですね素麺っ！！この暑い夏の日にはうってつけですよねっ」

「そうだね。じゃあお昼は素麺で決定」

「けてーい」

桜井さんは右手を上げてとびっきりの笑顔をしながら言った。

嬉しそうだな。

良かった良かった。

「うーまー」

麺をちゅるりと口に滑らせ、頬っぺたに手を当てて幸せそうな表情を浮かべる桜井さん。

「そう？良かった」

僕はそう言いながら麺を嚼る。

「うん。さっぱりしてて美味しいね」

正に夏ならではの食べ物だ。

素麺G」。

「はい！！しかも味や食感だけでなく、このガラスの器と云つてこそが更に爽快感を与えてくれますよね！！」

桜井さんは素麺の入ったガラスの器を舐めるように眺め、箸でクルクル素麺を回し始めた。

器の半分ほど水が入っており、更に氷が二、三個入っている。

桜井さんの回す箸によって水の流れに身を任せた氷同士がぶつかり合い、カラカラと音を立てていた。

「桜井さん、食べ物で遊んじゃダメだよ」

心の中ではそんなこと微塵も思っていないけど。

何となく一応ね。

「ごめんなさいですう」

そうは言ってもすぐには止めず少しの間、氷同士のぶつかる音を楽しむ桜井さん。

カラカラカラカラ…

「良い音ですねっ」

桜井さんは再度素麺をちゅるっと口に滑らせてニコツと笑った。

「何かお酒みたいだね」

「お酒ですか？」

「うん。ほら良くドラマとかでバーで飲んてるシーンってあるじゃんか。ウィスキーとかをロックで飲んでるシーン。あれって、こう、バーテンダーと会話してる時に何気なくグラス回してるでしょ？その時にカラカラってなるじゃん。だから何かそれに似てるなって」
「なるほんです」

桜井さんは箸で氷を突つつきながら言う。

カランと氷が音を立てた。

「それは何か大人な雰囲気ですね。でも氷がお酒じゃなく、こうして素麺の器に入っていると、夏の雰囲気が出ますよね」

「確かにそれはあるね」

素麺じゃないけど、氷の入った麦茶なんかは完璧夏の雰囲気を醸し出している。

物は用途によって様々な雰囲気や光景を映し出すのである。

「こう言うのってあたし好きなんですよ」

麺を口に滑らせてあむあむと食べる桜井さん。

「こう言うの？」

「夏には夏らしさを感じたり、冬には冬らしさを感じたりすることです。今は夏なのでこうやって素麺を食べたり、扇風機の風を浴びたりして夏を感じられることがあたしにとって幸せなんですよ」

そう言っ て桜井さんは目を閉じる。

「セミの鳴き声も夏の風物詩ですよ」

恐らく桜井さんが目を閉じたのは耳を澄ませてセミの鳴き声を聞くためだったのだろう。

窓の外からはいつも通りのうるさいセミの鳴き声が鳴り響いている。

「そうだね。セミの鳴き声なんて夏にしか聞くことが出来ないからね」

確かにセミの鳴き声はともうるさくて迷惑極まりないが、きつとセミの鳴き声がない夏は、物足りなく感じるだろう。暑い日々の中にセミの鳴き声が響き渡るのが夏であるのだ。

セミも夏には欠かせない風物詩。

夏を知らせる先駆者。

みーんみーんみーんみーん…

「桜井さん」

「何でしょうか？」

「今度風鈴でも買いに行こうか。僕の部屋には縁側がないからそこまで雰囲気は出ないけど」

「はぁあ…、良いですね風鈴！ー！買いに行きましょうよ風鈴！ー！」

子供みたいにはしゃぐ桜井さん。

目をキラキラ輝かせて嬉しそうに僕を見る。

「桜井さん子供みたい」

「ひゃっ」

僕は桜井さんに手を伸ばし、頭を軽く撫でた。

「ううゝ、あたし子供じゃないですよゝ」

僕が手を離すと、桜井さんは両手で自分の頭を抑えながら上目遣いで僕を見た。

やばい、これは可愛いぞ桜井さん！！

…写メに撮ろう。

「桜井さんその表情のままちょっと待ってて！！」

僕はベッドの上にあるケータイをバツと掴み取り、カメラを起動した。

「えっ？ええっ？えええ！？」

「桜井さん動いちゃダメ！！」

しどろもどろになる桜井さんに向かって僕は一言そう言い放つ。

さっきの表情は見事に崩れたけど、慌ててる桜井さんもこれはなかなか乙なものだ。

「えええ！？ちよつと祐介さん！？何撮ろうとしてるんですか！？」

…そう言いながら何ポーズをとってるんですか桜井さん。

桜井さんは素麺の器を両手で持って笑顔で静止していた。

「……………」

「何してるんですか？早く撮ってください」

パシヤツと。

不本意ではあるけど。

可愛いから良いか。

「可愛く撮れましたかっ」

「……うん。あ、ちよつと待って、メール来た」

とりあえず僕はその写メを保存し、メールボタンを押す。

「ん？マイミク申請だ。誰だろう？」

僕はそう眩き、メールにあるURLを押した。

「三上だ、珍しいな。あんまり仲良くないのに」

まあ、別に良いやと言うことでマイミク承認っと。

「どうしたんですか？」

桜井さんは素麺を食べ終わって、僕の隣にやって来た。

「ああ、何か同じクラスの奴からマイミク申請が来たんだよ」

「マイミクって言ったら……………あ、『みくしい』内での

友達のことでしたよねっ」

「正解」

「やったですう」

うん。

僕は皆さんの知らないところでもちゃんと桜井さんにいろいろ教えてるんですよ。

偉いでしょ。

「で、誰から友達になろうって来たんですか？」

そう言いながら桜井さんはケータイの画面を覗き込む。

きつと見ても理解できてないと思うけど。

「同じクラスの三上^{みかみ}麻衣子^{まいこ}って奴だよ」

「女の子なんですか？祐介さんモテモテですね！！」

いや、それは断じて無い。

僕がモテモテだったら既に彼女出来てると思うし。

僕がモテモテだったら三股四股なんか普通だし。

僕がモテモテだったらとつくに童貞捨ててるし。

……くっそ、泣きてえ。

「いや、多分ただ僕のことを見つけたから何となくマイミク申請したんだよ」

現実はそのものだよ桜井さん。

「ふーん、そう言うもんですか」

「そう言うもんだよ」

お昼を食べ終わり、二人揃ってまったり中。

「で、その三上麻衣子さんと言うのはどんな方なんですか？」

ベッドにちょこんと座る桜井さんが、台所で洗い物をしている僕にそう訪ねてきた。

うーん、あんまり仲良くないからなあ……。

「とりあえず良く喋るね。高校で初めて会ったけど、いろんな人に話し掛けてたよ。僕もその中の一人だったし。すごい社交的な奴だ

ね」

このくらいしか印象が無いと言う…。

「へえー、そうなんですか」

「うん。だから友達すごい多いらしいよ。マイミクの数も三桁越えてたし」

「ちなみに祐介さん何人なんですか？」

…僕に聞く？

桜井さんも人が悪いなあ。

どうせニヤニヤしながら僕に聞いたんだろっなあ。

僕、あんまり友達いないの知ってるのに。

と、思いながら僕は桜井さんを見た。

真顔！！

悪意の欠片もない！！

なるほど。

悪意の欠片もない純粋な質問だったんだね。

…タチ悪いなあ。

「僕は…15人くらい」

「十分多いじゃないですかっ」

それも無意識に馬鹿にしてるのかな。

「違いますよ祐介さん、友達は数じゃないんですよ」

グツと。

右手の親指を立てて僕に突き出す桜井さん。

「数が少ないからこそ、何度も遊び、交流を重ねることで、友達との親睦が深まるんですよ。だからむしろ多くなって良いんですよっ」

「

…そうだね！！そうだよ！！友達は数じゃないんだ！！」

そうだ。

友達は数じゃない。

大事なのは絆の深さだ。

多かろうと少なかろうと、どれだけ友達と深い絆で結ばれてるか

が大事なんだ。

何かそう思うと自然に清々しい気持ちになる。

…何て僕は単純なんだろう。

「ふふっ、単純ですね」

桜井さんは口に手を当ててそう微笑む。

うん。

自分で言うのは良いんだけど、他人から言われるのはちょっと悲しいな。

「さて、桜井さん」

「何でしょう？」

「やることもないし、甲の所にも遊びに行こうか」

「そうですね。甲ちゃんに会いに行きましょうか」

「行く途中で麦茶でも買っていつてあげようか」

「ああー、あたしも欲しいですうー」

「わかってるよ。ちゃんと桜井さんの分も買ってあげるよ」

「わーい、やったですうー」

そう言つて僕と桜井さんは甲に会いに、外へ出た。

第21話 甲ちゃんと女の子ですう

甲だよー。

今日は僕メインの話だから視点はお兄ちゃんから僕に移るよー。

話は少し遡って僕がお兄ちゃん達と出会った次の日のことだよ。

僕はいつも木の上で過ごしているんだ。

休むのも木の上。

寝るのも木の上。

遊ぶのも木の上。

滅多に地上には行かないんだ。

だって草がいつぱい生えてて何か気持ち悪いんだもん。

それになぜか広場の方や遊具のある場所には行けないんだ。

何か見えない壁みたいなのがこの木がたくさんある場所をぐる

ーっと囲んでいるみたいなんだ。

しかもその対象が僕だけ。

何でなんだろう。

この前来たお姉ちゃんはずっと普通に歩いて普通に出来たのに。

同じ幽霊なのに。

理不尽だよな。

まあ、つまり。

僕はその日も木の上で遊んでいたんだ。

「うおっ、カブトムシー！」

僕のいる木の幹にカブトムシ発見だ。

「大きいなあ、これ何て言うカブトムシなんだろ」

僕はカブトムシの目の前に手を出した。

カブトムシは臆することなく僕の手に登ってくる。

「カッコいいなあー」

おっきいから迫力があるよね。

どのくらいあるんだろう。

七、八センチくらいあるかな？

それに角も立派。

もし僕が虫だったらこの角で攻撃されたら一発でやられちゃうな。
正に昆虫界の王様だね！！

「のっし、のっし、のっし、のっし」

僕の手の上をゆっくり歩いてくカブトムシ。

「カッコいいけど、何か可愛い」

僕は片方の手でカブトムシの角をツンツと突っついた。

角を突っつかれたカブトムシは一瞬ビクツとして歩くのをやめた。
そしてしばらく辺りを警戒した後、再び歩き始める。

そして手のひらからカブトムシが落ちそうになる頃、僕は手を枝
に添える。

枝と一体化した僕の手からカブトムシは枝へと移動した。

「元気だね」

僕はカブトムシにそう一言言い残し、足をブラブラさせながら地
上に目を落とした。

この公園に人が来るのは珍しくはないんだ。小学生とかあつちの
広場でサッカーとかして遊んでるのを良く見かけるし、夏休み期間
だからそれは尚更。小学生だけじゃなくて、犬の散歩で立ち寄る人
や、自身の散歩で利用する人も多い。

街から外れているのに利用者がたくさんいるんだよねこの公園。
ただ、それはこの公園の、そう言った広場の利用者が多いのであ
って、言わば公園の裏側。つまり僕のいる林のような場所には滅
多に人は来ない。たまにお兄ちゃん達みたいに虫を捕りに来る人達
もいるけど、それは本当にたまになんだ。

だから僕の目線の先に僕と同じくらいの年齢の女の子がしかも一

人でいたのには驚いた。

「何してるのかなー？」

その女の子は僕のいる木のそばで困った表情を浮かべながらキョロキョロと何かを探してるようだった。

「何か落としたのかな？」

そう呟いてみるも、その女の子をしばらく眺めてあることに気付いた。

地面を見ていなかった。

辺りをキョロキョロしているとつより周りをキョロキョロしていたんだ。

「迷子かな？」

小さな女の子が一人で地面を見ずに周りをキョロキョロしていると言うことは、恐らく道に迷ったのか親とはぐれてしまったのどちらかだ。

…… ちょっと手伝ってあげようかな。

僕はそう思った。

僕は幽霊で、しかも常に木の上にいるから人間との交流がない。ゼロ以上にゼロだ。

きつとあの女の子の前に出たところで僕の姿は見えてないし、手伝ってあげようと思ってもそれは手伝いにならない。

それでも僕はあの女の子を手伝おうと思った。

良くぬいぐるみやペットに話しかける人がいる。僕もさつきカブトムシに話し掛けてた。

言うなればそれと一緒に。

幽霊の僕がいくら話し掛けても、あの女の子には聞こえないのだ。

“ 自己満足 ”

正にその言葉に尽きる。

見えない相手に。

聞こえない相手に。

反応してくれない相手に。

僕は話しかけるんだ。

“まるでそこで僕との会話が成り立っているかのように”

「よし、手伝ってあげよう」

僕はそう一言言つと、フワツと浮遊し、そしてゆっくりと地上に舞い降りた。

その女の子はやはり僕がそばに寄つても、気付いていない様子だった。

でも僕、それには慣れてるしちゃんと受け入れてるから大丈夫。悲しくなんかないよー。

「あら、何かブツブツ独り言を言ってるな」

その女の子は何やらブツブツと独り言を呟きながら周りをキョロキョロしていた。

僕はちよつと気になったので更に女の子のそばに寄ってみた。

「あれー？ピカチュウいないなー。ここトキワの森って聞いたからせつかくシヨップでモンスターボール99個買って来たのに…。これじゃあ何のためにモンスターボール99個買ったか分かんないじゃない」

……え！？

あれゲームの話じゃないの！？

しかもいつの間にここがトキワの森になったの！？

そらピカチュウ出ないよー！だってレベル3ですら出現率4%なんだよ！？

てかだからって何でモンスターボール99個買ったの！？

違うでしょ色々！！

せめて10個とかにしなよー！

うわっ！！

本当にモンスターボール持つてる！！

変な音と一緒にモンスターボール大きくしてる！！

すごい！！

僕初めて見た！！

「な、何だろう、何か気配を感じる……。まさかピカチュウ！？」

その女の子は持っているモンスターボールを構え、より一層険しい表情で周りを見渡した。

そして視線が僕の所で止まる。

「さすがはトキワの森！！絵に書いたような虫捕り少年だ！！これで虫かごと虫捕り網を持っていたら完璧だったけど、これは間違いなく虫捕り少年　ポケモントレーナーだっ！！」

なにになになににこの展開！！

ポ、ポケモントレーナー！？

何！？

今からポケモンバトルするの！？

て言うか僕ポケモン持つてないし！！

て言うかポケモン云々以前にここ現実世界ですからア！！

ゲーム世界じゃないですからア！！！！

「ちょ、ちよつと待つてよ！！僕ポケモントレーナーじゃないよ！！て言うか僕のこと見えてるの！？」

ツツコミどころ満載で何からツツコンでいいか分からなかった僕は、とりあえずそう言った。

「……いや、知ってるし。て言うかポケモンってゲームの話だよ？現実にはポケモントレーナーがいるわけじゃないじゃない。あなた大丈夫？ゲームは一時間とお母さんに言われなかったの？まったく、そうやってゲームばかりやっているから架空と現実の区別がつかないのよ。良い？これからはゲームは一時間よ？分かった？」

君が最初に言ったんじゃないか。

君がピカチュウ出ないとか言ってたんじゃないか！！

お前がここトキワの森とか言って言ったじゃないか！！！！

「え？で、でも君はモンスターボールを持つてるじゃないか！！」
「あなた何を言っているの？これどっからどう見てもガチャポンのケースじゃない。あなた本当に大丈夫なの？やっぱり一時間ですらこの子をゲーム脳にするのにわけなかったってことかしら…。良い？これからはゲームは30分にしなさい。分かったの？分かったら返事！！」

……………。

何で僕が怒られないとダメなの？

しかも僕と同じくらいの女の子に。

「あと見えるのって何？見えないわけじゃないの。目の前にいるのに。まあ、いきなり現れたのにはビックリしたけど」

女の子はハアーと溜め息を漏らす。

「あなたどこから来たの？」

続けて女の子は僕にそう問い掛けてきた。

そこで僕は思った。

“やっぱり最初は見えてなかったんだ”と。

少なくとも僕が地上に降りるまでは見えてなかった。

きつとあれだな。

僕がモンスターボール（ガチャポンのケース）を見て興奮したことで、無意識に“意識”を飛ばしていたんだな。

「ぼ、僕は木の上から来たんだ」

僕はとりあえず正直に言った。

「木の上？あなた一人で木登りして遊んでいたの？んまあ、何とヤンチャな小坊主ですこと」

女の子は口に手を当ててオホホホとせせら笑う。

「そんな嘘は面白くもないわ。だって見てみなさいよ、あなたどこるか人間の届く場所に枝がないのにどうやって木に登るの？」

「僕は幽霊だから届かなくても浮いて行けるんだよ。ほら」

僕は女の子の目の前で見せ付けるように浮いてみせた。

「ゆ…幽霊…？え…？あ、浮いてる…！？」

女の子は浮いている僕を見て驚いていた。そしてそれと同時に若干の恐怖も感じている様子だった。

「幽霊なのあなた……」

「うん。僕幽霊だよ。だからさっき僕のことが見えるのって聞いたんだ」

「え？だって…、普通の男の子にしか見えないわよ…？で、でも浮けるってことは人間じゃないってことだよね…」

うーん。

やっぱり困っちゃってるよ。

多分今この女の子は驚きと若干の恐怖と疑問で忙しいんだろうな。
「うん。あ、いきなり話変えて悪いんだけど君は一人で何をしてたの？」

そんな女の子に気を遣ったわけじゃないけど、正直これ結構気になつてたからね僕。

だからとりあえず聞いてみた。

「あゆ？あゆは…単なる暇潰しかな…」

え！？

暇潰しで居もしないピカチュウ探してたの！？

この子、凄く痛い！！

「あゆって名前なんだ」

「あ、いや、あたしの名前は木村^{きむら} 歩美^{あゆみ}」

木村歩美ちゃんか。

「そっか。良い名前だね」

「……………」

あれ？

僕なんか変なこと言ったかな？

まあ、良いや。

「でも暇潰しで居もしないピカチュウを探すなんてよっぽど暇だったんだね」

木の上から見てたけど結構真剣に探してるみたいだったし。

「一人ポケモンごっこしてたから…」

その女の子　木村歩美ちゃんはうつ向いて恥ずかしそうに言う。
「だからガチャポンのケースを持ってたんだね」

それをモンスターボールに見立てるために。

歩美ちゃんはあれなんだね。

形から入る人なんだね。

「う、うるさい！！幽霊のくせに！！」

そう声を荒げて僕にガチャポンのケースを投げ付けてきた。

ガチャポンのケースは僕の体を突き抜け、地に落ちる。

「うん。見ての通り体を持たないただの霊だよ^{たましい}」

“幽霊のくせに”

僕はその言葉に少し、悲しい気持ちになったけど顔には出さず、
気持ちとは裏腹に笑顔で答えた。

「何で成仏しないの！？幽霊なら成仏して天国にでも行っちゃえば
良いじゃない！！」

歩美ちゃんは尚も声を荒げて僕にぶつけてくる。

……そんなに怒らなくても良いのに。

良いじゃん、形から入ってもさ。

むしろ僕はそっちの方が真っ直ぐで素直で純粋な感じがするから
好きなんだけどな。

「僕ね、ここがまだこんな林のような状態になる前に、“この場所
で死んじゃった”んだ」

「な、何よいきなり」

まあ、突然の僕の昔話　しかも死んだ時の思い出を話されたら
そうなるよね。

でも何か話したくなかった。と言うより…

聞いて欲しくなっちゃったんだ。

「僕の間違った時の思い出…かな？まあ、聞いてよ」
歩美ちゃんは僕の言葉に黙り込んだ。

「ここも昔は今より遊びやすかったんだ。木だって子供でも十分登

れるほど高くなかったから。だから僕はその日ここで一人で遊んでいたんだ」

歩美ちゃんは僕の話に何も言わず、ただ黙って聞いていた。

「時期も大体同じくらいかな？この近くに親戚の家があって、夏休みだったから家族で遊びに来ていたんだ。それで散歩がてらにこの公園を見つけてね。一人で遊んでた」

「一人って…。親戚の人達は？従兄弟だったんでしょう？その人達とは一緒に遊ばなかったの？」

あら？

歩美ちゃん黙って聞いてなかったね。

早くも質問されちゃった。

判断早すぎだぞ僕。

まあ、良いや。

「従兄弟もいたんだけど、僕とはかなり年が離れてたし、地元がここだから従兄弟の友達も近くにたくさんいたんだ。だからその日は友達と遊びに行ってて家にいなかったんだよ」

「そう」

歩美ちゃんは一言そう言って再び口を閉じた。

「だから僕は一人でここで遊んでた。虫を捕ったり木登りしたり。そんな時、木に大きなカブトムシを見つけてね、捕まえようと思ったんだ。でもちよつと高い所にいたから悩んだんだけど、やっぱり捕まえようって決めたんだ。それがダメだったんだよね。結局カブトムシの所までは行けたんだけど、そこで足を滑らせて頭から落ちちゃったんだ」

僕は嘲笑する。

確かに小学生は興味の塊だ。

何をやるにも興味から始まり、興味に終わる。

興味から楽しさ、面白さを感じ、そして成長していくものだ。

実際僕も、公園のこの場所に興味を持ち、虫捕りや木登りに楽しさを感じてしまったが故の結果だ。

これじゃあ成長なんか出来てないよね。

「一人で遊んで一人で足を滑らせて一人で死んじゃった」

僕は笑顔で歩美ちゃんに言った。

「そ、それはちよつと可哀想ね……。でもそれが成仏しないことと何
が関係があるの!？」

フンツと鼻を鳴らし、歩美ちゃんは腕を組みながら言う。

そんな歩美ちゃんに僕は一呼吸置いて言う。

「一人で遊んで一人で死んじゃったからこそ、成仏する時は笑顔で
成仏したい。たくさんの友達を作って目一杯遊んで、目一杯楽しんで、
そして成仏したいんだ。幽霊が友達を作りたいって言うのは変
だけどね」

そして僕は真っ直ぐ歩美ちゃんを見る。

「歩美ちゃんには僕が見えてる。これは僕にとつてとても大きいん
だ。僕がいくら見えない相手に話し掛けても、大声で叫んでも、触
れようとしても“見えてない”と言うだけで“無い者”とされる。
でも歩美ちゃんには僕が見えてる。僕が話し掛けても、大声で叫ん
でも、触れようとしても、僕を“在る者”として認識してくれる。
幽霊としてでも僕を認識してくれる」

僕は昨日お姉ちゃんが言っていた言葉を思い出した。

“幽霊の存在を在るべきものとして認識してくれる幸せ”

正にその通りだと思うよお姉ちゃん。

幽霊の僕を人間同様に接してくれるのはそれは涙が出るくらい嬉
しい。でも僕はそこまで求めない。

“ただ僕と言う存在を認識してくれるだけで良いんだ”

「それに歩美ちゃんは僕が幽霊って分かっているながらも逃げないで
いてくれたしね。僕はそれだけで嬉しかった」

僕は笑って歩美ちゃんに言った。

「最初は怖かったわよ!!!でも何か……だんだん幽霊に思えなくなっ

て…。いつの間にか怖いって感情がどっかいつちゃったの」

歩美ちゃんは怒ったように言った。

でも僕はそれは照れ隠しに思えた。

『つんでれ』って言うんだっけ？

「あははっ、ありがとう歩美ちゃん」

「な、何でありがとうなのよ！！バカじゃないの！？」

そんな顔を真っ赤にさせて僕に叫んでいる歩美ちゃん。

そんな歩美ちゃんを見て僕は笑った。

やっぱりこうして誰かと話したりするのは楽しいなあ。

僕は本当にそう思うよ。

「僕はこんな風に僕の存在を認識してくれる人達ともっと話したり、遊んだりしたいんだ。幽霊とは言えど、元は人間だし一人は寂しいもん。だから…」

そして僕は続けて言う。

「暇になったらいつでもおいで。僕で良かったら相手になるからね」
歩美ちゃんは僕の言葉にやっぱり顔を赤くさせて、口をわなわなさせていた。

何か喋りたいけど上手く喋れない　そんな感じだった。

「あ、あゆは別に友達がいらないわけじゃないもん！！今日はただ…
何となく一人で遊びたかったただかもん！！あゆもう帰る！！こんなところも絶対来ないんだから！！」

そう言っただけ歩美ちゃんは走って行ってしまった。

僕はそんな歩美ちゃんに

「またおいでねー！！僕待ってるからねー！！」

と、歩美ちゃんの背中に向かって笑顔で手を振った。

何だろう、何か歩美ちゃんに親近感が湧く。

それはやっぱり一人でポケモンごっこをしていた歩美ちゃんにどこか自分を重ねちゃったのかな。

一人で遊んでた僕と。

まあ良いや、楽しかったし。

また来てくれるかな。

また来てくれたら良いな。

僕は木の枝から垣間見える空を見上げた。

「良い天気だな…、あ！！カブトムシ！！」

よし、あのカブトムシをゲットしよー！！

そう言っ僕はフワツと浮いてカブトムシの元へ飛び立った。

…そう言えば僕、名前教えるの忘れてた。

第22話 鬼ごっこしますう（前編）

時は戻り、僕のターン。

「甲ちゃん！！遊びに来ましたよぉー」

麦茶の入ったコンビ二袋をブンブン回して、木の枝や葉っぱで覆われている空に向かって叫んでいるストレートロングヘアのロリっ子幽霊こと桜井奈緒さん。

「桜井さん、そんなに麦茶振り回すと泡立っちゃうよ」

泡立ったお茶ほど嫌なものを連想させてくれるからね。出来ればやめてほしいんだ。

そんなことを思っていると、上の方でガサガサと鳴り、葉っぱが

二、三枚ヒラヒラと落ちてきた。

「あー、お兄ちゃんとお姉ちゃんだー！！」

そしてその声と共にストンと甲が落ちてきた。

「やあ甲。元気にしてた？」

僕は甲に向けて軽く手を上げる。

「うん！！元気にしてたよー！！」

甲も元気いっぱい笑顔で返す。

「そうですかぁー、元気だなによりです。あ、はいこれ、祐介さんが買ってくれたんですよー」

桜井さんはコンビ二袋から麦茶を取りだして、甲に差し出した。

「ホント！？うわぁ、嬉しいなっ！！ありがとうお兄ちゃん！！」

…うわぁ。

これショタコンの人が見たら悶えて吐血するほどの可愛さだぞ。かく言う僕も少しドキッとしましたけど。

いや、だからと言って僕はショタコンじゃないからね！？

至ってノーマル！！

普通の代名詞こと藤森祐介でございます。

「桜井さん」

「何ですか祐介さん」

「今度、甲をコーディネートしてみようか」

「それは楽しそうですね」

ウヒヒツと小さく笑う桜井さん。

「お兄ちゃんお姉ちゃん、何をこそそと喋ってるの?」

甲は首を傾げながら、あどけない表情で僕たちを見ていた。

「何でもないですよ甲ちゃん。さあ、麦茶でも飲んで下さいよう」
「?」

次来た時は甲を可愛くするぞっ!!

さて。

こうして甲のところに遊びに来たわけですけども…。

実際のところ、ノープランなんですよね…。

こう言う時は誰かに意見を仰ぐのが良策ですね。

他力本願上等。

「甲、何して遊ぼうか」

ここは子供の意見を優先するということで、僕は甲に聞いた。

「鬼ごっこがやりたいですっ!!」

…どうして桜井さんが答えるの?

そんな気合十分で言われても。

「鬼ごっこ!!僕もやりたい!!」

あら、甲も乗ってきたな。

「ねー!!やりたいですよね鬼ごっこ!!」

「うん!!やりたいやりたい!!お兄ちゃん、鬼ごっこやるっ!!」

もう二人してはしゃいじゃってる。

うきやうきや言ってる。

まあ、いいか。

「よし、じゃあ鬼ごっこやろうか」

と言うわけで鬼ごっこして遊ぶことになりました。

まあ、細かいことは気にしない。

幽霊二人と鬼ごっこするなんて気にしない。

はたから見たら高校生が公園の林の部分で一人走り回ってるのを見られても気にしない。

ましてやその一人が子供だとしても気にしない。

もちろんその子供に対して本気になっても気にしない。

大人気なくても気にしない。

つまりはだ。

細かいことは気にしない。

「それじゃあ鬼を決めようか」

「はいっ！ーじゃあじゃんけんで決めましょう」

桜井さんはそう言うのと、右手をグーにして前に差し出した。

「そうだね、そうしよう」

僕も桜井さんに倣う。

「じゃあいくよー。最初はグー、じゃんけんぽん！ー」

甲の声を合図に、僕たちは手を出した。

「桜井さんが鬼だね」

「お姉ちゃん鬼ー」

「ううー、負けちゃいましたあー」

じゃんけんの結果は僕と甲がチョキで、パーを出した桜井さんの負けだった。

「ううー！ー！こう言う場合は普通、物語の主人公が鬼になるものじゃないんですか！？」

腕を振り回し、ジタバタする桜井さん。

てか何その設定。

そんなセオリー通りにはいかないよ？

甘いぜ桜井さん！ー！

「じゃあ桜井さん、十数えたら追いかけて良いよ」

「分かりました。あたし頑張っちゃいますから覚悟して下さいよっ」
桜井さんはそう言って、いきなり『いーち』と数を数え始めた。
早すぎる。

せめて合図をしてから数えてほしかったなー。

「ちよっ！！いきなり始めないでよー！！おい甲行くぞー！！」

「うん！！いつくぞー！！」

こうして一人の人間と、二人の幽霊による鬼ごっこが始まった。

いやあ、鬼ごっこなんていつぶりだろうか。

中ーくらいかな。

子供の頃は良く近所の子たちとやってたけど、最近はやることは疎か、言葉すら出していないし聞いてもいなかったな。

やっぱり成長するにつれてと言うか思春期を迎えることで、鬼ごっこなんて子供の遊びだと認識し、疎遠になるのかな。

思春期ってそう考えるとどうなんだろう。

うーん、複雑だな。

まあでも、いざやってみると楽しいんだよな鬼ごっこって。

鬼から逃げる時のあの緊張感。

最高でもないけどなんか病みつきになる感じ。

毎日平凡凡と過ごしている僕には良い刺激になる。

鬼ごっこなんかで感じる緊張感ですら。

僕の日常に刺激となって介入してくるのだ。

まあ、良いや。

とりあえず今は鬼ごっこに集中だ。

……。

うーん。

今改めて思うと、リスクのない鬼ごっこはちよつと物足りなかったかな。

いわゆる“罰ゲーム”。

例えば最後に鬼だった人はみんなの前で一発芸とか。

全員が人間だったらジュースを一本ずつ奢るってのも良いかもしれないけど、いかんせん他の二人は幽霊だからお金持っていないんだよね。

そうしたらたとえ僕が鬼じゃなくても僕が奢ることになってしま
うからな。

まあ、それはやりながら考えて、終わった時にドッキリとして罰
ゲームをやってもらおうか。

ちよつとたのしみ

「うおおおおおお！！祐介さああん！！待ちやがれですうー
！！！！」

「うえ！？」

僕は後方から聞こえてくる桜井さんの咆哮とも言える叫び声にび
つくりして、変な声と共に後ろを向いた。

「ちよつ！！桜井さんそれ反則だよ！！」

まず空を飛んでる時点で反則なのに、その上、身体を透かせて木
とか枝とかを物ともせず超高速でこっちに向かって来てるんだよ！？

そんな面白いほど物理法則にシカト決め込むなんていくらなんでも反則過ぎるよ！！

……あ。

幽霊だから関係ないのか。

いや、それにしても反則過ぎるううううう！！！！

「幽霊の特権ですつ！！！！大人しく捕まって罰ゲームをやりやがれ
ですうー！！」

心まで読まれてたー！！

「あははー、お兄ちゃん頑張れー」

右の方から甲の無邪気な声が聞こえるが、どこを探しても姿が見
当たらない。

あのヤロオオオオオオ！！

完全に姿消してやがるな！！

なんだこのチート満載の鬼ごっこは。

ノーマルプレイは僕だけじゃないか。

「ストオオッブー!!」

僕は立ち止り、チートが使えない悔しさを訴えるように大声で叫んだ。

「どうしたんですか祐介さん」

「どうしたのお兄ちゃん」

そんな中、二人はキョトンとした顔で僕のもとにやって来た。

甲の奴、やっぱり姿を消していたな。

フワツと出てきやがって。

「ルールを設置いたします」

そう、ルール。

ルウル。

ルウウウウウウル!!

「うおっ、お兄ちゃんの熱い魂の叫びが頭の中で踊り狂ってる」

「どんなルウウウウウウルですか?」

いや真似しなくても良いんだよ桜井さん。

「透けるのナシ!! 浮くのナシ!! 消えるのナシ!! 罰ゲームアリ

!! それだけですっ!!」

当たり前だ。

全然対等じゃないもの。

不公平なもの。

だって人間なもの。

「えー!! それじゃあすぐ捕まっちゃうじゃないか」

甲がすかさず文句をぶつけてきた。

「そうですね、透けたり浮いたりしなかったらいいよあたしたちただの女と子供じゃないですかあー」

桜井さんも正論で返す。

ほら、二人ともブーブー言わないの。

「ブーブー」

「ブーブー」

「本当にブー言うな!!」
全く。

でもまあ、桜井さんの言うことも一理あるな。
さすがにそこまで縛ったら僕にとってぬるゲーになってしまう。
甲は子供だし、桜井さんは見るからに運動神経良さそうじゃないし。

「じゃあ浮くのはアリ。これならどう？」

僕は二人にそう提案する。

実際は浮くのを禁止した方が難易度的に楽なんだろうけどね。

でも浮くのを禁止にするとそれこそ身体能力次第で勝負が決まるから、僕にとって楽すぎる。

さっきも言ったように相手は子供に運動神経良さそうに見えない女の子だからね。

だからまあその点、透けるのを禁止にしても恐らく身体能力は必要ないだろう。

現にさっき桜井さんは超高速で僕に向かって来ていたし。

これならお互いファイファイファイだろう。

…でも、遥か高くまで飛ばれたらどうしよう。

僕が鬼になった時、捕まえられなくなってしまうじゃないか!!

「あ!! 浮いても良いけどあんまり高く浮くのはダメ!! 大体地上から一メートルくらいまで!!」

ふー、危ない危ない。

「まあ、それなら良いですぶー」

「僕も良いぶー」

語尾よ。

こいつらこの期に及んでまだブー言いやがるなあ。

「あ、祐介さん。罰ゲームを設けるのであれば制限時間も必要ですね」

あ、大事なことを忘れてた。

「そうだね。うーん、三十分くらいでどう？」

「そうですね、ちょうど良いんじゃないんですか？」

「よし、じゃあルールの確認。制限時間は三十分、三十分経った時点で鬼だった人は罰ゲームね。内容はその時決めると言うことで。あと桜井さんと甲は透けるの禁止ね。浮くのはアリで範囲は地上から一メートルだから」

うん、こんなもんで良いだろう。

「甲分かった？」

僕は甲にそう聞く。

まあ、さすがに分かっていると思うけど一応確認ね。

「分かったよー」

「偉いですね甲ちゃん」

「えへへー」

桜井さんが甲の頭を撫でると、甲は嬉しそうに笑った。

「よし、それじゃあ」

僕が『始めようか』と言葉を続けようとした時、林の入り口のところに見慣れない女の子と見慣れた女子の姿が僕の視界に入る。

この前、初めて接点を持った　あまりにも中途半端で形のない接点を持った同じクラスの女子。

誰に対しても友好的で、友達が絶大に多く、良く喋るクラスのムードメーカー的な位置に定着しつつある女子。

「三上……？」

僕がそう呟いた時、

「あー！！歩美ちゃんだー！！」

隣で甲がそう叫んだ。

僕と同じ方向を向いて。

そしてそんな姉妹のような雰囲気を漂わせている二人の一人は二カツと笑い、もう一人は恥ずかしそうに俯いていたのだった。

第23話 鬼ごっこしますう（後編）

「あ、藤森じゃん。奇遇だね」

林の入り口辺りで、僕に向けてそう少し大きな声で話し掛けながら手を上げる三上麻衣子。

肩にかからない程度のショートカットで、少し長めの前髪をピンで留めていた。そこから覗かせるクリツとした目と、時折現れる八重歯が印象的で可愛い顔立ちをしている。まあ、果たしてそれが可愛いのかと聞かれたら一概にはそうは言えないが、僕は可愛らしく思う。そして、半袖のパーカーにデニムのショートパンツと言いついかにも夏らしい恰好をしていて、パーカーの中にキャミソールでも着ているのか、開けた胸元から見える鎖骨が 何かエロかった。

もう一人の女の子は髪が肩より少し長く、やはり年相応幼い顔立ちをしていた。服装も、Ｔシャツにスカートと言う感じで、まだまだファッションに興味をおくまで達していないと言ったところであった。大体小学六年生くらいだろうか。

「うん、そうだね」

とりあえず僕は簡単にそう返した。

しかし何で三上がこんなところにいるんだろう。

『人間なんだからそりゃあいろんな所に行くさ』

実際、そんな結論で僕の疑問は解消されるのだけれど。

何となく。

ただ何となく僕は特に考える必要のないことを考えてみた。

そもそも僕のイメージでは、三上と言う人間はこんな自然がいっぱいアップルパイな場所にはあまり訪れることがないと思っていた。だって友達がたくさんいる、しかも青春真っ只中の（まあ、僕もなんだけど）女子高生が妹と思われる女の子の手を引いて自然公園に来るなんて誰が予想できるか。

普通なら買い物や映画、カラオケなどたくさん遊ぶことに充実している駅前や、この時期なら海やプールなどに友達と行くと誰しもが予想するだろう。

なのに何故？

僕には理解できなかった。

「そろそろいつものようにラフな感じで話を進めてもよろしいですか？」

僕はその声のする方へ目を向けた。

ストリートヘアーのロリっ子幽霊こと桜井奈緒さんである。

「祐介さんは“私”ではありませんし、ここは平行世界でもありませんし、そもそも文才がまるで釣り合ってません。たとえ影響されても真似できるレベルじゃないんですから普通にいきましょうよ」「だってあれ面白かったんだもん……」

「子供ですかあなたは。ほら、祐介さんが長ったらしく話を進めてるうちに甲ちゃんがあっち行っちゃいましたよ」

桜井さんはそう言いながら林の入り口の方を指差した。

あら、いつの間にか甲が三上のところにいる。

甲って三上と知り合いなのかな？

……いやいや、さつき甲は『歩美ちゃんだー!!』って騒いでたな。とすると三上の隣にいるあの女の子と知り合いなのかな。

「祐介さん」

桜井さんが僕のＴシャツの端をクイクイツと引っ張る。

「さつきあの女の人のこと“三上”って言ってましたけど、それってこの前マイミクしてきた人ですか？」

「そうだよ。あれが三上麻衣子」

「へえ、何か普通ですね」

三上の方をじっと眺めながら桜井さんはサラッと言った。

一体桜井さんはどんなのを想像していたのだろうか。

若干気になるが、この際気にしないことにする。

「祐介さんが気にしないのであればそのままスルーで。とりあえず

あたしたちもあっち行ってみましょうか」

「そうだね。行こうか桜井さん」

そう言って、僕と桜井さんは三上たちのいる場所に足を運んだ。

「意外だな、三上がこんなところに来るなんて」

「こっちこそ意外だよ。意外と言う一言で締め括ることの出来ないくらい意外だったよ。こんなところに一人でいるなんて」

ああ、そうか。

僕には桜井さんや甲が見えるから一人と言う感覚が無かったけど、三上にはこの二人が見えてないんだ。

つまり三上からしたら、“ここには僕一人しかない”と言うように認識されているんだ。

そらこんな公園内の人気のない林に一人でいるなんて友達がいなか、もしくは自然が大好きなのか。

どちらにしても良い印象はない。

高校生にしてみれば。

変人扱いだ。

「まあ、何となくね」

とりあえず適当にごまかす。

「ところで三上は何でこんなところにいるの？」

「あたし？あたしはこの子と遊びに来たんだよ。あ、この子といこの木村歩美ちゃん」

三上はそう言って女の子の方を見る。

僕も三上に促されるように、その女の子　歩美ちゃんに視線を向けた。

そう言えばこの子、さっきからうつ向いているけどどうしたんだろう。

ま、とりあえず挨拶しておこう。

「こんにちは、僕は藤森祐介。よろしくね」

「……………」

…あれ？

反応なし？

もしかして聞こえなかったのかな？

いやいや、この距離で聞こえないわけないよな。三上と喋ってた時と同じくらいの声の大きさだったし、三上にはちゃんと聞こえた。

うん。

つまりシカトですね。

「歩美ちゃん、ほら、ちゃんと挨拶しないとダメでしょ？ただでさえこのお兄ちゃんは友達少ないんだから。無視なんて、そんなコンプレックスをバツでフルスイングするようないことはやめなさい」
三上さん？

まあ、そりゃああなたよりは絶対的に友達は少ないけれど、それこそあなたの発言が場外ホームラン並みの破壊力をお持ちだと言うことには気付いていらっしやるのですか？

「だってこいつがしつこく話しかけてきたり、あゆの周りウロチョロしたりしてそれどころじゃないんだもん！！」

歩美ちゃんは目の前を指差し、目をギュツと瞑って大声で叫んだ。
…こいつ？

僕は歩美ちゃんの指差す方向に目をやると、そこには大はしゃぎの甲がいた。

甲の『来てくれたんだ！！』とか『一緒に鬼ごっこやろうよ！！』とか言いながら歩美ちゃんを中心にグルグル回るのを見たところ、やっぱり知り合いだったんだ。

「歩美ちゃん、やっぱりいるんだね幽霊」

三上はニヤツと笑いながら歩美ちゃんにそう言った。

え？

どゆこと？

何でここに“幽霊”がいることを三上は知ってるんだ？

「祐介さん、今三上さんは完全に幽霊を意識しました。これで今まで見えてなかった甲ちゃんとあたしの姿が見えるようになりますよ」
え？え？何？

ちよつと待って、思考が追いつかない。

「この子！？きゃー、超可愛じゃん！」

三上は突然目の前に現れたであろう甲の姿に（僕には常に甲が見えてゐるから確かなことは言えないけど）興奮している様子だった。てゆーか。

あれ？

普通に仲良くしている…。

いやいやおかしいでしょ。

何かもうちょっとリアクションないの？

だって突然男の子の幽霊出てきたんだよ？

少しくらいびっくりにしてあげても良いんじゃない？

『うわっ』とか『出たっ』とか『キエエエエエアアアアア
シャアベツタアアアアア！！！』とか。

あーあー、三上のやつ甲に抱きついちゃったりして。

あれ完全に姉弟じゃないか。

微笑ましいなああ。

「あはは、ちよつとお姉ちゃん苦しいよー」

そうは言っても、甲はまるで嫌がる様子を見せないむしろ喜んでいた。

「うふふ、甲ちゃん嬉しそうですね」

桜井さんはそんな甲を見て姉のように、あるいは母親のように優しく微笑む。

確かにそうだなと僕も思う。

甲の望むもの、それは“友達”なんだと思う。

ましてや桜井さんや木下さんと違って甲はこの場所に縛られているんだ。

牛乳瓶の中に迷い込んだアリのようにな。

いや、それよりもタチが悪い。

牛乳瓶は出口があるけど、ここには“出口”はないのだから。

視覚で脳を満たすことが出来ても触覚で温もりを感じることが出来ない。

つまり。

“心を満たすことが出来ない”。

この場所に縛られているのは自分の意志なのか、無意識な思いからなのか分からないけど、それでもああやって嬉しそうに笑う甲の姿を見て心なしに僕も何故か嬉しくなり　怖くなった。

「君、名前はなんていうの？」

三上は甲を抱き抱えて頭を撫でながらそう甲に聞く。

「僕は高橋甲だよ」

甲は気持ち良さそうにそう答えた。

「甲くんね。あたしは三上麻衣子、よろしくねー」

「よろしくね、麻衣子お姉ちゃん」

「麻衣子…お姉ちゃん…！？くうー！！可愛すぎるうー！！」

うわぁ…、豪快な頬ずりだなぁ…。

甲の顔ぐにやぐにやいつてる。

「ありや完全におもちやだね桜井s」

「歩美ちゃんって言うんですかぁー、可愛いですねえー」

「えへへえー、撫でられたっ」

はぁ…ん、なるほど。

こつちもこつちで姉妹よろしく仲良くやってるわけだ。

へえ…、そうかそうか。

僕完全にひとりぼっちだね

まあ、普通であれば、ここで三上たちと別れて鬼ごっこ再開となるのだけれど、ありきたりと言うか良くある話で、三上たちも混ざって鬼ごっこをやることになった。

僕たちの世界ではそれが普通なんだよ。

……しかし。

甲はともかく、今日初めて会ったのに（幽霊だから会う機会なんて皆無だけれど）桜井さんとまでもう打ち解けてるなんて、三上はやっぱり凄いな。

社交性に長けてると言うか、誰かと一緒に過ごすのが好きなのか。少なくともモノの数秒で仲良くなれるなんて僕には出来ない。

これもまた一種の才能なのか。

「ところで三上」

「ん？どした？」

「何でここに幽霊がいるって知ってたんだ？」

さつき三上は『やっぱりいるんだね幽霊』と言っていた。

それまでは誰も“ここに幽霊がいる”なんて言っていなかった。

それなのに三上はあたかもここに幽霊がいることを知っていたかのような発言をした。いや、三上は明らかに知っていたんだ。

僕はさつきそれによって混乱してしまった。

いや、大方予想はついていたんだけど、突然のことだったから混乱してしまったんだ。

きつと。

「ああ、この前歩美ちゃんがここに来て『子供の幽霊を見たー！！』って騒いでいたってという話をおじさんから聞いてね」

ねー甲くんと、やっぱり子犬同然に扱われている甲の頭を撫でながら三上は言った。

そうだねーと甲も返す。

あいつ、絶対話分かってないだろ。

絶対適当に返しただろ。

「ちょ、ちよつとまいちゃん！！あゆ別に騒いでないよ！！」

三上の言葉に少し慌てる歩美ちゃん。

「あれ？そつなの？聞いた話だと幽霊を見て、しかも話も出来て嬉しそつにしていたって言ってたよ？」

「なっ！！ちがつ！！何でそんな奴と話して嬉しくなんなきゃいけないの！？そんなこと絶対あり得ない！！」

歩美ちゃんは顔を真っ赤にして怒鳴る。

「ツンデレですね」

そんな歩美ちゃんを見てうふふと笑う桜井さん。

「奈緒さあーん、違うよぉー」

ポコポコと桜井さんの胸を叩きながら歩美ちゃんは言う。

あれは照れ隠しなのかな。

ちよつと微笑ましい。

「歩美ちゃん！！僕も歩美ちゃんと話が出来てすっごい楽しかったし嬉しかったよー！！」

甲はぴょんつと三上から離れ、歩美ちゃんの元へパタパタと駆け寄る。

「しかもまたここに来てくれた！！前僕と話してくれただけで嬉しいのにまた来てくれるなんて僕本当に嬉しいよ」

そしてニコツと笑って、

「ありがとう」

と甲は言った。

「は！？何言つてんの！？あゆがここに来たのは、まいちゃんが幽霊見たいって言うからその…し、仕方なく来ただけなんだから！別にあんたに会いに来たんじゃないんだから！！」

歩美ちゃんは甲から視線を逸らしてそう言う。

それを見て三上は『素直じゃないねー』といやらしい笑みを浮かべながら言った。そしてそれにつられるように僕と桜井さんも笑った。

僕は二人のやり取りを見て、小学生にしてはマセてるのかもしてないけれど、それが逆に初々しくて可愛いなと思った。

純粹過ぎて。

見てられない。

「あはは、さあ、それじゃあみんなで鬼ごっこやろうか！！」

遅ればせながら、ようやく今日のメインである鬼ごっこが始まったのでした。

「いやあー、楽しかったですね祐介さん」

僕に乗る自転車にふわふわと並走しながらニコツと笑う桜井さん。そんな桜井さんの背後に映る空はもうすっかりオレンジ色に染まり、太陽は地平線に半分くらいまで隠れていた。

「そうだね。まあ、久々に走り回ったからちよつと疲れたけど」
きつと明日は筋肉痛で動けないだろうな。

「もし明日筋肉痛になったらあたしがマッサージしてあげますよあー」

「やめとくよと言いたいところだけど、ここはあえてやってもらおうかなーなんて」

「任せてくださいー!!」

「いや、やっぱりやめておくよ」

「そうですかあ？残念ですう」

いや、本当に残念そうな顔しないでよ。

「それにしても今日は本当に楽しかったですね!!特に罰ゲーム!あれは今まで見てきた罰ゲームの中で一番可愛い罰ゲームでしたよあー。三上さんって意外にやりますね」

「そうだね、あれは僕も上手く罰ゲームを利用したなーって思うよ」

「うふふ、あの罰ゲームが今後どうなるのかすごい気になりますね」

「良い方向に傾けば良いね」

僕と桜井さんは夕焼けに染められた空の下で二人で笑った。

今日の鬼ごっこで罰ゲームを受けるのは最後に鬼だった甲に決まった。僕たちで罰ゲームの内容を考えている時に三上が罰ゲームが決まったと言い、僕たちに何の断りもせず、またその内容を僕たちに教えることも無く、甲にその内容を耳打ちした。文句を言う隙も

なかったので結局罰ゲームは三上ので決まったのである。僕は三上にその内容を仰いだが、見てれば分かると言ってそれを制止した。僕は内容を教えない三上に若干の苛立ちを覚えた時、甲が動いた。罰ゲーム開始である。

まあ、結論から言わせてもらうと、罰ゲームの内容は“お願い”だった。

甲のお願い。

甲の願い。

甲の望む願い。

『歩美ちゃん、僕と友達になって』

この一言が今回の甲の罰ゲームだった。

まあ、もしかしたらこれは歩美ちゃんの罰ゲームなのかもしれないけど。

歩美ちゃん、顔を真っ赤にさせて暴れてたし。

でもこれはこれで良いのかもしれない。

甲と歩美ちゃん。

仲良くなってもらいたいものだ。

「あ、桜井さん」

「何でしょうか祐介さん」

「帰りにアイスでも買って行こうか」

「きゃあああああああ！！アイスですうー！！アイスですうー

！！やっつっつっつっつたですううううー！！！！」

あはは。

「じゃあ急ごうか」

「はいですっ！！」

第23話 鬼ごっこしますう（後編）（後書き）

「祐介さん」

「何桜井さん」

「サブタイが鬼ごっこなのに鬼ごっこの内容が全然ありませんね……」
「そうだね……」

第24話 くしゃみ出ますう

お昼。

僕は昼食を作るため、台所にいます。

ふと思ったことがあるのですが、最近僕たちお昼は麺類ばかり食べてるなーということです。

別にそれがどうかそういうわけではないのですけど。

でもやっぱり健康面を考えると、麺類ばかり食べてるのはちょっとまずいのかなーとも思っんです。

ただ。

いや、ただですよ？

麺類は調理が楽なんですよ。

麺を茹でて終わりですからね。

もうその楽さと言ったらちよつと離れた所にあるリモコンを取るより楽ですよ。

え？いや、それは違う？

ああ、そうですね…。

まあ、良いや。

ということ。

「桜井さん、ラーメン出来たよー」

麺類の中でも調理のレベルが一、二位を争うほどの楽さを誇るインスタントラーメン。

麺を茹でて、粉末スープを入れたらすぐ出来てしまうお手軽料理。しかもその味は調理方法から想像出来ないほど美味しい。

そんないろいろな利点を兼ね備えられたインスタントラーメンはもはや人智を超えた食べ物。

神より授かりし、高貴なる料理。

まあ、インスタントラーメンを考えたのは人間だけど。

「ラーメンですうー 祐介さん、今日は何ラーメンですか？」

そう言いながらテーブルの前に座り、ラーメンを今か今かと待ちわびているストレートロングヘアのロリっ子幽霊こと桜井奈緒さん。

「今日は醤油ラーメンだよ」

はいっと、僕は桜井さんの目の前に出来あがった醤油ラーメンを置く。

「あー、ゆで卵が入ってますうー」

「ラーメン作るついでに作ったんだよ、茹でるだけだし何かトッピングがあつた方がいいと思って」

「やったですうー」

しかも半熟ですうーと、何やらご機嫌な桜井さん。

うんうん、喜んでくれてるみたいだな。

作ってよかった。

「あ、桜井さんコシヨウ入れるー？」

「あ、入れますー」

「はいはい」

僕は台所から僕の分のラーメンとコシヨウを持って、テーブルに向かう。

「はい桜井さんコシヨウだよ」

持ってきたコシヨウを桜井さんに渡し、僕の分のラーメンをテーブルに置いた。

「それじゃあ食べようか」

「はい」

そして僕と桜井さんは声を揃えて言った。

「いただきます」

「さて、まずはコシヨウをかけますよー」

桜井さんは僕が持ってきたコシヨウをふたを開けてパツパツとラーメンにふりかける。

パツパツ。

パツパツパツパツ。

パツパツパツパツパツパツパツパツパツ…。

ん？

あれ？

桜井さんコシヨウかけ過ぎじゃね？

「ちょ、ちよつと桜井さん？コシヨウかけ過ぎじゃない？」

「え？そつでうあはああつくしよい！！」

うわっ！！

桜井さん！！

コシヨウふりかけながらくしゃみしないでよ！！

「ちよつとさくらああつ、へあつ、ふああつ、はあああつくしゅんんんー！！！」

ほら、思った通りだよ…。

そらコシヨウふりかけながらくしゃみしたら粉がこつちまで飛んでくるよ。

そら僕も盛大なくしゃみをかますよ。

「ごめんなさい！！祐介さん大じよぶああくしよん！！！！」
大ジヨブアクション！？

どんなアクションなんだろう！！

「そんなアクションなんてあり…、ありあ、ふあ、…っはあああ！！！！」

ああ、これ大きいの来るな…。

そんなことを思いながら、僕は暢気のんきにラーメンを啜すする。

「はあああつ！！っあれ？止みましたねえ」

「そつだね」

それはそつと桜井さん、早く食べないとラーメンのびるよ？

「うーん、この出そうで出ない時、すごいもどかしいですね」

桜井さんは釈然としない様子でコシヨウの入ったラーメンを混ぜる。

「それ分かる、すっごい分かるよ。僕も何度も経験あるもん」

くしゃみは出たらずごくスツキリするし、出た瞬間のあの爽快感は正直病みつきになる。しかし、出るまでの鼻がムズムズする感じはもどかしい。

それにくしゃみが出ればいいけれど、今回の桜井さんみたいに出そうで出なかった時はもどかしさを通り越して怒りに変わるほどじれったいものだ。怒りっぽい人や、気が短い人はマジギレにまで発展する場合もある。僕もたまに学校とかで『くっそ、出ねえ!!』って怒鳴っている人を見たことがあるし。

「あー、何だかスツキリしないですねー」

そう言いながらちゅるつと麺を嚼る桜井さん。

「桜井さん」

ここで僕は桜井さんに提案する。

「スツキリしたい？」

と。

さて、昼食のラーメンを食べ終え、お決まりのまったりタイムです。

「祐介さん、どうやってたらスツキリ出来るんですか？」

桜井さんは小首を傾げながら僕に問う。

そんな桜井さんに僕は何も言わず、目の前にその答えを提示する。

「ん？ティツシュ？」

「そう、ティツシュ」

僕が提示した答え それは一枚のティツシュだった。

「祐介さん、ティツシュでどうやってスツキリするんですか？」

桜井さんは目の前にティツシュを出されてもやはり理解に苦しん

でいる様子だった。

まあ、それもそうだ。

突然目の前にティッシュ一枚出されて、『これが答えだ!!』って言われても(ていうかそもそも言ってるない)、大抵の人は分かってても、桜井さんにはきつと分からない。

なんせあの桜井さんなんだから。

「まあ見ててよ」

僕はティッシュの角をつまみ、ねじる。

そして数回ねじって、それが角のようになったところで、再度桜井さんの目の前に出した。

ドヤ顔で。

しかもじゃじゃーんとか心の中で言ってる。

「心の中で言ってたって結局あたしには分かっちゃいますからね? それなら声に出した方が良くないんじゃないでしょうか? さあ祐介さん、もう一度!!」

「…………じゃじゃーん」

「うわぁー、何ですかこれえー(棒読み)」

…こっちが何だこれだよ。

はぁ…、せつかくドヤ顔したのに。

「祐介さん」

桜井さんはおもむろに僕の肩に手を乗せて、

「ドンマイ」

と、とびつきりの笑顔を僕に投げかけてきた。

「何が『ドンマイ』なんだぁー!!」

今僕は何に対して慰められたんだー!!

別に僕すべったわけじゃないのに!!

むしろボケだつもりもないのに!!

飯にボケたとしたらどれだけ不完全なボケなんだー!!

「すいません(棒読み)。てかこれ、こよりですね」

その(棒読み)にハマったな桜井さん。

もう、いいッス…。

「そう、こより。これを使えば出そうで出ないくしゃみも一発で強制的に”出せるよ”」

「そうですかー、じゃあやってみようかなー…とはなりませんからね」

「ナンデ!？」

「そんなおつきな声で、しかもカタカナ表記で『ナンデ!？』って言われても…」

そう言つて桜井さんは下を向いてもじもじする。

可愛いーーーーー!!

「そんなこよりなんて恥ずかしいじゃないですかあー、ましてや祐介さんの前ですよ?出来るわけないじゃないですか」

お?

これは…。

僕のことを異性として意識してるってこと!?

「ふあつ、あ、あた、っは、当たり前…へあ、あああ当たり前じゃなぶいいえええくしよい!!!ないですか!!!」

その割には僕が持ってたこよりをいつの間にか使ってるよね。

そしてお世辞にも女の子らしくしゃみとは言えない豪快なくしゃみしたよね。

「ひえつくしよい!!あー、こえ、止まないとれすううういいええつくしよい!!!っは、っはあああつくしよいえ!!!」

「桜井さん!!そのこより持つてる手を止めてー!!」

これじゃあ終わりのない、終わりの続きだよ。

「でいいいいあああああつつつつつつくしよおおおいいいいい!!!」

すごい出たーーーー!!!

てか“で”から始まるくしゃみなんて聞いたことないよ。貴重なくしゃみを聞きましたね。

「っはあ、はあ、はあ…。ゆっづげざあーん」

「ど、どうしたの桜井さん…」

今の桜井さんの状況を僕はあえて言いません。

ただ、一言で言ったら『酷い』です。

僕はそんな桜井さんに、若干　本当にわずかながら若干引いちやったもん…。

ごめんね桜井さん。

「ばなびすがどばりばぜーん（鼻水が止まりません）」

「そらあんだけくしゃみしたら鼻水も大量生産されるわ…。はいティッシュ」

僕が桜井さんにティッシュ箱を差し出すと、桜井さんは勢いよくティッシュを何枚も取り出し、それまた豪快に鼻をかむ。

「うえーん、祐介さーん、これ酷いですよぉー」

そして鼻水と共に流れてくる涙をティッシュで拭きながら僕に訴える桜井さん。

そんな桜井さんに僕は一言、

「スッキリしたでしょ」

と笑顔で言っただけでした。

第24話 くしゃみ出ますう（後書き）

「スッキリしませんよ!!お返しです!!」

「桜井さん!!ちよっ、ちよっつまああえええええっくしょおおい
!...!」

第25話 みきちゃんと散歩ですう

おはようございます。

今日は少し早起きしたので、ちょっと朝の清々しい空気を吸いながら散歩でもしようと、そのついでに桜井さんに座布団でも買ってあげようと思ひまして。まあ、僕の勝手で粹な計らいです。なのでとりあえず遠回りしながら駅前辺りに向かおうと足を運ばせているわけです。

風鈴はまた今度桜井さんと一緒に買いに行くということ。

まあ、買い物ついでの散歩であり、散歩ついでの買い物でもありますな。

う~~~~ん。

早起きつてやっぱり気持ち良いね。

まあ、早起きと言っても朝の八時だけ。

夏休みとかがつてついつい夜更かししちゃうから、起きるの大体昼過ぎになりがちでしょ？

そう考えたら八時って早い方だと思うよ。

立派な早起きです。

.....。

これ威張れることなのかな？

小学生にしたら遅い方じゃない？

だって小学生ってラジオ体操があるから夏休みでも早起してるし。

確かラジオ体操って朝の七時過ぎくらいから始まってなかった？よく覚えてないけど。

で、言うより小学生偉くない？

高々ラジオ体操に行ったらもらえるスタンプのためにそんな早起きしちゃって。

まあ、小学生って元気で素直だからね。

うるせーくらい元気だからね。

早起きなんて朝飯前なんだろう。

それに嫌だ嫌だと言うのを渋っていても、親に怒られるのが嫌だから結局行くハメになるし。

小学生にとって怒られることは恐怖そのものだからね。

特に母親。

何か家庭での躰って大概母親じゃない？

家庭によっては違うけど僕の家はそうだった。

『野菜もちゃんと食べなさい』

とか、

『ちゃんと勉強しなさい』

とか、

『爪を噛む癖を直しなさい』

とかね。

とにかく何かと注意されてた記憶がある。

あの頃は母さん嫌いだったな…。

おっと。

話が脱線してしまった。

つまり夏休みにたかが八時に起きたくらいで威張ってるのは違つと。

器がちっちゃいなど。

そう言うことです。

あ、ちなみに桜井さんはいません。

まだ寝てます。

立って。

昨日一緒にテレビを見ていたんだけど、大体十時半頃くらいからすごい眠気に襲われて先に僕が寝ちゃったんだ。

桜井さん結構夢中になって見てたから、寝るのも結構遅くなっちゃったんだろう。

だから起こすのも悪いと思って置き手紙を書いて一人で出てきたわけです。

それに何故か立ち寝バーションの桜井さんを起こすと、突然バツと目を見開くからびっくりしちゃうんだよね。

その迫力には慣れないもので、若干トラウマです。

僕がそんなことを思っていると、今僕が歩いている道の先にフワフワと浮いている木下さんがいた。

僕の進行方向とは逆に、こちら側に向かっている　つまり、僕と木下さんは向かい合っていると言う状況だから、僕の目線の先にいる女性が木下さんだとはつきり認識できたが、きっと僕と木下さんの進行方向が同じだったら、僕は木下さんだとはつきり認識するのに時間が掛かっただろう。

着ている着物がいつもとは違ったのだ。

木下さんがいつも着ている着物は、黒い生地に多彩な花柄模様、そして紫の帯と言う夏にしては少し重苦しい色合いの着物だった。しかし今日着ている着物は、シンプルなもので、刺繍が施されていない水色の生地で、ベージュより少し薄めの帯。

シンプルな着物に色の重さを感じさせない　正に夏向きの着物だった。

「木下さーーん」

そう木下さんを　僕は手を大きく振って、更に大声を上げて呼んだ瞬間、僕は少し後悔した。

朝とは言え、やはり周りには人が結構いるわけで、大声を上げた僕にマンガの集中線のように視線が向けられた。

目立ちたがりであれば、何も気に留めることはないんだけど、僕は目立つことをむしろ嫌う人間なので、そのたくさんの視線が痛かった。

「お、藤森か。おはよう」

僕の呼び声に反応した木下さんは、フワフワと僕に寄ってきた。

「おはようございます。何してるんですか？またいつもの散歩ですか？」

「まあ、そんなところだ。藤森は何をしているのだ？奈緒は一緒にやないのか」

「僕も木下さんと同じようなものです。あ、桜井さんはまだ寝てますよ」

「ふむ、そうか」

木下さんは小さく笑う。

奈緒らしいと　そんな表情が読み取れた。

いやあ、しかしながらいつ見ても木下さんは大人の女性って感じがするな。

異性の僕は当たり前のこと、同姓にとっても憧れるだろう。

格好良い。

人間として。

幽霊だけ。

振る舞いとか仕草とか、そう言った行動全てに気品さが感じられる。

貴婦人だなあ。

「あ、木下さん今日は着物違いますね」

僕は木下さんの着ている着物を眺めながら言った。

暗い感じの着物もクールな木下さんに似合ってるけど、こう言うのも似合うな。

それこそ貴婦人な感じ。

「たまには夏らしい、重くない着物も着たくなるのだよ」

「その着物もすごい似合ってますよ」

「そうか？何だかそうストレートに褒められると少し照れてしまう」
木下さんは無表情ながらも、頬を若干赤く染めて僕から視線を逸らす。

うん。

大人な反応だな。

何か。

年上のお姉さんってすごい良いな！！

「藤森は年上の女性が好みなのか？」

心読まれた。

「うーん。いや、正直そう言った年上が好きとか、年下が好きとかって言うのはありません。好きになった人が僕の好みです」

「ほう、なるほどな。藤森は範囲が広いのだな」

「まあ、そうなるんですかね」

そう言ってしまうえば年齢に関したら僕は一歳から百歳まで許容範囲と言うことになってしまう。

広い！！

自分で極端すぎるほど極端に言ってしまったけど。

きっと地球の総面積より広いよこれは。

世界の広さをも凌駕する僕の異性に対する年齢層。

僕は…、神だ。

「藤森よ、お前も徐々に初期のキャラから変わっていつておるな」

「人間と言うものは日々少しずつ変化していく生き物なんですよ木下さん」

僕は爽やかな顔でそう言った。

それから僕と木下さんは一緒に散歩することになった。

木下さんは特に行く所もなく、ただブラブラしているだけだと言
うし、僕も僕で買い物があるけどそこまで急ぐものじゃないし。

て言うか今から駅前に向かっててもきつと店が開く前に着くと思
うし。

そしてお互い、“一人より二人の方が楽しい”と言う意見が合致
したこともあったので。

こう言う結論に至ったわけです。

「藤森よ、奈緒とは仲良くやってるか？」

僕の少し上を飛んでいる木下さんが僕にそう聞いてきた。
うん。

文字通り上から見下されている。

…何だろう。

ちよつと嬉しい。

「まあまあですね。相変わらず桜井さんは少し傍若無人なところがありますけど元気ですし、僕もそんな桜井さんと一緒にいると楽しいですね」

うん。

桜井さんと一緒にいると楽しい。

これは本当にそう思う。

「そうか」

「はい。あ、木下さんはどうですか？ 怜と仲良くやってますか？」

僕はあえて答えを知っている質問をする。

「私と怜が仲良くやっているわけがないだろう。毎日言い合いにあるし、最終的にあいつが除霊道具を出して私が負けるし。あいつといて楽しいことは…」

木下さんは一呼吸置いて。

「ひとつつつつつつつもあしやあしない！」

と、空に向かって叫んだ。

「はははっ、やっぱり思った通りだ」

うん、思った通りだ。

「何がだ？」

「木下さんたちも十分仲良くやってるじゃないですか」

「どこがだ藤森よ。あいつは酷い奴なんだぞ？ 理不尽な奴なんだぞ？ 意地悪な奴なんだぞ？」

「そ、そうですね…」

木下さん、そんな鬼の形相で僕に訴えかけても僕がビビるだけだ

よ？

美貌がもつたいない。

もつとアダルティーな雰囲気を！！

「…何を考えておるのだ藤森よ」

「あ…、ごめんなさい」

木下さんはフウと一息吐き。

更に続ける。

「私がテレビを見ていると突然チャンネルを変えたり、私が風呂に入っている時に突然ドアを開けてコップに入れた水をぶっかけきたり、私にゲーム負けたら除霊道具持って追いかけてきたり、膝力ツクンやつてきたり…。あー、思い出しただけではらわたが煮えくり返る思いだ」

おい、怜。

お前は一体何をやってんだ。

小さい、あまりに小さいぞ。

全てにおいて高校生のやることじゃない。

何だ膝力ツクンって。

あれか、お前はあれか。

好きな子に対していじわるしちゃう小学生か。

く、可愛いな。

「まあ、あいつの精神年齢は小学生並みだから間違いないのかもしれない」

そして木下さんも満更ではないと。

「いや待て藤森よ、私がいつそんなことを口にした」

「あれ？僕今声に出してた？」

「お前は私が心を読めることを忘れているのか？」

あ、忘れてた。

覚えてたし知っていたけどあえて忘れてた。

「とにかく、私たちは仲良くなんかない」

まあ、そういうことにしようかな。

それから木下さんといろいろ話をしてる内にいつの間にか駅前に着いていた。

「ところで藤森よ、買い物と言ったが何を買うのだ？初音ミクのフィギュアか？それとも大人のおもちゃか」

「何で初音ミクのフィギュアなんですか」

「じゃあ大人のおもちゃか」

「いや、欲しいけれど！！一回買ってみたと思っていただけで！！でも未成年という壁が目の前に立ちはだかって…って何言わせるんですか！！やめて下さいよ！！と言うか、そもそもどうして選択肢がその二つしかないんですか？」

「何かそういうイメージが…」

「やめて下さい！！僕をそんなふうに見ないで下さい！！」
はあ。

僕ってそんなイメージあるのかなあ。

なんか嫌だなあ。

「桜井さんの座布団を買いに来たんですよ」

僕は話を仕切り直す。

「座布団？」

「はい、桜井さんってよく地べたに座るんで座布団でもあれば良いかなーと思ひまして」

「ほう、なるほど」

木下さんは顎に手を当てて言う。

「それならば藤森よ、座布団より座椅子の方が良いのではないか？」

「座椅子…」

座椅子か。

確かに座布団より良いかもしれない。

背もたれもあるし、しかも背もたれを倒せばちょっとした敷布団みたいにもなるし。

「そうですね、座布団より座椅子の方が良いですね」

「もう何だったらいっそのことウォーターベッドでも買ったらどうだ？」

「座椅子の話はどこいったんですか」

「どうしてベッドを買わないといけないんだ。」

「しかもウォーターベッド。」

「ちよつと寝てみたいわ！！」

「寝れば？」

「……………」

「ちよつと今のは腹立ったなあ。」

さて。

鬼ごっこ（後編）同様、話のメインである買い物の時の話を華麗に且つ、しなやかにスル　して帰り道。

「いやあ木下さん、今日は何かありがとうございます。買い物につき合わせてしまつて」

「気にするな、いい暇潰しになつた」

「しかも弁当まで持ってもらつて」

「僕の隣でふわふわ浮いている木下さんの手には弁当の入ったビニール袋が握られていた。」

もう昼時だったので、コンビニでみんなの弁当を買つたのだ。

ちなみにそのみんなというのは、僕と桜井さんと木下さんです。

木下さん、僕の家に来てくれるそうですね。

まあ話を戻して。

三人分の弁当を女性（幽霊）に持たせるなんてマナー違反だし、ここは男の僕が持つべきなんだろう。

なんだろうけれど。
でも。

みなさん気が付いているかもしれないけど。
聞いて。

「まあ、それは良いのだが、藤森よ、どうして輸送にできなかった」
そう。

僕は今、桜井さんに買った座椅子を持っているのです。

『座椅子持ったって弁当くらい持てるだろうよ』

そう思う人もいると思うんですけど。

これ持つて歩くともものすごい邪魔なんですよ。

もう邪魔くせえのなんのって。

片腕で抱えるほど小さくないから、両手で抱くように持つしかないですよ。

もう本当!!

この邪魔くささと言ったらスラムダנקの山王の一ノ倉のスッポ
ンディフェンス並みの邪魔くささですよ。

だから持てないんです…。

こんなんだから僕もモテないんです…。

でもまあ、これにも一応理由があるんですけどね。

「ほら、輸送にしたら二、三日掛かるじゃないですか。僕は桜井さ
んに早く使ってほしいんですよ」

それにどうせ今頃僕がいなくてあたふたしたのちに、疲れて地べ
たに座りこんでると思うし。

「なるほどな」

そんな僕の言葉に木下さんはフツと小さく笑う。

「それならば早く帰らないとな」

「そうですね」

僕もそれにつられるように笑った。

「ゆうずげーん!!どごいっでだんでずぐぶえっ!!」

あーあ、桜井さん泣きながら突っ込んで来たら、そら涙で視界が

ぼやけて座椅子にぶつかるわ…。
「微笑ましいな」

第25話 みきちゃんと散歩ですう（後書き）

ちなみに僕が買ったのは薄いベージュ色の座椅子でした

第26話 興奮しますう

男の本能として。

女性に興味を持つのはごく自然なことだ。

男の本能として。

女性の体に興味を持つこともごく自然なことだ。

それは僕こと藤森祐介という一人の男にも言えることである。

幽霊とは言えど、僕は一人の女の子と一緒に住んでいるのだ、その気持ちはよりいっそ強まる。

気持ち。

欲。

女の子に対する欲。

つまり“性欲”。

『煩惱の犬は追えども去らず』という言葉があるように、いくら理性を保とうとしても、いくら自制心を持っても、“それ”は常に僕の体に、そして心に纏わりついてくる。

この共同生活が始まってからしばらく経つけど、改めて思う。これは拷問だ。

「祐介さーん、お風呂良いですよー」

テレビを見ていた僕の後方からストレートロングヘアのロリっ子幽霊こと桜井奈緒さんの声がする。

「うん、もうちょっとしたら僕も入るよ」

別にテレビに夢中になっっているわけではないのだけれど、今お風呂に入ってしまうと番組の内容的にも中途半端になってしまうし、正直今お風呂に入れと言われると（言われてないけど）、逆にそれが億劫に感じてしまうものである。

だから番組が終わってから入ろうと思っていた。

「あ、ちよつとすいません。前通りますよー」

桜井さんはそう言つて僕の視界に入ってきた。

「ちよつ！！桜井さん！！着替えてなかったの！？」

いつもなら桜井さんは脱衣所で着替えてから出てくるのに、今は体にバスタオルを巻いているだけという、僕みたいな思春期の男子の本能を刺激するような格好だった。

あ、ちなみに桜井さんの部屋着は、出会った当初のボロボロの布ではなく僕のＴシャツとジャージです。

「いやあ、ちよつとうつかりしてて着替え持っていくの忘れちゃったんですよー」

あははーと、お気楽に笑う桜井さん。

表情こそ無邪気でまるで子供のようだが、それに不釣り合いなスタイルが僕の視線を支配する。

今まで散々『ロリっ子幽霊』と通称してきたが、正直それは適切な表現ではなかったことをここで訂正しよう。

確かに身長は小さい。

なんせ身長１６５？の僕と顔一個分違うんだから。

しかしその小さい体に反比例して。

その小さい体から想像の出来ないような。

実際に実った胸。

むね。

ムネ。

MUNE。

おっぱい。

巨乳というわけではない、大き過ぎず、かと言って小さくもない、きわめて普通のジャストサイズである。

…いや、普通よりちよつと大きいかもしれないかなあ。

Dカップくらい？

分かんないけど。

そんな見事で立派な胸をお持ちの桜井さんがバスタオル一枚で僕の目の前に現れたことで、僕の脳内は桜井さんのおっぱいことではないになるのは言わずもがなである。

つまり。

僕は興奮した！！

「あのく、祐介さん？」

「…え？」

「興奮するのは良いですけど、あたし祐介さんの考えてること全部分かつちゃうんですからね？」

そう言いながら片腕で胸を隠す桜井さん。

うおおおおおお！！

またやってしまったあああああ！！

まあ、分かつていたけど。

気にしない気にしない。

ていうか桜井さん。

腕で胸が押し付けられたことで谷間が出来てある意味逆効果だよ。はいはい僕の視線は釘付けですよー。

「いやあ、そんなに见ないで下さいよう」

「あー！ご、ごめん！！」

僕はそう言つてとつさに視線を逸らした。

うーん、やっぱり僕ダメだなあー、女の子に免疫がなさ過ぎる。

ちよつと露出度の高い恰好をした桜井さんが目の前に現れただけで興奮しちやつてるし。

しかも胸を凝視する始末。

まあ、当たり前と言つてしまえばそうかもしれないけれど、それはあまりにも都合が良すぎる良い訳になってしまふよなあ。

「やっぱりじろじろ見られるのは恥ずかしいですう」

桜井さんは若干俯きながら着替えを手に取り脱衣所へ消えていった。

そんな桜井さんを目で追いながら僕は『恥じらう桜井さんも可愛

いなあ』なんて失礼なことを思っていた。

さて、お風呂にも入りまして。

今は寝る前のまったりタイムです。

「もう少ししたら夏祭りだなあ」

「夏祭りですか！？夏祭りがあるんですか！？」

当然と言っべきか、面白いくらい食い付いてくる桜井さん。

「うん、近所の神社で夏祭りをやるんだって。怜が言ってたよ」

まあ、僕は今年からこっちに住むことになったから行ったことないし、よく知らないけど。

そもそも近所に神社なんてあったかなあ。

「祐介さん！！是非行きましよう！！」

うん、やつぱり目をキラキラさせてるなあ桜井さん。

これ部屋の電気いらないんじゃない？

「そう言うと思ってたよ。もちろん行くつもりだから安心して」
「やったですうー！！」

夜中にも関わらず、大声で叫びながら飛び跳ねる桜井さん。

「桜井さん！！今夜中だからね！？もうちょっと静かに！！」

「あ…、す、すいません！！嬉しかったんでつい…」

桜井さんはそう言っただけで大人しく座椅子に座る。

あーあ、しょぼーんとしちゃった。

「まあでも、はしゃいじゃうのは仕方ないよね」

「はいっ！！お祭りは大好きなんですよあたし！！だから嬉しくなっちゃいましたあー」

体を振り子のように左右に揺らして笑顔で言う桜井さん。

可愛いなあ。

抱き締めなくなっちゃうぜ！！

「そうなんだ。あ、僕良いこと思い付いちゃったよ桜井さん」

「良いことですか？何ですか？」

「木下さんから浴衣借りようか」

「ええー！？浴衣ですか！？」

「うん、夏祭りと言ったら浴衣だからね。それに桜井さん似合いそうだし」

形から入った方が桜井さんもテンション上がるだろうし。

「良いんですかあ！？浴衣着ちやつても良いんですか！？」

「いや、良いに決まってるじゃない。まあ、木下さんが貸してくれればの話だけど」

「着たいです！！あたし浴衣着て夏祭り行ってみたいです！！」

「じゃあちよつと待っててね、木下さんに頼んでみるから」

僕はそう言つて怜に電話を掛けた。

「……うん、ありがとう。じゃあ桜井さんに言っておくよ。うん、

それじゃあ木下さんによろしく言っておいて。じゃああやすみー」

僕はそう言つて通話終了ボタンを押した。

よし、交渉s

「どうでした祐介さん！！」

「うわあ！！」

びっくりしたあ…。

もう、いきなり話しかけないでよ桜井さん。

「んとね、木下さんが貸してあげるって。ついでに一緒に夏祭り行こうだって。良かったね」

「いやつつつつつつたですうううつつつつつつー！！！！」

叫び過ぎ！！

うるさいよ！！

モンスターの咆哮だよこのうるさは！！

「桜井さん！！夜中だから！！もうちよつと声をちいさk」

「祐介さん！！ありがとございますううつつつつー！！！！」

「うわっ！！」

うわあーーーー、抱き付かれたあーーーー！！

ちょ、ちよつとヤバい！！

ヤバいつて桜井さん！！

さっきバスタオル姿の桜井さんを見て改めて胸の大きさを確認した後だからなおさらヤバいつて！！

しかも桜井さん、Ｔシャツの下に何も付けてないんだよー！！

だから、胸の感触が…、直に伝わってくるんだよおおおおお！

！！

あー、何か感じる…。

僕の胸辺りに二つの突起物が当たってるのを感じるぞ…。

あー、これ、完全に僕の体反応してるなあ…。

「うううー、あたし本当に嬉しいですううー」

ちよつと桜井さん！！

胸に埋めた顔をすりすりしないで！！

ちよつと気持ち良いから！！

いや、普通に気持ち良いから！！

あー、桜井さんの頭からシャンプーのいい匂いがする。

何かトリップしそう…。

てかもうしてるわ。

少なくとも僕の体はしてる。

阿 さんに言わせてみれば、

『すごく……大きいです……』

状態ですねはい。

「祐介さん……」

僕がそんな馬鹿なことを考えていると、桜井さんはおもむろに頭を上げて僕を見る。

やめて！！

そんな何かを欲するような目で見ないで！！

おい作者！！

僕たちで遊ぶな！！

話の流れをグチャグチャにしてまで僕たちで遊びたいか！！

よろしい、ならば戦争だ。

フウワフウー。

「あたし祐介さん大好きですっ!!」

桜井さんは今日一番の可愛らしい笑顔でそう言う。

そして再度自分の顔を僕の胸に預けて、続けざまに囁くようにこ
う言った。

「当たってますね…。元気な祐介さんも好きですよ…」

「うわああくあwせdrftgyふじこ1p;@:!!!!」

お父さん、お母さん…。

これは幸せなのでしょうか。

それとも不幸なのでしょうか。

「すう…、すう…、んにゃ、夏祭りい…、すう…」

僕はベッドで気持ち良さそうに寝ている桜井さんを尻目に静かに
起き上がる。

ちなみに桜井さんは僕のベッドに寝て、僕は布団で寝てます。

さすがには一緒に寝れませんよ。

ちよつと寝たいけど。

それは置いという。

いやしかし、今日は疲れた。

あ、『疲れた』と言っても、あの後は何もなかったですからね。

僕の理性が疲れているんです。

まあ、理性は疲れてるんですけど脳は興奮状態です。だから寝れ
ないんです。

んー。

思い返してみると、何かチャンス逃したような感じがする…。
何のチャンスか分からないけど。

でもやっぱりそういうことはお互いを好き合った恋人同士がすることであって、それに該当しない僕と桜井さんはしゃいけないことだと思っています。

それに桜井さんは幽霊ですしね。

いやでも、この冷めやらぬ性的興奮をどう処理しようか……。
うーん。

とりあえずケータイ持ってトイレ行つてきますかね。
僕が何をするかは、皆さんのご想像にお任せします。
それではまた。

第26話 興奮しますう（後書き）

祐介さんって意外とウブなんですね。うふふ…、可愛いです。

第27話 雨ですう

天気というものは実に気まぐれで、晴れてるなと思えば、いつの間にか空は雲で覆われ、やがて雨を降らす。かと思えば、これもまたいつの間にか雨は止み、気が付けば太陽がひよっこり顔を出している。

そんな安定しない天気の日には、現実^{リアル}を充実している若者たちも天気同様、心が不安定になるだろう。

ほら、せっかくセットした髪型とかよく湿気で変になったりするでしょ？

それで『マジ腹立つー、20分もかけて髪型セットしたのに湿気でグシャグシャなう』とかイラついたりするでしょ。

もつとすごい奴はそれだけでツイッターとかで呟くんだけ。

カッコイイネ。

そんな若者たちに僕は一言言いたいんだ。

「ざまあ」

「祐介さん、一人で何言ってるんですか？」

冒頭でも言ったけど、本当に天気というものは気まぐれなんだよね。

今まで快晴の日が続いていたのに、今日になって突然雨が降り出したんだもん。

まあ、別に今日出かける予定もなかったし、個人的には問題ないんだけど。

「雨降ってますねー」

窓から外を眺めながらテーブルにべたあつとうなだれてるロング

へアーの巨乳ロリっ子幽霊こと桜井奈緒さん。

あれだな。

後ろからうなだれている桜井さんを見てると、真ん中で分かれている長い後ろ髪がクワガタの角に見えるな。

まあどうでも良いけど。

「あー、雨が降ってたらどこにも出掛けられないじゃないですかあ！」

桜井さんはそう言いながらジタバタする。

うん。

今日は仮に雨が降ってなくても出掛ける予定なんてなかったぜ桜井さん！！

「あれですよ、雨の日って本当日中でも暗く感じますよね」

「そうだね、空全体が雲に覆われてるから完全に太陽の光が遮られてるもん」

僕は窓から外を見る。

本当に昨日までは絵の具で塗りつぶしたような青空だったのに、今日はどんよりとした鉛色が空を支配していた。そしてその鉛色の空から無数の雨粒が降り注いでいる。

若干雨が強いかな？

「何かまだ夕方前なのに電気付けちゃったりしますよね」

暗えつつつと、ケラケラ笑う桜井さん。

「確かにね。外は若干明るいんだけど部屋が思いのほか暗いからついつい付けちゃうんだよね」

「祐介さん、節電してください」

「ええええええええええ！！？」

話振っというてそれですか！？

いくらなんでもそれはあんまりですよー。

「話変わりますけど、雨が傘に当たる音って良くないですか？あたし好きなんですよー」

あのパラパラってやつと、桜井さんは言う。

「ああ、あれね、僕も好きだなー。小さい頃、よく木の下とか行つて雨が傘に当たる音聞いて楽しんでたもん。ほら、木の葉っぱから流れる雨の滴しずくつて少し大きいでしょ？だから音も普通より大きくなるんだよね」

「それ完全にトトロじゃないですか」

「いや、それは違うと思う。」

「あれですか、祐介さんはその音を聞きたいがために木の下で思いっきりジャンプして雨の滴を全部落とした後、『グウブアアアアアアアアアアア！』って叫んでネコバスでも呼ぶんですか？」

「いや、それは普通に考えて絶対違うと思う。」

「祐介さんは トトロなんですか……？」

「ちがあああああああああう……！！！」

桜井さん！！僕の心が読めるんだったらさっきから否定してるの分かるでしょ！！どうして僕をトトロにしたがるのさ！！

見えたのか！？

僕がトトロに見えたのか！？

むしろ見えたんだな！！

「グウブアアアアアアアアアア！……！」

「うわぁ！！どうしたんですか！？」

「いや、ネコバス来るかなって」

「きませんy」

ドン！！ドン！！ドン！！

「あ……やばっ」

隣の部屋の人に壁を叩かれてしまった。

うーん、ちよつと声大きかったかなあ。

気を付けないと。

「うっそおおおおおおお！！！！本当にネコバス来ましたよおおおおおおお！！……？」

「ちよっ……さく」

ドン！！ドン！！ドン！！

ほら、言わんこつちやない…。

「桜井さん、ちょっと静かに話そうか」

「だってネコバスが！！ネコバスがああああああ！！！！！」

あー…。

ドーン！！ドーン！！ドーン！！カラカツカ

隣の人壁じゃなくて太鼓叩いてるうー！！？

「桜井さん、あんまり大きい声は出さないようにしよう」

「はあーい」

うん、良い返事だ。

「あ、桜井さん何か飲む？」

「そうですねえ…、じゃあお茶でももらいましょうか」

「麦茶でいい？」

「いいですよー」

僕は台所に向い、冷蔵庫から麦茶を取り出した。

「はいどうぞ」

「ありがとうございますー」

桜井さんはそう言って麦茶をコクコクと飲む。

「あ、祐介さんってあれやったことあります？」

麦茶の入ったコップをテーブルに置いて桜井さんはそう言った。

「あれ？」

あれってなんだ？

「あの傘を開いたままフルスイングすると傘が引っくり返るとい
あれですよ」

「あー、それか。小学生の頃よくやってたなあ」

桜井さんの言っていることを簡単に説明すると、傘というものは
一般的に開くときのこのような形状になる。その状態でバットを振
るようには傘を振ると傘布が引っくり返り器うつわのような形になる。

つまりこのことです。

「やっぱりやってましたかつ」

ニコツと笑う桜井さん。

「やってたねえ、無駄に。んで引っくり返った傘に雨水を溜めたりしてた」

「その溜めた雨水をどうするつもりだったんですか？飲むんですか？」

「僕はそこまで水問題に悩んでいない。ただどのくらい溜まるんだろうと思って溜めてただけだよ」

「へえ、そうなんですか」

そう言ってまた一口麦茶を飲む桜井さん。

「うん。ほら、小学生ってどうでもいいことに興味を持つでしょ？だから当時の僕も傘にどれだけ雨水が溜まるのかなってどうでもいいことに興味を持ってたんだと思う」

小学生の時はいろんなことに興味津々だったからな僕は。

「確かにそうですね、しかも一つのことに関心を持ったらしばらくは抜け出せないですよ」

「確かにそれある。僕もそれやり過ぎて傘壊してよく親に怒られてたよ」

「あと、水溜りで靴の中がぐっしょりになるまで遊んで家に帰ったら親に怒られたりもしましたよね」

「あー、あったあった。てかあれだね、僕たちって結構同じようなことやってるね」

「ふふっ、そうですねえ。まあ、子供の頃なんてみんなこんな感じじゃないですか？」

子供にとってはこれが当たり前なんですよと、桜井さんは笑顔で言う。

僕もそうだねと返した。

「でも子供の頃は雨が降ったらテンション上がったのに、今は憂鬱になりますよね」

はあーっと大きな溜め息を思いつきり吐いて桜井さんはテーブル

に突っ伏す。

いや、何度も言ってるけど今日はたとえ晴れていても出掛ける予定はなかったからね？

「たまにありませんか？自分が外に出た瞬間、雨が降ってなかったのに突然降ってきたり、雨が強まったりすることって」

体をつ伏したまま、顔だけこちらに向けて桜井さんは僕にそう言った。

「うーん、僕はあんまりないなあ。桜井さんはあるの？」

「よくありますねえ。絶対あたしが外に出るタイミングを狙って雨降らせてるでしょってことが身に覚えがあり過ぎるほどありますねえ」

「へえ、本当にそんなことってあるんだ」

「ありますよー、普通にありますよー。なんなら今、外に出て雨降らせてきましょうか？」

「あ、降ってるから大丈夫だよ桜井さん」

僕は憎たらしい笑顔でそう言っていると、桜井さんはほっぺたを膨らませる。

ぶくーって。

まあなんとも可愛らしいフグなんでしょう。

「うー、祐介さんの意地悪」

桜井さんはそう言って顔を窓の方に向けた。

うーん。

桜井さん、今日雨が降ったのが本当にショックだったんだな。いつもの元気がない。

……よし。

「桜井さん、僕ちよつとコンビニでアイス買ってくるけど一緒に行く？」

「ええー、でも雨降ってますしね……」

「一緒に行ってくれるなら桜井さんの分も買ってあげるよ」

まあ、いつも買ってあげてるんだけど。

「えー、うーん、じゃあ…行きます」

そう言ってゆつくりと立ち上がる桜井さん。

あはは。

「それじゃあ行こうか」

外へ出ると、部屋の中から見た外の様子とは少し違って、若干強そうに見えていた雨も、意外とそうでもなかった。

とは言ってもやっぱり傘は必要だったので一つの傘に二人で入っているという、あまりに青春っぽいシチュエーションで僕たちはコンビニへと向かっていった。

僕は俗にいう『相合傘』というものに対して願望はあったのだけれど、なるべくしてなったというのが一番の理由で、僕の部屋にはビニール傘が一本しかなかったのが原因である。

まあ、経緯^{いきさつ}はどうであれ、僕の願望が叶ったことには変わらないのだ…！

ふはははー。

「桜井さん狭くない？」

僕はほぼ密着状態にある桜井さんに、少し興奮しながら聞いた。

「大丈夫ですよ。祐介さんこそ狭くないですか？」

桜井さんも僕と同じようにそう問いかける。

「うん、僕も大丈夫だよ」

正直、狭さに対して僕は全然気にしてない。

いや、むしろ狭いおかげで桜井さんとうして密着出来てるんだから、嫌というより幸せだ。

涙が出る。

出てないけどね。

「ところで桜井さん」

「何でしょうか？」

「桜井さんって、雨とかすり抜けられるの？」

てか今更だけど、本当に今更だけど、桜井さんって幽霊なのにどうして触れるんだ？

幽霊って魂のかたまりであって実体がないものだと思っていただけだ。

でも触れる以上、そこに実体があるわけだからそれは幽霊とは別物になってしまう。

もしかして桜井さんは人間なのか！？

いや、それは絶対じゃない。

僕は桜井さんが人間ではない証拠を何度も見てきている。

例えば、怜たちと海に行った時。

桜井さんは僕の体に移った。

例えば甲たちと鬼ごっこをして遊んだ時。

桜井さんは体を透かして僕を追いかけてきた。

それらが“桜井さんは人間ではない”ということを確認に、的確に、そして正確に証明している。

幽霊の定義とは非常にあやふやで、霊能力者やそういった類の人でさえはつきりとしたことは分らないものだ。

しかしそれでも桜井さんはそれから逸脱している。逸脱し過ぎている。

それはこの一般庶民である僕にも分かる。

そして一般庶民であるからこそ、僕はこの疑問の解消法を見つける術がない。

「すり抜けられますよ。ていうか、この世にある全ての物体はすり抜けられます」

桜井さんはそう言うのと、傘から抜け出して雨がそば降る中にくると回りだす。

やはり桜井さんの言うとおり、雨は桜井さんに当たることなく、桜井さんの体をすり抜けて地面に落ちていた。

「……………」

僕はその光景を見て黙りこむ。

桜井さんはさっき『この世にある全ての物体はすり抜けられる』

と言っていた。それはやはり“実体がないから”こそ、物体をすり抜けることができるということなのだろうか。

「じゃあ何で僕は桜井さんに触れるの？」

“この世にある全ての物体はすり抜けられる”なら僕の体もすり抜けられる　つまり“触れることができない”はずであるのだけだ。

しかし僕は今まで何度も桜井さんの体に触れてきたのだ。

「うーん、それは何ででしょうね。無意識に意識しているんじゃないでしょうかね」

「意識？」

「はい。きつと祐介さんに限らず、触りたいもの、触りたいもの、その物や者を意識しているからすり抜けずに触れられるんじゃないですか？」

正直よく分かりませんが、桜井さんはそう言って傘の中に入ってきた。

意識か。

それすらも意識でどうにかなるものなのか。

そう考えると意識というものは恐ろしい。

「じゃあ僕も意識の持ちようで体を透けさせることができるのかな？」

「できませんね。祐介さんは人間なんですから」

ですよねー。

冗談半分で言ったことに対して間髪をいれずにマジレスしてくれた桜井さんに感謝です！！

さて。

そろそろいいかな。

「桜井さん見て、いつの間にか雨が止んでるよ」

僕はさしていた傘を閉じて、空を見上げる。

空の色は相変わらず綺麗な鉛色だったが、そこからはもう雨は降っていないかった。

「あ、本当ですね」

桜井さんも空を見上げてそう言った。

「でも何で雨は止んだんでしょうか。今日は確か一日中雨の予報だったはずですけど」

空を見ながら怪訝な表情を浮かべる桜井さん。

そんな二人揃って空を見上げる中、鉛色の空の隙間から一筋の光が差し込む。

ねちっこくて鬱陶しい、そんな人々の感情を逆なでするような暑苦しい光。

僕はその光を　まるでステージに立つ主人公を照らすスポットライトの光を浴びているような感覚に浸りながら桜井さんに言う。

「僕、実は晴れ男なんだ」

しかもドヤ顔で。

桜井さん、天気予報なんてあくまでも予報であって、それが正確という証拠はないんだ。

そう。

まるで桜井さんのようにね。

第27話 雨ですう（後書き）

正直作者自身も幽霊の定義についてよく分かっていませんので。

「作者さん、コンビ二に着いてないですけど話終わっちゃっていいんですか？」

いいんじゃない？

第28話 奇襲ですう（前編）（前書き）

何かおかしいです、いろいろと。

第28話 奇襲ですう（前編）

「お疲れー、それじゃあまた来週な」

「ああ、お疲れ」

「あ、司、お前ちゃんと来週までに曲作ってこいよー」

「おう、任せろ」

俺はバンドのメンバーにそう言ってスタジオを出た。

俺は小田切司。

祐介の友達で、確か前に祐介達と海に行ったとき出てきたと思うけど覚えてるかな。

まあ、覚えてなくても別にいいんだけど。

俺なんて微妙な位置の人間だし。

……どうでもいいか。

いや、卑屈になってる訳じゃあないんだぞ。

ぶっちゃけ俺は別に俺の話なんて無くてもいいと思ってるし。

俺個人の自由がちゃんと確保されてれば俺の話なんていらんのだ。

ここでいう『自由』というのはバンド活動のことだけだ。

それさえちゃんとできれば俺の話なんてどうでもいいんだ。

ただまあ、こうやって個人的に俺の話が挙がるということは何かあるな。

……。

まあ、別にいいけど。

冒頭で言っているように、俺は今日バンドメンバーでスタジオ練習をしていた。

バンドメンバーでスタジオ練習って言っても、同じ中学だったバ

カ三人組がただの趣味でやってるだけなんだけどね。

まあでも、趣味とは言えど、結構ガチでやってる。

オリジナル曲作ってライブもやってたりしてるし。

別に将来音楽でやっていきたいとは思ってない　　と言えは嘘になるけど、世の中は甘くないのは重々承知してるし、正直俺は音楽をやるためにあらゆるリスクを負う勇氣も度胸もない。

ただ　楽しいんだ。

みんなで自分達の曲を作って、自分達の手で演奏する。それでもし曲を聴いてくれた人の中に何かを感じてくれるものがあつたら、俺は楽しいし嬉しいんだ。

まあ、別に俺らは立派なバンドでもなければインディーズバンドでもない、ただのお遊びバンドだ。

きつと俺らの音楽で何かが変わるわけでもないし、感動とかそういうのも与えられるわけではない。

でもこんなお遊びバンドでも人を楽しませたり人を感動させたりできるのなら。

俺は音楽をやりたい。

…うん。

何を言っているんだ俺は。

何か思い返してみるとすごい恥ずかしいことをベラベラと喋っているな…。

…………。

本編行くぞ。

「もう九時か」

スタジオを出て電車に乗って最寄りの駅に着いた頃、携帯の時刻表示には『21:01』と表示されていた。

スタジオ練習をするとだいたいこのくらいの時間に駅に着き、家に着く頃になると九時半近くなる。

まあでも、極端に遅い時間というわけではないし、親ももう高校生だしと言って門限に対してとやかく言うこともないから問題はないんだけど。

放任主義というわけではなく、きっと俺が女だったらいろいろ言うてくるかもしれない。現に二個上の姉ちゃんには結構厳しいし。きっと俺には高校生になったんだからこれからは責任を持ち、よく考えて行動しなさいということなのだろう。

俺の勝手な解釈だけど。

「家に着いたら早速新しい曲を考えないとな」
家に向かう最中にふとそう呟いた。

うちのバンドは主に俺が作詞作曲をしている。たまにベースの奴が作曲をしたり、ドラムの奴が作詞したりもするが、基本は俺だ。曲を一曲丸々作るのは本当に大変で難しい。歌詞だったり、アップテンポにするかスローテンポにするか、どういう曲構成にするかとかいろいろ考えなくてはならない。でもその大変な作業を終えた時の達成感はやみつきになるほどだ。

だから俺は曲を作るのが好きなんだ。

「うーん、最近はずっぴテンポな曲ばかり作ってるから今回は口ツクバラード的なものを作ってみるか」

そうなると次は歌詞のテーマだな。

歌詞をあまり過激なものにすると曲とのバランスがおかしくなる。言葉遣いも柔らかくしないといけない。

「うーん、どんなことを歌おうか…」

俺がそう呟いたとき、“それ”の音が、小さく、それでもはつきり聞き取れるほどに俺の耳に入り込んできた。

嫉妬。

「え？」

俺はその声に反応し、進めてた足を止めて辺りを見回した。

「誰も居ないじゃん」

所々に外灯があるので夜でも辺りを見渡せる。

少なくとも俺の視界の中に人と思われるものはなかった。

「気のせいか」

俺はそう言い、再び家に向かって足を進めようとした瞬間。

今度は“歌”が聞こえた。

いや、聞こえたというより “歌” が俺の周りをぐるぐると駆け巡っている。

『あたしよりもギターが上手いゝあなたが羨ましくゝそしてえゝ』

まるで即興で考えたようなお粗末で小学生でも作れそうなヘンテコでリズムもへったくれない陽気な歌。

そんな陽気な歌声が突然ピタリと止まる。それと同時にまるで季節が冬になったかと思うほどに空気が冷たくなった。

な、さむっ！！

何でいきなり！！

今夏だぞ！？

俺は突然の不可解な出来事に頭が混乱し、そして今まで味わったことのない恐怖を感じていた。

俺の背中に嫌な汗が流れ、まるで金縛りにあったかのように体の自由が利かなかった。それなのに反射的にゾクリと鳥肌が全身を走る。

なんなんだ今の歌は…。

“そしてえゝ”？

そしてなん……。

『憎い』

「！！！！」

“それ”の声は、俺の思考を遮断するのに十分過ぎるほどはつきりと聞こえた。

さっきの陽気な歌声とはまるで違い、その言葉通り憎悪と憎しみの籠ったドス黒い声。

そして俺はそのドス黒い声に押し倒されるように 気が付けば

息が出来ない。

声もまともに出せない。

そしてこの首を締められている感覚。

顔をしかめ、息苦しさで徐々に意識が遠のいていくこの状況でようやく理解することができた。

俺は “ 何かに ” 首を締められているということ。

『 あゝ ああ、はあゝ あゝ にぐいいいゝゝ、はあゝ、あゝ ああ 』

落ち着きを取り戻したのか、先ほどより低いトーンで、それでもしっかりと憎悪と憎しみを纏った吐息混りの声が俺の顔を撫でる。俺には見えてないが、恐らく “ それ ” の顔は俺の眼前にあるのだろう。

生暖かくて気持ちの悪い声が。

まるでアイスを舐めるかのように俺の顔中を舐めまわす。

「 やゝゝゝ、めゝゝゝ 」

意識的にやったのか無意識にやったのかわからない。しかし “ 見えないものに触れた ” ということはきつと無意識に、体が勝手に反応したのだろう。

俺の手が “ それ ” に触れた。
いや。

この場合 “ 触れた ” という表現は正しくない。

正確には 掴んだ。

俺の首を絞めてる “ それ ” の手首を。

『 ちょっと、何触ってんのよ 』

…………… え？

なん…だ…？

女の…声…？

俺は恐る恐る目を開けると、そこにはセーラー服を着た金髪の女子が俺の体に馬乗りになっていた。

恐らく女子高生であろうその女子の二本の細い腕はやはりというべきかしつかりと俺の首を握っていた。

「え…？」

突然の出来事の連続で何がなんだかわからない状況で、混乱する頭の中すらも整理できないまま、俺はその女子高生を見つめることしかできなかった。

『なーんかシラケちゃった。ちょっと、手え離してつてば』

さっきのドス黒い感情を剥き出しにした声とはまるで違い、言葉通り呆れた口調で言う女子高生が、俺の頭の中に張り付いた混乱を更に煽る。

とりあえず俺はその女子高生にそう言われて、まるで熱い物を触ったかのように慌てて手を離すと、その女子高生は溜め息混りにゆつくりと俺の体から降りた。

「ゲホッ！！ゴホゴホッ！！ッゴホエ！！」

首絞めから開放された俺は、喉を抑えながら激しく咳き込む。

『うわー、ゲホゲホ言っちゃって。なんてみつともない姿』

腕を組み、まるで家畜を見るような目で俺を見下ろしながらその女子高生は言う。

てめえがこんなふうにしたんだろうが！！

俺はそんな文句を吐いてやりたいところだったが、なかなか咳が止まらずそれを口にすることはできなかった。

『まあね』

「！？」

“まあね”だと…？

今こいつは何に対して“まあね”と言ったんだ？
まさか。

『ああ、あんたの“心の声”に言ったんだ』

女子高生は表情を変えずに冷たく言い放つ。

「ゲホッ…、つはあ…はあ…、お前、俺の心が読めるのか…？」

気管の圧縮運動が徐々に弱まり、何とか喋れるようになった俺は、

頭の中に芽生えた疑問をぶつけた。

『ああ、読めるよ？あたしは幽霊だからね』

「幽…霊…」

俺は女子高生　正確に言ったら女子高生の幽霊が自分の正体を幽霊と明かしたことに對してさほど驚きを見せなかった。

やはりか。と言うか、上に乗られた時点で気付いていたけど。

「はあ…、はあ…、ふううー…」

よし、呼吸も整ってきたし徐々に落ち着きも取り戻している。

俺はもう一度深呼吸をしてから、

「お前は一体何なんだ？」

と女子高生の幽霊を睨みつけて言った。

『だから言ってるじゃん、あたしは幽霊だって。ちょっとあんた大丈夫？』

その女子高生の幽霊は、俺に睨まれたことに臆することなく、むしろ俺を馬鹿にしたような口調でそう言った。というよりはつきりと馬鹿にした。

『へえー、あんたテレキャス使ってたんだ』

そして恐らく倒れたときに飛んだのだろう俺のそばに落ちているギターケースを開けて俺のギターを手に取りながら言う。

「お前が幽霊だってことはわかってんだよ。俺が聞いてんのは何で俺を襲ったのかってことだよ」

んなことわかんじゃん、察しろよそこは。

すると女子高生の幽霊は、手にしていたギターをギターケースにしまい、はぁーと溜め息を吐く。そして頭を掻きながら、

『あんたらが憎いんだよ。んなことわかんじゃん、察しろよそこは』と鋭い眼差しで俺を睨みつけてそう静かに言ったのだった。

第29話 奇襲ですう（中編）（前書き）

「この作者、何を言いたいのかわからん」

「まあみき姉、そう言ってやるなよ」

第29話 奇襲ですう（中編）

たらたったったあー

はい、というわけで今回も始まりました“どらすていくごーすと”のお時間ですつ。

えー、私、ロングヘアーの巨乳ロリっ子幽霊でお馴染みの桜井奈緒でえーっす、よろしくお願いしまぁーす！！

って言ってももうちょいしたら居なくなりますけど…。

前回のあらすじ言って終わりですからね…。

な、泣いてなんかいません！！

……ぐすん。

さぁ早速、前回のあらすじです！！

前回は祐介さんのお友達、小田切司さんがスタジオから帰っている最中に何者かに襲われてしまいました。話が進むにつれ、司さんを襲ったのはなんと、女子高生の幽霊だということが判明しました。きゃー怖いっ！！

そして司さんが自分を襲った理由を聞くと、その女子高生の幽霊は司さんをキツと睨みつけて、

『あんたらが憎い』

と静かに言ったのです。

さぁー、これから司さんはどうなるのでしょうか！！

そして女子高生の幽霊の襲った動機の真意は！！

なぜ“あんたら”なのか！！

これらの謎はこの後明らかにする。

「祐介さん、これでいいですかあ？」

「バッチリだよ桜井さん」

はい、それでは本編始まります。

「は？あんたらが憎い？」

『ああ、あんたらが憎い。憎くて憎くてしょうがない』

女子高生の幽霊は鋭い視線を逸らすことなくジッと俺を見据える。そんな中、睨まれてる俺はというと。

『何キヨロキヨロしてんだ？』

憎悪と憎しみの込められた眼差しを向けられているのをお構いなしにキヨロキヨロと周囲に目を配らせていた。

「あ、いや、“あんたら”って言ったからここに俺以外誰かいるのかなと思って」

しかし周囲を確認しても俺以外誰もいないという結果に終わる。

「もしかして、お前みたいに人間には見えない“モノ”がいるのか？」

俺は恐る恐る女子高生の幽霊にそう聞いてみた。

もしそうであれば警戒するのに越したことはない。現に俺は目の前に突っ立ってる所謂“あちら側の人間”（死んでるのに人間とはこれいかに）に殺人鬼よろしく首を絞められているんだから。

警戒をし過ぎてもし過ぎることはない。

「おい、どうなんだ」

俺の問いに答えず、ただジッと俺を睨みつけている女子高生の幽霊にもう一度聞く。

すると女子高生の幽霊はさらに鋭く、もはや視線だけで人を殺せるほどの殺気を放った眼差しを俺に向けてきた。

それにはさすがに俺もゾツとした。

『あんたさあ、あたしのこと舐めてる？マジで殺されたい？』

体全体を覆うくらいに成長した殺気を身に纏い、女子高生の幽霊は俺の方へと一歩足を進めた。

「いや！！ちょ、ちょっと待て！！別に俺はそんなつもりで言ったんじゃない！！て言うか俺はマジでそう思ったんだって！！だってそつだろ！？辺りを見回してもここには俺しかいないのにあんたが

“ あんたら ” って言うから俺には見えない “ 何か ” がいるかもしれないと思うじゃないか ! ! ”

俺はそう必死に釈明する。しかし女子高生の幽霊はそれに対してまるで聞く耳を持たず、毅然とした様子で俺の所へと一歩ずつ近づいてくる。

その間も俺はずっと叫び続けるが、やはり女子高生の幽霊は足を止めることなく進んでくる。

やばい、マジで殺される。

俺がそう思った時 。

『 才能とかセンスとかそういうのがある人間の大部分はさあ、自分でそれがあるという自覚がないとあたしは思うんだ 』

いよいよ俺の所にたどり着いた女子高生の幽霊は、突然そんなことを言い出して俺の顔の傍にしゃがみ込んだ。

… パンツ見えそう。

あ、いや何でもない…。

て言うか。

は？

え？

いきなりどうしたんだ？

恐る恐る表情を伺ってみると先ほどよりは殺気が感じられず、初めに見た時の表情に戻っていた。

『 そりゃあそうだよ、例えば絵が上手い人とかサッカーのプレイが凄い人とか、つまり “ 出来る人間 ” っていうと思うけど… ？ ” “ 出来る ” だと少しニュアンス違うな。 “ 有能な ” ？ んー、どっちだ？ … まあいいや。その “ 上手い ” とか “ 凄い ” とかって結局は本人ではなく他人の意見や感想であって、当の本人はただ自分のやりたいように好き勝手やってるだけなんだから。それが才能とかセンスがあるということの証明になってるって気付きもしないでさ。まあ、中には自覚している人もいると思うけど 』

「 は？ え？ ちょ、ちょっと待て、お前いきなり何言ってるの？ 」

才能？センス？

何でいきなりそんなこと言い出すんだ？

さっぱり意味が分からない。

『分からない？分からないわけないよね？作詞出来て、作曲出来て、編曲まで出来る。そして曲を作ってバンドメンバーに聴かせる度にステージの上で演奏する度に『凄い』『格好いい』『センスある』と持て囃されるあんたが、あたしの言ってる意味が分からないわけがないよね？』

俺を見る女子高生の幽霊の目が細くなる。

まるで軽蔑しているかのように。

「いや、そういうことじゃなくて…、ってか何でお前、俺が曲作ってるって知ってたんだ？俺お前に遭遇してから今の今まで曲作ってるなんて一言も言っていないぞ？しかも俺が持て囃されてるって何だよ！！そんなことされてねーわ！！」

確かに凄いとかがセンスあるとかは言われたことあるし、形上それが持て囃されてるように見えたとしても俺はそれで有頂天になっているつもりはない。

ましてや自分にそういった才能とかセンスとかあるなんて思っていない。

『そりゃああんたは有頂天になっているつもりはないし、自分に才能やセンスがあるとも思っていない。だって自分の好きなように曲を作っているんだから。言っただろう？才能やセンスに恵まれている人間はそれに対して自覚がないって。でも事実、歌詞も秀逸だし、曲の構成も非常に上手いし面白い。演奏の技術だって申し分ないほどだ。つまりはあんたは自分で好きなようにやってるつもりでも、いつの間にか自分の無自覚ながらも持っている才能やセンスを無意識に、そして 無責任に発揮しているんだ』

「無責任…だと？」

意味が分からない。

さっきの『意味が分からない』はこのタイミングで才能がどうと

かそういう話をし始めた女子高生の幽霊に向けた言葉だが、今回の
は文字通り女子高生の幽霊の言っている話に向けての『意味が分か
らない』だ。

何が無責任だ。

万が一、億が一俺に曲作りの才能やセンスがあるとしても、そし
てそれを無意識に発揮しているとしても、なぜそれが“無責任”な
んだ。

つか関係ないけど何で聴いたこともないのに『歌詞が秀逸』と
か言ってるの？

『意味が分からない？ははっ、あんたはどこまでもおめでたい奴だ
な、頭の中がお花畑で埋め尽くされているのか？もしそうだとした
らあんたはとんだハッピー野郎だな』

女子高生の幽霊の罵声が乾いた嘲笑と共に響く。

『創作物というものは才能やセンスの塊だ、それは曲作りも例外で
はない。つまりあんたの作った曲も同じことが言える。そんなあん
たの作った曲をあんたのと同じような曲作りに励んでいる奴が聴い
たらどう思う？同じ志を持った無能でナンセンスな“出来ない人間
”が聴いたらどう思う？…んー、やっぱり“出来る”とか“出来な
い”とかは何かニュアンス的にしっくり来ないな。ま、もうこの際
どうでもいいや』

「……………」

『ん？どうした？急でもないけど黙り込んで。あ、もしかしてあた
しの質問に対する自分の考えを頭の中で、一面お花畑の頭の中で導
こうとしているのか？あーダメダメ、いくら考えを導こうとしても導
かれるのは蜜を吸いに来たモンシロチョウただだから』

もしかしたらミツバチかもと、女子高生の幽霊は言う。

「俺の頭ん中はお花畑じゃねーよ！！」

こいつ俺のこと馬鹿にしすぎだろ。

黙って聞いてりゃあいい気になりやがって。

さすがの俺でもそんな頭の中が花畑で溢れ返っているようなハッ

ピー人間なんかじゃないわ。

『じゃあ、黙って聞くなよ。あたしはあんたに質問しているんだ、もしあんたの頭の中がお花畑で溢れ返っていないのならちゃんと答えろよ』

俺はそんな威圧的に言葉を放つ女子高生の幽霊に、若干ムカついていた。

さっきまでの俺だったら恐怖心を煽られていた。そりゃあそうだろう、さっきも言ったが、こいつは幽霊だし、俺に対して殺意を行動に移したのだから。殺されると思ったら怖くなるのは当たり前だろう。これで怖くならない奴はそれこそ頭の中がお花畑で埋め尽くされているハッピー人間か自殺志願者くらいだ。

でもいきなり、突然に、前触れもなく、また突拍子もなく才能やセンスがどうのこうのと訳の分からない弁舌を振るい、俺を見下し、軽蔑し、拳句の果てに馬鹿にする始末。

ましてやこの幽霊とはそれこそついさっき出会ったのだ。そんな出会ったばかりの奴に馬鹿にされてムカつかない奴だって当然ないだろう。

でも俺を苛立たせてくれたおかげでお前の求めている答えが分かったよ。

おかしい話だよな、よく『怒りで周りがよく見えない』と言われるけど、俺はそのおかげで“お前のことがよく見えた”ようだ。

いや、“思い出させてくれた”と言った方が正しいのかな。

だから。

俺から恐怖を取り除いて、怒りを植え付けさせてくれて　　ありがとうと。

そんな感謝の意を込めて。

俺は言った。

「どう思っつて？そんなこと“知らねえよ”」

ニヤリと笑って　　馬鹿にした。

『あー、あたしは幽霊だからあんたの思っていることが分かるから

そういう風に言われるって分かってたけど、いざ言われるとやつぱり腹が立つな」

女子高生の幽霊は頭を掻きながら顔をしかめる。

「腹が立ったか、そりゃあ良かった。つまりお前もハッピー人間ではなかったことが証明されたわけだ。おめでとう」

『あんだ、殺されたい？』

女子高生の幽霊はギロリと俺を睨む。

もうこの幽霊に何度睨まれたか分からないが、しかし俺にはもうその目に屈する恐怖心は生憎持ち合わせていないぜ。

「幽霊はもう人間じゃないから法律に縛られることなく人を殺せるんだもん。羨ましいな。あ、いや、別に人を殺せることが羨ましいんじゃないぞ？法律に縛られないで好きなことが出来るってのが羨ましいんだからな？勘違いすんなよ？」

そして俺は一呼吸置いて。

「羨ましい羨ましい、幽霊すげえ羨ましいな。もう“嫉妬”しちゃうぜ」

思えばこいつに襲われる前に俺はそんな言葉を耳にしていたんだよな。

幽霊に、しかも襲われるなんて人生の中で今の一度もなかったから恐怖でそんなこともすっかり頭の中から旅立ってたよ。

ちよつと冷静になつて考えたらこいつの求める答えなんて 最

初にこいつ自ら提示していたじゃあないか。

全く。

幽霊は怖いな。

「嫉妬だろ？嫉妬するって言いたいんだろ？いや、言わせたいんだろ？お前は。才能やセンスがあると思ってる俺にその言葉を言わせなかったんだろ？」

『…そう言えばあんだがどんなことを歌おうかと考えてる時にあたしは“嫉妬”という言葉を発していたな。まあ、そんなことはどうでもいいや。とりあえず正解だ、正解正解だーいせーかい。そう

だよ、あたしはあんたにそう言わせたかったんだよ」

正解とか言いながら何その心のこもっていない言い方は。

まあ、いいか。

心のこもっていないということは不本意だったということだ。

つまり馬鹿にされたという自覚があったということだ。

ははっ、これでおあいこだ。

『おあいことか馬鹿じゃない？こんな小さな反撃とも言えない、まるでデコピンのような皮肉で満足するすとか。あんた、人間としても小さいね』

確かに腹が立ったのは事実だし、シラケたのも事実だけど、単にそれだけだと。

女子高生の幽霊は無表情でそう言った。

「小さい…ね。まあ、お前がそんなことで俺のことを小さい人間と思うなら、俺は小さい人間なのかもな。人の価値観や考え方って人それぞれ違うし、他人がそれをどうこう言えるものでもない。でも

—

そして俺は続けて言う。

「あえて俺という他人がお前の考え方に口を挟むとしたら、自分より遥かに上回る才能を見せ付けられて嫉妬しか湧き上がってこないお前も小さいよ」

ビシッと。

右手の人差し指を女子高生の幽霊に突き付けて。

まるで探偵が犯人を当ててるように。

俺は言った。

『あ？』

女子高生の幽霊は俺の言葉にあからさまに不機嫌になった。

「お前も言った通り、創作物は才能やセンスの塊だ、そして自分より上回るものを見せ付けられて嫉妬だってする。それは否定しない。だけど創作物は才能やセンスだけか？そして感じるものは嫉妬以外にまだあるだろ？そうやって物事を自分の都合良くしか考えられない

「いお前は小さいって言ってんだよ」

小さな人間。

不完全な人間。

人間の成れの果て。

つまり 幽霊。

『何だそれは。もしかしてあれか、あんたは『努力に勝る天才なし』
とでも言いたいのか？何事も一生懸命努力すればその成果はやがて
実を結ぶと、そんな陳腐なセリフをこれみよがしにあたしに言っ
ているのか？』

「ああ、そうだ。才能やセンスなんて、努力次第でどうにでもなる」

『はっ、やっぱりあんたの頭の中は一面お花畑のハッピー人間だ。
というよりあんたという人間自体ハッピーセットだな』

マックに帰んな。

女子高生の幽霊はそう言って、尚も続ける。

『確かに努力は大事だ。創作活動だけじゃなく、人生においても必
要不可欠だ。というより人生そのものが努力と言っても過言ではな
い。それはあたしにも理解できる。でもさあ、努力すること
は基本であって当たり前のことなんだよ。呼吸するのと同じさ。だ
から日々生活している中で努力してない奴なんていないし、努力し
ない奴はもう人として終わってる』

「だからお前は 幽霊なんだろう？」

俺は間髪を入れずそう言った。

というか。

気付いた時にはもう言葉を発していた。

反応的でなく、反射的に。

脳を経由せずに。

しかし。

そんな脳を経由しないながらも咄嗟に発せられた薄っぺらな自分
の言葉に。

俺は全てを理解したのだった。

第29話 奇襲ですう（中編）（後書き）

「えー！？前回のあらすじで“この後、全てが明らかになる”って
言ったくせに中途半端に終わるんですかー！？どうなってんですか
！！」

いや、思ったより長くなりs

「自分の言葉に責任持つてください」

…言ったのあなたでしょ。

第30話 奇襲ですう（後編）（前書き）

「なるほど、わからん」

「まあみき姉、そう言っ…やるなよ…」

第30話 奇襲ですう（後編）

はあー、またやらないとダメなんですかあ？

もうあたしの言葉には信用ないんですよお？

これの前の前回のあらすじでは堂々と格好つけて“この後、全てが明らかになる”って言うておきながら、本編では全然明らかになっ
てませんでしたからね。

伏線回収しつかりしてくださいよー。

迷惑かかるのあたしなんですからね？

全く…。

え？自己紹介がまだって？

あー、はいはい、やりますよあー。

えー、私ロングヘアーの巨乳口りっ子幽霊でお馴染みの桜井奈緒
です（棒読み）。

え？ちゃんとやれて？

だったらあなたもちゃんとやってくださいよ。

はあー。

それじゃあもうあたしの言葉には信用ないんですけれど、そして
気も乗りませんけれど、やれて言われたので前回のあらすじを始
めまーす。

前回、司さんが夕食後にテレビを見ていたら、突然お腹に激痛が
走りました。それはまるでお腹の中から針で刺されるような痛みで
す。

司さんはそのあまりの激痛にその原因すらも推測出来ず、また身
動きを取ろうとすると全身に激痛が走ります。お腹の痛みが全身
を支配しているような　お腹を起点とし、身体に張り巡らされた
血管の中に無数の針が形成し、動こうという意思を持つ度に内側か
ら血管を傷付けるように。

自分でも何言ってるかわかりませんがそんな感じなんです。

しかしだからと言ってそのままジツとしていると、当然というか、下腹部に猛烈な便意が込み上げて来ました。その速さたるや光のごとく。

つまりは下痢です。

司さん、今世紀最大のピンチです。

さあ、これから司さんは……はあゝあ、どうなんでしょうねえ。

え？

あらすじが全然違うじゃないかって？

うるせーです。

「本編に全くかすりもしないあらすじ紹介と最後の投げやりっぷりは凄まじいね桜井さん」

「こっちはやる気ないんですよ祐介さん」

それでは本編始まります。

『だから幽霊なんだろうって、何訳わかんないことってんの？やっぱりあんた頭大丈夫？』

女子高生の幽霊は俺の言葉に対して嘲笑する。

「お前、それしつこい」

『しつこいって言ったって、あんたが意味不明なことばかり言うからじゃんか。むしろあんたの頭を心配してあげてんだからありがたく思いなよ』

「そんな心配いらねえよ」

そんな心配は亮平にでもしとけ。

こう見えても成績は上位の方だ。

「だってお前は」

『今更だけど気安くあたしのことを“お前”って呼ぶな。何かムカつく』

女子高生の幽霊は本当に今更なことを言う。

しかもその理由が“何かム力つく”って、まあ、確かに知らない奴に“お前”と呼ばれたらいい気はしないが。

「そんなこと言ったって第一お前の名前を俺は知らないし、そもそもお前だって俺のこと“あんた”って呼んでるじゃないか」

とは言ってみたが、結局のところ、今更どうでもいいだろそんなこと　というのが俺の気持ちだった。

『そんなこと知るか、いいから“お前”っていうのやめろ。あたしは^{さかき}榊^{りんね}凛音だ』

ふんつと鼻を鳴らし、その女子高生の幽霊　榊凛音は俺に向かって中指を立てる。

何そのファックサイン。

ていうかこいつ、自己紹介したってことはこれから名前で呼べってことなのか？

……。

別にお前でもいいじゃんか。

俺は溜め息を吐き、話を本題に戻す。

「お前は　榊は、自殺で死んだんだろう？」

俺はそう、あたかも最初からわかっていたかように言った。

その自分の仮説を、まるでそれが定説であるように　断言した。

『は？何であんたにそんなことがわかんのか？心が読める幽霊でもないのに、それにあたしは自分が何で死んだかなんて一言も言っていないのに。予想で言っただけならあんた、それはかなり失礼なことだぞ？』

これであたしが自殺じゃなかったらどう責任を取ってくれんだ。

榊はそう言いながらおもむろに俺を睨んだ。

まあ、確かに思い付きで、しかも本人を目の前にして自殺したなんて言うのは、榊は失礼だと言っていたけど、実際は失礼なんて言葉で片付けていいものではないけれど、それでも俺だって別に思い付きで言っただけじゃあない。

でもかと言って、それは決定的な根拠ではない。

非常に曖昧な　こじつけと断言していい。

そんな不安定な根拠を、俺は言う。

「努力することを諦めたんだ」

だからお前は　死んだ。

自らの意思で。

『はあ？ちよつとあんたさあ、いくらなんでもそれはこじつけが過ぎるんじゃないの？もしかして“努力しない奴はもう人として終わってる”ってあたしが言ったのをそのまま捉えちゃったりする？文字通り？そのままの意味で？比喩だつて気付かずには？もしそうなら心配を通り越していつそあんたを楽にしてあげたいよ』

さっきの続きするかい？と、榊はいやらしく笑う。

不覚にも言葉だけ聞けば、何ともいやらしい言葉だなあと思つてしまつた。

自重しろ俺。

『まあ、可能性としては、自殺をしたと推測する気持ちもわからない。確かに今の中高生の中で自殺する奴は少なくはない、むしろ多いほどだ。だけど、自殺する動機というものは日常を平々凡々と暮らしているような奴らには想像のつかないほどの痛みや苦しみのものである。生きていくのが辛くて辛くてどうしようもなくなつたそのどす黒い負の感情こそが動機なんだ。それをあんたはあたしが努力することを諦めたから自殺したつて？努力することを諦めた程度のことで人生をも諦めようと思う奴がいるか？』

馬鹿馬鹿しいと、榊は鼻で笑つた。

確かに動機としては薄い。

比べるこののできないくらい薄っぺらい動機だ。でも。

それでも。

努力することを諦めた人間にも確実に“どす黒い負の感情”は染み付いているんだ。

「お前は努力することを諦めて自ら死を選んだんだ。もっとわかり

やすく言ってやろうか？お前は他人の才能やセンスに気圧されて、そして“好きなギターに対する熱意をも蒸発させて”最後には自殺したんだ”

そう言えば、こいつは俺のギターケースからギターを取り出したとき、一目見てテレキャスターだとすぐわかっていた。音楽をBGM仕様にしたり、一種のファッションとして取り入れていたり、さらには音楽に興味のないような人間だったら数多くあるギターの中から一目見ただけでわかるはずがない。わかるとするなら、それは楽器マニアか演奏者だ。そしてこいつは間違いなく後者であり、それはこいつが最初に歌ってた下手くそな歌が証明している。

そしてあの下手くそな歌がお前が努力を諦めたということの何よりの証拠だ。

てか普通に忘れてるなよ、そんなこと。

普通に考えればそれが俺を襲った直接的な動機だってわかるじゃないか。

『ああ、そんな歌も 歌ってたな』

確かにあんたの言うとおり、あたしは“ギターをやっていた”よ。でも と榊は言う。

『だからって別にあたしは努力してなかったわけじゃない』
そして俺を見た。

真剣な眼差しで。

『それが自殺した原因かはともかく、というかあたしが自殺したかしないかはともかくとして、あたしはギターに対しての努力を諦めたつもりはない』

「まあ、努力をすることを諦めたと言っても、お前なりに努力はしただろう。人によって努力 例えば勉強において、毎日欠かさず家でその日習ったことをしっかり復習をしている人は当然努力しているし、普段は家で勉強しない、あるいは宿題すらも真面目にやらない人が、突然宿題をやりだすことだって、その人にしてみればそれも立派な努力だ。つまり人によって努力の感じ方は様々だ」

『そうだ、あたしはあたしなりに精一杯努力してきたつもりだ

いや、精一杯努力してきた。あんたはこうして言葉ではいかにも中立的な意見を述べているけれど、でも心の中ではきつとあたしの努力を否定しているのかもしれないけれど、それでもあたしは精一杯努力をしてきたんだ。たとえあんたがそれを否定したとしても、あたしは胸を張って断言できる』

「でも、“その成果”はなかったんだらう？」

『え？』

榊は俺の言葉に目を丸くした。

不意をつかれたかのように。

「お前は一生懸命努力をしていた、それをお前が言うなら俺は言葉上でも心の中でも否定しない。でも才能を持つ人間を憎み、嫉妬し、忌み嫌っているということは、その努力は実らず、成果も得られなかったということになるんじゃないのか？」

もしこいつの言う努力が実っていたならば、才能を持つ人間を憎んだり嫉妬なんかしないだろう。努力で得たものは力となり、そして成果に繋がるのだから。

極論を言うならば。

こいつも“才能を持つ側の人間”になっていたはずだ。

「努力はあくまでも過程であって結果じゃない。だからいくら努力をしたと豪語しても、成果という結果を得られないなら 努力してないのと同じだ」

つまり 努力することを諦めたのと同じだ。

『……………』

榊は俺の『お前』という言葉にすら反応せず、うつ向いて何も喋らない。

しかもうつ向いているため、少し長めの金色の髪が榊の顔を覆っているの、今榊がどんな表情を浮かべているのかわからなかった。でも、決しているいい表情をしてはいないだろう。

今まで榊は何かと俺の言うことに対して反論してきた。

自信を持ち、確信を持って俺に反論してきた。

しかし今榊が、しかもうつ向いて一言も発さないということは、俺の言ったことに対して反論しない　いや、反論したくてもできない。

それはつまり。

榊は俺の言ったことを肯定したんだ。

努力の成果がなかったことを。

そして努力をすることを諦めたことを。

『………　って…うな…』

「え？」

『お前って言うなあ！！』

榊は突然うつ向いていた顔を勢いよく上げて、俺に向かって大声で怒鳴った。

「うわっ！！」

び、びっくりした…。

いきなりの怒鳴り声に腰が抜けそうになったじゃねーか。

「い、いきなりそんな大声出すなよ、ここ住宅街だし、それに今は夜なんだから少しは　」

『うるさいうるさいうるさい！！何回も言っているだろう！？あたしのことをお前って言うなって！！あんた何様だよ！？ちゃんと名前教えたんだから名前で呼びなよ！！』

榊は俺の注意すらお構いなしに、暴れるように叫び散らした。

榊とはついさっき出会ったばかりなので『今までの』という言い方に少し語弊があるかもしれないけれど、それでもこいつを会ってから今の今までこんな子供が駄々をこねるように怒ったのはなかった。俺の首を絞めたり、鋭い目付きで睨まれたことはあっても、まるで感情の制御が効かなくなったようにこんな小さなことで逆上することはなかった。

だから俺はそんな榊に少し驚いた。

『小さなことだって…？ふざけるな！！そりゃああんたからしてみ

れば他人を“お前”と呼ぶことに対して何も思わないだろうよ、それがあんたにとって あんたら有能な人間にとって当たり前のことなんだから。他人を“お前”と見下すのは当たり前のことなんだから！』

「い、いや、別にそれはお… 榊のことを見下すつもりで言ったんじゃないあ…」

そうだ、俺は別に榊を見下してなんかいない。

仮にそうだとっても認めちゃダメだ。

それを認めるということは。

『見下してるよ！！見下して、哀れんで、馬鹿にして、優越感に浸りながら自分の才能を無責任に披露して 無能な人間に見せかけの希望を与えるんだ』

「見せかけの希望…？」

『ああ、そうだ。ライブにしたって、動画にしたって“どんなに難しいフレーズでも練習をすれば必ずできるようになる”という希望を与えつつも凡人には到底たどり着かないギタープレイを涼しい顔でやってのけるじゃないか、このくらいは普通にできるみたいな顔してさ。心の中では『お前らにはできないだろう』ってほくそ笑んでるくせに。そしてそれに気付かず、ただ与えられた希望にすぎない無能な人間は、きつと自分にもできると信じて必死に練習するけれど、それは結局は自分の無能さを痛感させるだけで何の希望にもならないんだよ。希望になっているのは有能な人間だけだ。あたし達のような無能にとってそれは “絶望” だ』

……なるほど。

こいつの言っていた“無責任”の意味がようやくわかった。でも。

わかったただけだ。

同情なんて するか。

「そりゃあ見下されるわ」

そして俺は、榊を思いつき見下した。

ワンピースの蛇姫のごとく。

『あんたそれ、見下してるってより見上げてるんじゃない？』

「うるさい。今俺はお前を馬鹿にしたんだぞ？冷静に突っ込んでる暇があったら激昂しろよ」

じゃないと今いいところなのに話が盛り上がらないじゃないか。

『知るかそんな製作者の事情は』

メタ発言はやめろ。

とにかく。

「そりゃあ見下されるわ、そんな考えなら」

『そんな考えってどういうことだよ』

「そんなのお前の固定観念じゃあないか、もっと言うなら被害妄想だ」

『被害妄想だと？』

そう返してくる榊に、俺は一呼吸おいて言った。

「“どんなに難しいフレーズでも練習すればできるようになる”という希望の、どこに見下す意思がある？」

自分の言うことを言ったそばから否定してしまうかもしれないけれど、見下す意思が百パーセントないとは言い切れない。人は誰でも心の中に悪を持っているのだから。

でもそれは逆に言ったら“練習すればできるようになる”という希望も必ずあるということだ。

無能だろうが。

有能だろうが。

結局は“同じ人間”なんだから。

同じ人間である以上、希望なんだ。

そしてそれは 対等という意味だ。

「榊」

俺は、手元にあったギターケースからギターを取り出し、榊に差し出した。

榊は俺の行動に当然のように首を傾げる。

「俺にお前のプレイを見せてくれよ」

演奏のことを『プレイ』と言ったことに対しての恥ずかしさはあったけど、口に出てしまったのはしょうがない。

俺は格好つけたがりなんだ。

そんな俺に対して榊は、

『キモッ』

と初めて俺に笑顔を見せて、俺の差し出したギターを手にとったのだった。

こうして三話に続いた俺の話は、煮え切らない、何かよくわからない形で終わりを迎えて、俺は、首を絞められて生死をさ迷いながらも何とか無事に家にたどり着いた。家に着いた時にはもう夜の十時を過ぎてしまっていたが、その頃には両親はすでに寝ていたので（と言っても起きていても別に怒られたりしないのだけど）、物音を立てないようにして自分の部屋に入った。

まあ、くだらなく続いた俺のどうでもいい話にオチなんてものはないのだけれど、強いてつけるなら。

「あ、あのぉー、榊先生？」

『ん、どうした？』

「俺に、いや、僕にギターを教えてください」

『いいけど、住み込みで教えなきゃいけないの？』

あの卑屈で被害妄想の激しい金髪の女子高生の幽霊は、俺よりギターがめっちゃくちゃ上手かったということだ。

第30話 奇襲ですう（後編）（後書き）

「榊先生、寝るときは僕のベッドをお使いください」

「こいつ、あたしの演奏を聴いた瞬間にころりと態度を変えやがって…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5097p/>

Drastic Ghost

2011年10月10日03時23分発行